

663-55



1200501573082

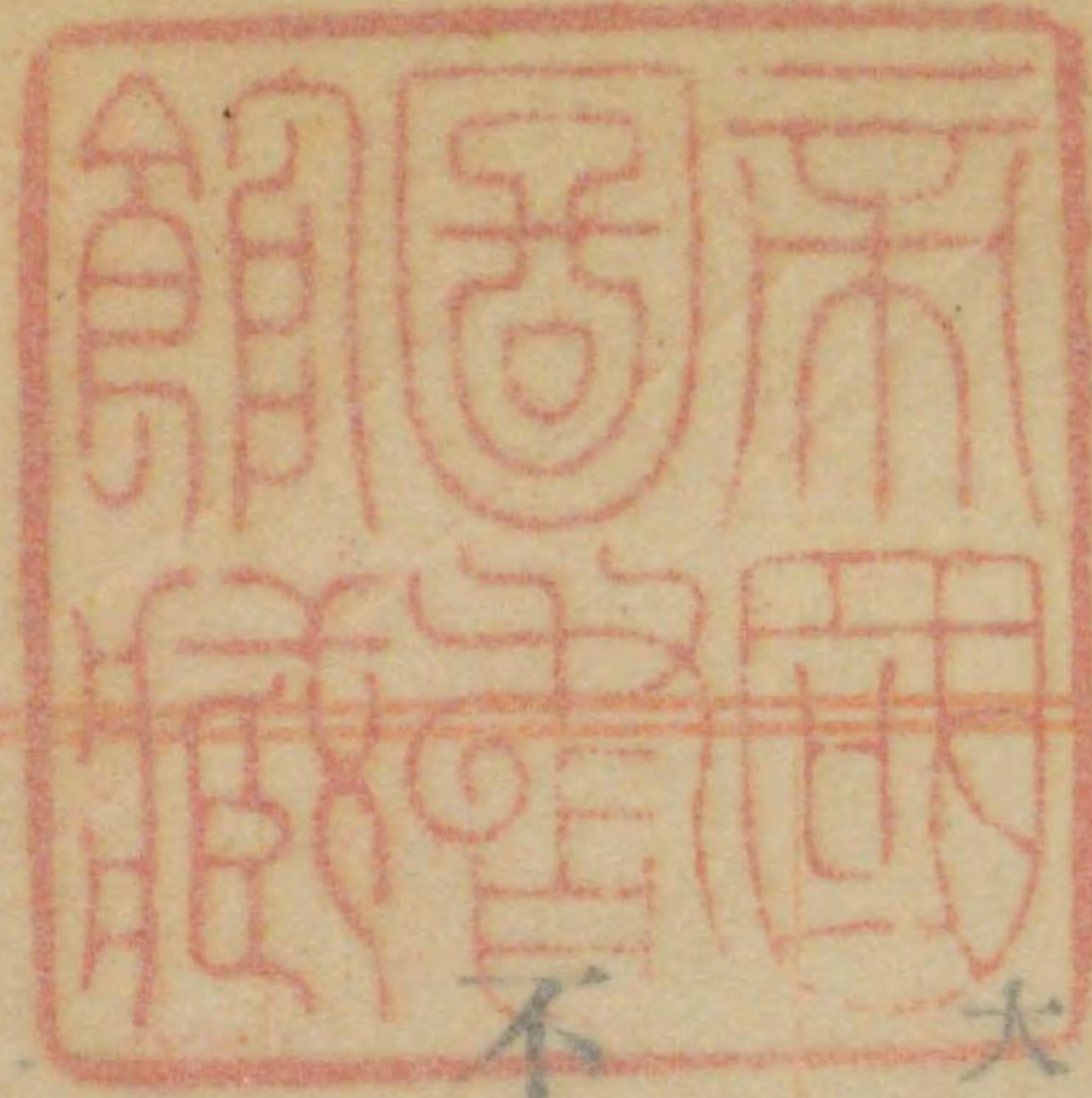
63

55

口
複
写



105



大島正滿著

不定芽

刀江書院





大島正滿著

不定芽

刀江書院



序にかへて

うすら寒い彌生半ばの日であつた。書齋からとび出て清らかな武藏野の空気を心ゆくばかり吸ひこんだ筆者の眼に、農家の籬を飾る黄金色の花が見えた。枝もたははに垂れ下つてゐる可憐なその姿、あゝ連翹である連翹である。梅と競ふて春を告ぐる花信の先がけ、まことに心にくきものゝ一つであつた。

連翹と云へば、昨年移り住んだ旭ヶ丘の居の片隅に、妹の家からその二株を移し植ゑたのを思ひ出した。花やほころぶと歩みを返して自らの庭にイんで見た。見上ぐる拍子に花もない葉もないぶつきらばうな枝と枝とが、ヒユツとおとづれた寒風にお辭氣をしてカタコトと觸れ合つた。「あの連翹は枯れてゐるぞ、邪魔になるから切つてしまへ」と、氣短かな老父が大鋸をかつぎ出した。「イヤまだ春が浅い、待て暫し」と押し止められて、薪をつくることに多大な興味を感じてゐた老父は不平満々であつた。五日過ぎ十日過ぎ、さては櫻花爛漫の候となつても、ニョキッと立つてゐるぶざまな枝に、何の生氣も湧き出なかつ

不定芽

た。たまり兼ねた宿のあるじは、或日ひそかにその一株に手をかけた。そして苦もなく引抜かれた連翹の、切りさいなまれた根の様を見てフツツと苦笑した。

「ヤア抜いたナ」と窓からのぞいてゐた老父は欣然と大鋸をかへ出した。寒い夜であつた、暗に聳ゆるストーブの煙突から、連翹の花の精か、黄色い煙がもくもくと湧き出て月娥のふところへと流れ去つた。

切角呉れた妹の好意を無にしてもと、邪魔にもならぬ庭の片隅に残した片羽鳥の連翹を、日に幾度となく見上げては鋸を撫する老父の姿が、今は笑ひ話の種となつた。櫻の花も散つて霏雨蕭々と降り込めた。「夫れ草木は雨露のめぐみ、養ひ得ては花の父母たり」と熊野の母が池田の宿より書き送つたその言の葉は今もまことか、見渡す限りの木々の梢が、雨を得て若翠すが／＼しき姿に立ち返つた。窓ごしにふと眺めた庭の連翹に、ポツンと緑の何ものか見える。慕ひよつて見上げて見ると、確に芽だ。長く眠つてゐた枝のそこ此處から、植物學者の所謂不定芽が、出てよいか出て悪いかを測り兼ねた態で、ソツと世の様を窺つてゐた。「お祖父さん來て御覽なさい」と叫ぶ孫に手を曳かれて、老父は敵とねらふ

連翹の前にイんだ。「オヤ出たナ、面白いところから不定芽が出たナ」とその昔植物學を修めたことのある老人がつぶやいた。そして「危い命であつたナ」とつけたしたが、生命があつたことを見出したその喜より、鋸を出しそこねた残念さの方が遙に大ききさうであつた。まことの春にめぐり合はなかつた仲間の一株が、一片の煙と化してしまつたのに引きかへて、慈雨に浴したその連翹が、今しやはらかい日の光に映えてすく／＼と伸び出した。然し燃え出づる芽の凡てが、定まつた部分から生づる定芽でなくて妙なところから出る不定芽である。伸びて枝となつても、花が咲くか實がなるか全く豫斷を許さない。されど一旦生を享けたからには芽は伸びる。意表外な場所に着生して意表外に生長する不定芽の面白味を感得して、老いたる者は朝な夕な彼の連翹の前にイんでゐる。

昭和九年初夏

旭ヶ丘にて

著者しるす

序にかへて

凡例

凡例

- 本書に収めた記事の二三は、嘗つて新聞雑誌に掲載したことのあるものであるが、散逸するのを恐れて茲に採録した次第である。
- 表紙の背文字は、著者の良き指導者である一門の長老長尾半平氏の筆になるものである。
- 表紙を飾つたのは、濠洲の特産であるクックバラ即ち笑ひ鳥の姿である。喉を通らぬ不定芽を啄んで、森のかなたで聲高く笑ひこけてゐることであらう。

隨筆 不定芽 — 目次 —

新島の小父さん……………一

新渡戸博士の書……………三

幼なかりし頃……………三

内村鑑三先生と自然科学……………四

熊ものがたり……………七

後の熊ものがたり……………三

父に聽く……………六

明治初年の頃——野球史の第一頁……………五

二つの途……………五

巢立ちせるもの……………六

氷の神様……………六

目次

目次

獨逸語を學ぶ……………九六

街の大時計……………七三

我等の夏目先生……………七九

博士の辭書——大根問答——江戸の敵を長崎——授業を休まない辯
馬食會の由來……………九〇

植物分類學……………九三

やまかゞしのゆくへ……………九六

顯然山上之城……………一〇二

超非常識……………一二

鬼將軍の科學……………一七

或る夏の夜……………二三

澎湖島素描……………二五

高尾懺悔……………三〇

目次

白切符の旅……………三六

ゾルダン博士に師事して……………四

頭の固いアガシー……………一五八

孰れが是孰れが非……………一六二

うそをつくワシントン……………一六五

ガーマン博士を訪ふ……………一六八

にらみあひ……………一七二

動物園めぐり……………一七七

猩々一升の糞となる——強暴な印度の猿——獅子に與ふる一片の肉——ヒツポホタームス
羅馬字論……………一八五

屍を馬革につむむ……………一八七

御旗のひかり……………一九四

或る日曜日の朝……………一九九

目次

六十歳の中學生……………二〇六

三崎の熊さん……………二〇九

魚界挿話……………二二五

うっかり眠れぬ沖の鷗——むこ泣かせ——損得無し——小判野郎——獨逸の鮎

甲斐のうつかひ……………二二二

天魚を求めて大和路へ……………二二六

室生川へ——吉野川を遡る——宮川の水源地——大臺教會長親征——突破す尾

鷲の險路

グッドロフファーザー……………二二六

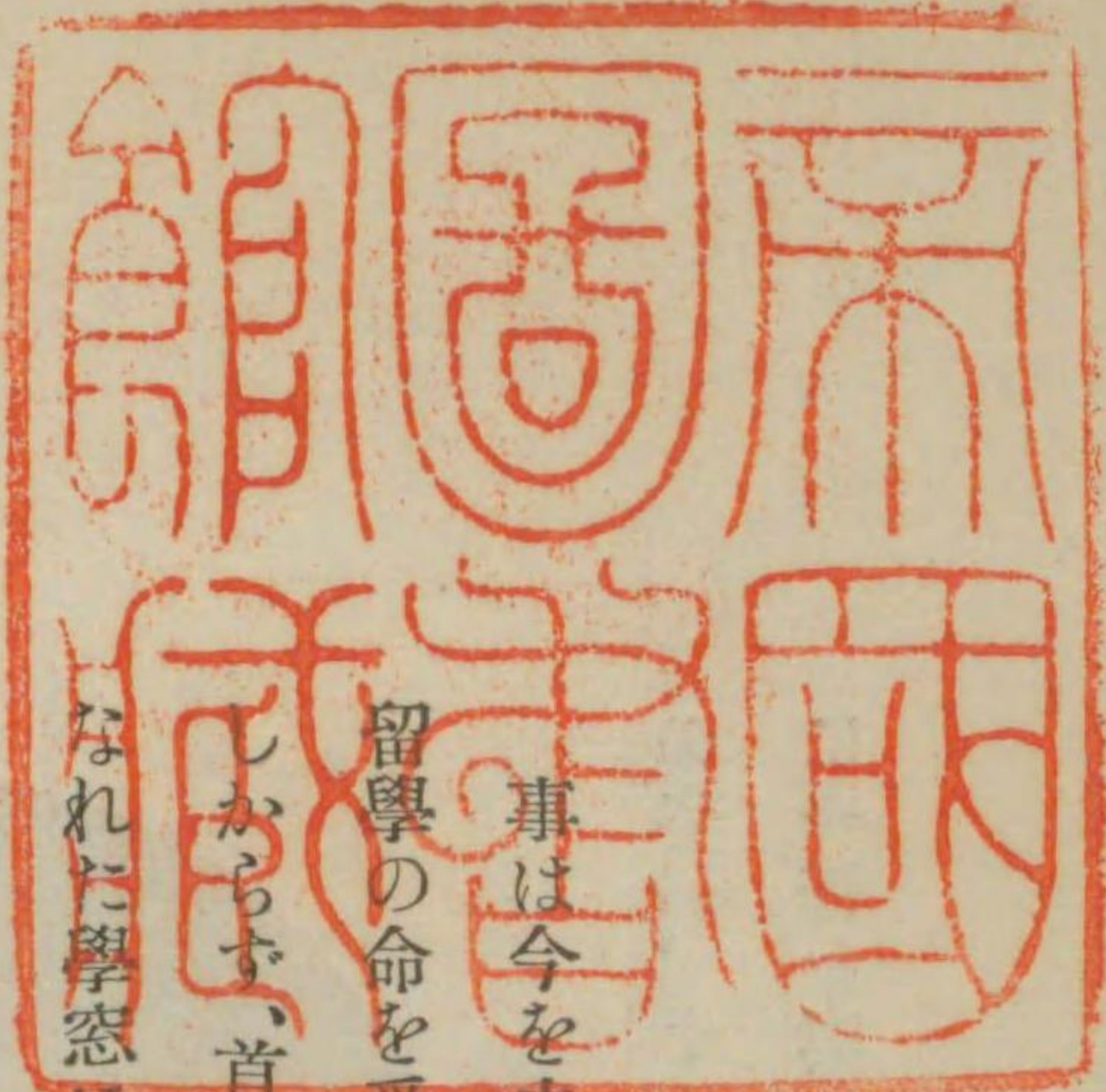
魚界の不良少年……………二四二

ナイアガラの匙……………二四七

親さよよ……………二五三

修學院の秋……………二六一

不 定 芽



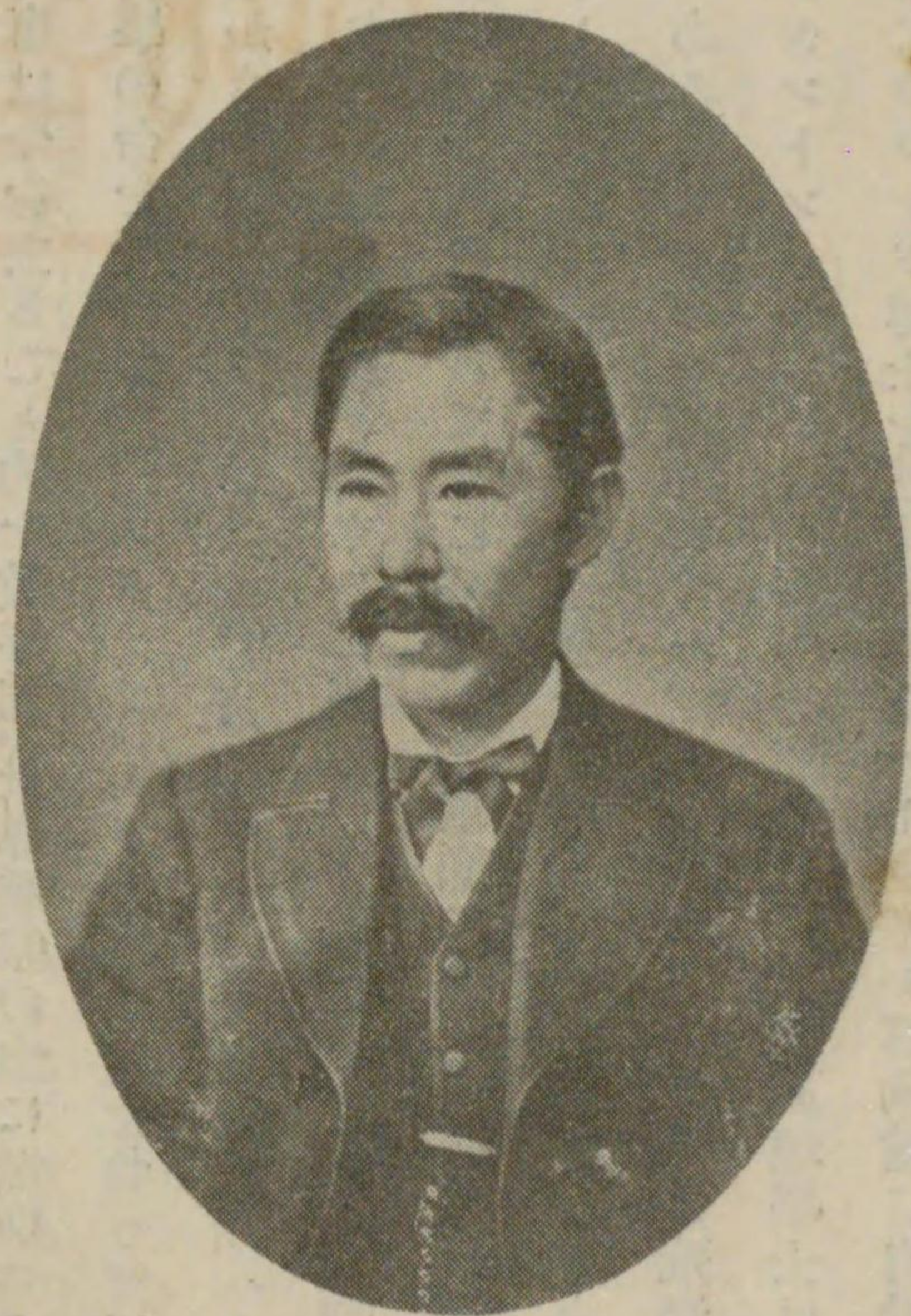
新島の小父さん

事は今を去ること約十數年前、世界戦争の血に燃ゆる千九百十八年の夏の頃に遡る。當時留學の命を受けて加州スタンフォード大學に笈を負うて居たM理學士は、一年有半の努力空しからず、首尾よく大きな論文を書き上げて東部諸州へと見學の旅にかしま立ちした。通ひなれた學窓に別れを告ぐるに際し、彼が師事した世界的魚學者ジョルダン博士は、手に餘る程の紹介状を認めて彼に手交し、童顔に笑を湛へて最後の握手をかはすと同時に、カーネギー博物館にホランド博士をおとなふことを忘るゝなど、わが子を送るが如くいひ足した。あるはミシガン湖畔にイミ、あるはナイヤガラの飛瀑を眺め、ボストン、ニューヨーク、ワシントンとつゝがなく旅程を經過して、彼M理學士は遂にピッツバーグに到着した。そしてホランド博士を訪問すべくカーネギー博物館に自動車を乗りつけた。

ホランド博士は有名な蝶類學者で、然もその大博物館の長であつた。何となく威壓されるやうな感じのする壯麗な玄關をくぐり、守衛に導かれて館長室の前に立つた若い理學士

新島の小父さん

は、暫したためらつては居たものゝ、心遂に決したか、手をあげて大きな扉をコツ／＼とノックした。



新 島 の 小 父 さ ん
(明 治 廿 四 年)

の姿が、すぐさま彼の眼に映じて來た。ホランド博士なのであらう、その老紳士は訪問者に一瞥を與へると同時に、手にせる紹介狀にジッと眼を注いで居た。

カム・イン！と答ふる低い然も力強い聲に引きつけられた訪問者は、つとドアを押して開いて一步を踏み入れたが、廣い室の片隅に大きな机を据ゑ、タイプストに何事かを口授しつつある白髪の紳士

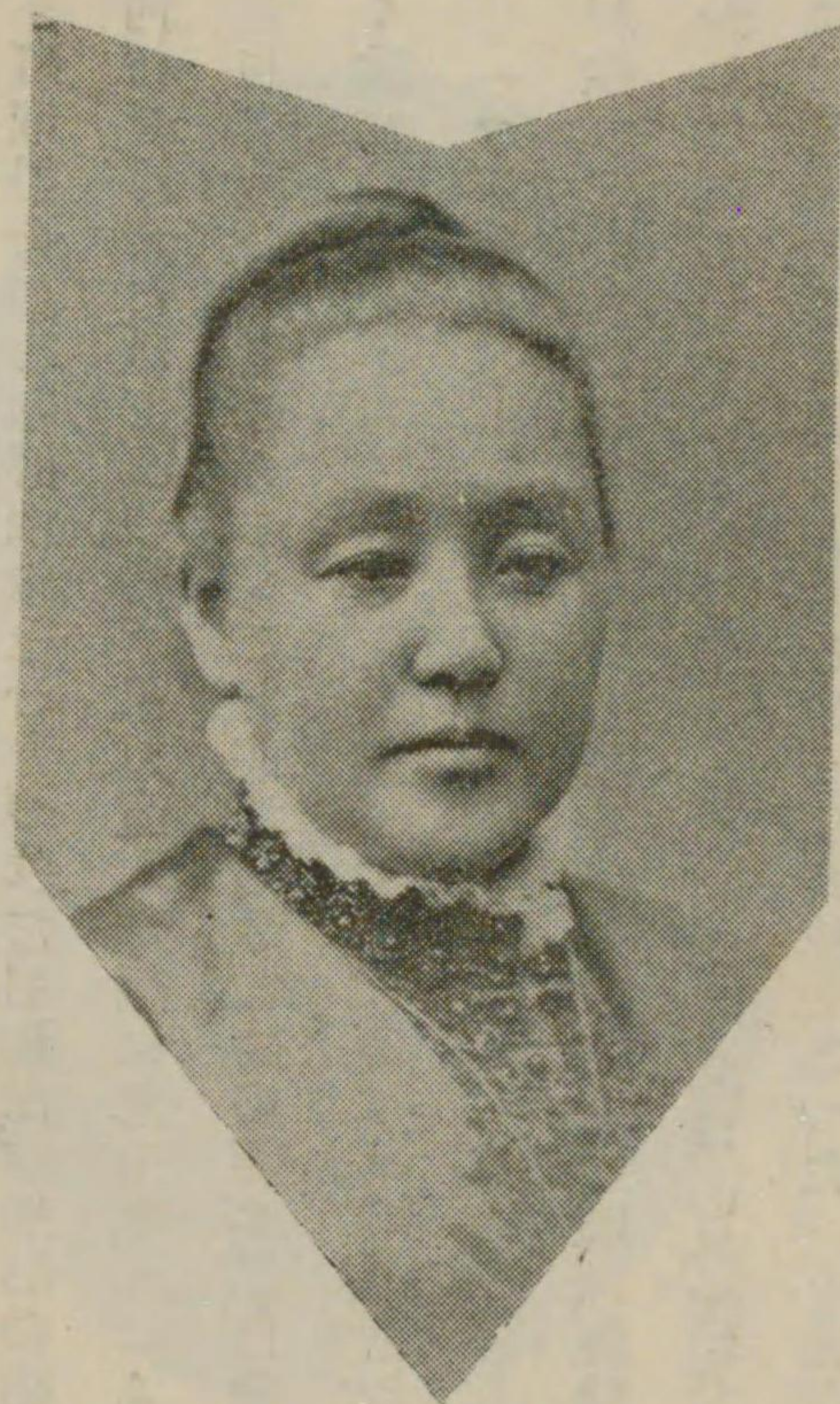
「その封筒には見覚えがある。わかつた、君はかね／＼ジュールダン博士の手紙で承知して居る日本のM君でせう。マアかけ給へ」

と一言も發しないうちに先方から口を切つて、そばにある椅子をすゝめてくれた。M理學士がこの博物館をおとづれた用務は、恩師の紹介によりてそこから自己の論文を刊行せんがためであつた。單刀直入、話は忽ち主題にふれたが、ホランド博士は先づ諄々として戦ひに災せらるゝこと甚だしき當時の經濟狀態を説いて話を巧にそらせ、それとなく論文刊行の不可能なことを匂はせて、さてと言葉を改めた。

「マアそんな状態で、折角の御來訪も無になるやうな次第じやが、わしはこれでも君達が生れない前の日本を知つて居るのぢや。その頃は鹿鳴館といふ俱樂部があつて、隨分をかきな催しをしたものじやつたが、當時訪日の外國人で、富士盤梯の山頂をきはめたのは、我輩を以て嚆矢とするやうな次第であつた。そんなやうなわけで日本とは大分深い關係がある私じやが、今日は一つ珍客への御馳走に、古い日本の話に加へて私が初めて會つた日本人の話をして聞かせる事にしよう……」

不 定 芽

さうく今から數へればすでに數十年も昔のことになるが、私が大學の助手として寄宿舎の二室を占領して居た頃のこと、或る日教授の一人がやつて来て、君は室を二つ持つて



新島の小母さん
(明治二十四年)

居るやうだが、一つ日本の青年を預つてくれぬかと、藪から棒のやうな話を持出した。物ずきな私は快諾して東洋の青年を引取つたが、室は二つあつても机が一つよりなかつた。そこで大きな机の

中央に白墨で線をひき、向うは日本、こちらはアメリカと宣言して、互に相對坐することとした。

處でその日本の青年は非常な傑物であつたよ。そして聖書を原語のグリーキで勉強した

いと程経ていひ出したので、日本語と交換といふ條件で私がギリシヤ語の先生を勤めたわけじや。あゝあの時の一青年その名は新島襄といつたが、中々のえら物じやつたよ……」
問はず語りに老博士は遠い昔を引出して獨り感慨にふけて居たが、新島襄といふ一語を不意に耳にしたM理學士は、飛び上がらん計りに驚いたと同時に、その眼は異様に輝いた。そしてなほ語り続けようとする博士をさへぎり、

「新島の小父さんなら、僕がよく知つて居ますよ。僕はその新島襄の寵を集めた子供であつたのです」

と進み出た。

「イヤ、齡が違ふ。君などが知つて居る人々とは年代が違ふ」

意外な話に聞耳立てた博士は、先づ一言の下にそれを退けたが、言葉短に知つて居るわけを物語るMの顔を穴のあく程眺めて

「オヤこれは實に珍しい日本人が來たものだ。それなら見せるものが澤山にある。サア宅へ、宅へ」

新島の小父さん

不 定 芽

とせき立て、玄關に立ち、横づけにされた立派な自動車に驚く理學士をおし込んで一目散に馳せ出した。

胸に大事を抱いて同志社をはぐくみ育て、居た新島襄氏が、病を札幌の郊外に養うて居たのは明治廿年の頃であつた。當時札幌農學校に教鞭を取りつゝ、クラーク氏の精神の權化ともいふべき獨立教會を牧して居たM理學士の父は、新島氏と肝膽相照らす間柄のこととて、何を語るか兩者の往來は可なり頻繁であつた。通稱滿坊で通つて居た當時のM理學士は、三つか四つのいたづら盛り、長男と生れて父母の愛を一身に集めてゐた身に取つては、唯我獨尊天下何物も恐るべきものはなかつた。

何者であるかは知らぬが、新島の小父さんも小母さんも、彼に取つては一向にこはい人ではなかつた。その結果天真を愛してわが兒の如くいつくしむ新島夫妻に對して、滿坊は王者の如く振舞つた。そして父母を驅使すると同じ態度を以てこの二人に臨んで居た。日を重ねるにつれて新島夫妻の寵はますます加はつたが、伴はれてその假寓に時を過ごす

ことの多かつた滿坊の横暴振は、日と共に益々つものつて行つた。

或る日のこと、小父さん小母さんは滿坊を伴うて散歩にと出で立つたが、「小父さんの靴ばかり光つて居て、坊のはきたないからいやだ」と小さい王者は頑張つた。「初まつたナ」と新島の小父さんは破顔一笑して早速上着を抜き棄てた。そして懸命に小さい靴を磨きあげて、「ソラどうだ」と指し示した。

暑い夏の日であつた。木影の少い創成川のほとりを、右左から手を取られて滿坊は歩を運んで居たが、そのうちには、たと歩みを止めて動かなくなつた。なだめすかす小母さんの甘言には乗らなかつた。玩具を買つてやるとの小父さんの術策もその効が現はれなかつた。困りはてた小父さんは、「それならこれか」といつて靜に膝を折り、その背を王者に向けて如何にと様子を窺つた。小さき者の顔にニコリと笑がたゞよふと見るまに、洋服姿の小父さんの背に滿坊は飛びついた。

傘をさしかける小母さんは聲をあげて笑つて居た。傷のある眉間のあたりから小父さんは玉の汗を流して歩を運んで居る。門をくぐる客の様を眺めた父母は、「又やつたナ」と叫

不 定 芽

んで入り来る新島夫妻と高らかな笑を取りかはした。

秋たけて林檎のみのある頃、なつかしい小父小母は遠い京都の邸へと引上げた。小樽で目についたといつて、小父さんは車のついた玩具を送つてよこしたが、朝早くからガラ／＼引廻されるので眠られぬとの苦情が書生の手から京都へと致された。「よし／＼」とこんどは立派な武者人形を送つて来た。それに添へて兩人自署の大きな寫眞が到来したが、雛段の中央にそれらを割り込ませてよき小父小母を偲ぶことを、小さい満坊は忘れなかつた。

時は過ぎて日清砲火に見ゆるの時が来た。なつかしい新島の小父さんを洛東若王寺山腹に送つてしまつた小母さんは、特志看護婦として廣島に活躍した。赤十字の徽章あざやかな雪の如き服をまとうた小母さんの寫眞を載いて、早物心のついた満坊は、如何に胸を躍らせたことであらう。あゝあの腕に抱かれて眠る傷つける兵士の幸福さよ、今一度あのふところにとは往年の夢鮮かによみがへつた満坊の胸に宿る願であつた。

故人となつた小父さんとの約束であつたのか、満坊の父は間もなく北海の地を棄て、同

志社の人となつた。そこで母や多くの弟妹を残し、十歳の春を迎へた満坊は獨り父に伴はれて京都へと移つて来た。小母さんはまだ廣島に御座るのか、寺町御門前のその邸はいつも窓がとぎ／＼れて居た。そのうちにクリスマスが来た。新島邸の隣に建つて居た洛陽教會日曜學校の生徒として満坊は立つて銀笛を吹奏したが、壇を下るのを遅しと待ち構へて居た中年の婦人が、「オヤ来たネ」と叫んでしつかと彼をだきしめた。あゝ小母さんだ、小母さんだ。その温顔を仰いで、満坊の眼からは玉のしづくがまろび出た。

そのことのあつたあけの日、久しぶりで窓をあけ放たれた新島邸に、はや高等一年生となつた満坊が姿を現した。玄關から「小母さん」と叫ぶ聲に應じてまろび出た新島夫人は「先生の机の上に飾つてある寫眞の主が来たよ。満坊が来たよ。みんな來て御覽」と家中の人を呼び集めて珍客をとりまいた。

「それ、これが小父さんの御居間ですよ」と導き入れられた主なき室の一隅に立つた小さい客は、生けるが如き小父さんの寫眞に對して更に眼をその机上に轉じて見た。あり

不 定 芽

し目をそのまゝに、一糸亂れざるデスクの上に、洋服姿の己が寫眞が飾られて居るではないか。手をのべぬかしら、背をむけぬかしらと、ジッと壁の寫眞を見つめて居る間に、小母さんはデスクの上の寫眞と客の姿と小父さんのその大きな寫眞とを見較らべて、ソッと涙をぬぐはれた。

「サー若王寺へ行きませう。小父さんを喜ばせてあげて下さい」

といはるゝまゝに、滿坊は又新島の小母さんと同車して東山をおとづれた。呼べども聲なき墓石の前にぬかづく兩人の姿を、小父さんはどこから眺めて居るのであらう。問へども答へぬ墓畔に立つた小母さんは、

「襄が達者で居たらばネー」

とかすかな言葉を洩らして、又連れだつものゝ姿をジッと見入つて居た。

ピッツバーグの町を遠く走り出た自動車は、やがて立派な邸宅の前へピタッとどめられた。ホランド博士の住居であらう、博士はツカ／＼と中に進んで家人に晝の用意を命じて

居たが、聞けば避暑中の由とかで家人は一人も居なかつた。M理學士となつた滿坊は、狐につまゝれた様な心地で、客間に控へて居たが、やがて姿を現した博士の手には、古色蒼然たる往時の日記がほの見え、机の上には新島襄の寫眞が數々現れた。

脱走當時のものもある。京都時代のものもある。思はぬ處で思はぬ記憶を呼び起こしたM理學士は、感慨無量といふおももちで眺め入つて居たが、老博士はやがて日記を取り上げ、先に話した机に白線をひいたあたりを事細かに読み上げた。

御機嫌になつた博士は食事を認めつゝ得意の平和論を高潮し、*“Love is more powerful than hate”*只この一事を記憶してピッツバーグ訪問の記念とせよと、若き理學士の胸に或る熱火を注ぎかけたが、會談終つてまさに辭去せんとする學士の肩を叩き、

「よし、論文は引受けた、すぐ原稿を送り給へ」

いとMに取つては夢かと思はるゝ一語をさゝやいた。その意を解し兼ねてたゞすんで居る學士の様子を眺めた老博士は呵々大笑した。そして更に明瞭に、

「カーネギーで出版をひき受けた」

新島の小父さん

不 定 芽

といひ足した。

あゝ新島の小父さんが守つてゐる。小父さんが手をひいてあるいて居る。昔の満坊に立ち歸つたM理學士は、胸に問ひ胸に答へて心の限りホランド博士の好意を謝したが、感謝の言葉を受けた博士は、

「ドーイタシマシテ」

と意外な答へをした。そしてこれは新島から習つた日本語の一つじやと笑を浮べていひ足した。

新渡戸博士の書

Mの父と同窓でありまた同じ札幌農學校に職を奉じてゐた新渡戸の小父さんが、碧い眼の小母さんを連れて札幌へ歸つて來られたのは、Mが顔を墨だらけにして伊呂波を習つてゐる頃のことであつた。長いアメリカ生活にすっかり日本の字を忘れてしまつた小父さんは、札幌へ歸るや否や昔の寺小屋生活を思ひ出して伊呂波を習ひ始めたとのことであつたが、時折Mの父をおとづれる毎にMの頭をなで、
「良い兒だからお清書を御見せ」と云ふのがその常であつた。そして「ウンうまいナ、小父さんの方が負けたナ」と云つて退却する日が度重なつた。

その頃Mの住んでゐたのは博物場の正門の前にあつた黑板塀をめぐらした家であつた。碧い眼の小母さんがもの珍らしかつたMとその弟妹は、腕を組み合つて歩いて來る新渡戸の小父さん小母さんの姿を遙かかなたに見出だすと、門のわきにあつた板塀のふし孔に眼を押しつけてかたみはりにのぞいて見ることにしてゐたが、知るまいと思つてゐた小



親しき人々

・氏三鑑村内・士博造稻戸渡新・士博健正島大りよ右
氏隆一藤伊
は藤伊・島大友舊の幌札たつ集に邸士博戸渡新)
(生業卒回二第は村内・戸渡新。生業卒回一第

母さんが、チャーンとそれを記憶してゐたのには驚かされた。と云ふわけは、その後年を経て一高の健兒となつたMが、小日向臺町の新渡戸邸を訪ねた折のこと、昔ながらの小父さんが「やーよく来たナ、大きくなつたナ」と云ひ乍ら手を叩いて小母さん呼び出した。長く見ぬ間に髪が大分白くなつた小母さんが應接間にMの姿を見出したその瞬間、*Oh! One of the big eyes!*と叫んで小父さんと顔を見合はせ、何を思ひ出しかしげしげとMの眼をのぞき込んだ。「ソレ札幌時代を知つてゐるだらう。あの時ふし孔からのぞいてゐた大きな眼の一つがやつて来たナと云つて小母さんが笑つてゐるのサ」と云つて小父さんは愉快さうに手を打つて笑ひこけた。

時はめぐつて昭和何年かになつた。丸ビルに書畫の即賣會があつたのをのぞき込んで来たMの家人が、夕餉の食卓で新渡戸さんの書が賣り物になつて出てゐましたよと報告した。聞き耳を立てゝゐたMの父は、「何!! 新渡戸の書が、これは驚いたナ、値はいくらとついでゐた? ウン三圓か、高いナ」と苦笑を洩らしてゐた。その翌日父は事の眞偽

不 芽 芽

を確めんがためにノコノ丸ビルへ出かけたが、「賣れてしまつて無かつた。あの悪筆を買ふ人があるから妙だナ」と鳩が豆鐵砲をくらつたやうな顔をして歸つて來た。

それから暫して新渡戸博士を校長とする或る學校の同窓會が開かれた。今は博士の肩書の所有者となつてゐたMは、その會に招かれて新渡戸の小父さんと肩を並べて食卓に着いたが、テーブルスピーチの先陣を承つた吉野作造博士が、「御馳走になつて悪口を云つてはすまぬが、この學校の生徒の答案は悪筆揃ひで讀むのに大層骨が折れる。讀んで貰はねばならぬ答案なら讀めるやうに書いてはどうか」と大分辛辣にこき卸した。第二陣を仰せつかつたMは「勇將の下に弱卒なしと云はれてゐる通り、三圓の値しか出ない書を書きながら校長さんの弟子だから悪筆なのは當然である。世界的に有名な新渡戸博士もその昔は自分よりもまづい伊呂波を書いたのだから、その後書は上達してゐない筈だ」と小父さんの往時をすつば抜いた。ところが小父さんは卓を叩いて奮然と立ち上つた。そして「新渡戸稻造今日ほど甚しい侮辱を受けたことは無い。僕の書は三圓だと云はれたが十圓の値は

確にある」と自信があるらしい口調で語り出した。

「僕が田中館君と同車して東海道を西下してゐた時の事であつた。何を感違ひしたのか列車ボーイが立派な紙に筆を添へてやつて來て何か書けと云ふ。僕は書を書いたことがないから眞つ平だと陳謝につとめたところが、田中館君が横から口を出し、「僕も書くから君も一つ書くとするサ、兩名で合作としよう」と云ひ出した。それは面白からう、それならばと云ふので僕は有名な達筆をふるつたが、田中館君は勿論ローマ字で何とか書きつけた。

そんなことは全く忘れてしまつた或る年のこと、知人が訪ねて來て、白山御殿の古道具屋に僕と誰かとの合作の書が賣物に出てゐると云ふ話をした。いくらに値がつけてあつたかと尋ねたところが、「十圓でした。安ければ買つて置かうと思つたが、高過ぎると思つたからやめました」とその男が云つたので、僕も「それは高いナ」と合槌を打つた。

然し賣られるやうな能筆の書を書いた覚えもなし、且つ又合作などを試みた記憶もないので一寸狐につまれたやうな感じがしたが、そのうちに列車ボーイの姿が眼に泛んで來た。そして奴さん賣つたナと第六感にピンと來たが、その客は更に語をつぎ、「道具屋の

主人が申しますには、この軸物の書き手が一人なら廿圓の値があるが、邪魔な書が附随してゐるばかりに半値の十圓にしか踏めないのだと申しました」とつけ足した。「何!! 邪魔なものがある計りに十圓安くなるのかネ、一體どちらの書が邪魔になると云つてゐた?」先生の手で「よ」と客はニヤ／＼笑つてゐた。「それ見給へ田中館單獨なら廿圓で僕の書が加はると十圓に下落するのだらう、だから僕の書は確に十圓の値があるのだ。それに三圓とは不届千萬だ」と小父さんはわざと威だけ高になつてMをにらみつけた。

話はまだ続く。

「僕が字が下手だと云ふことは定評があるから敢て辯解はしないが、僕よりもまだ拙い人が天下に一人あるから僕は安心して書を書く勇氣が出るのだ。その一人とは今僕に侮辱を加へたM君のお父さんだ。この人は有名な言語學者で知つてゐる必要のないむづかしい漢字を知つてゐる點に於ては天下無敵だと思ふ。僕は學友として平素大に敬服してゐるのだが、その書と來ては確に三圓以下だ。然し僕が漢字を知らないのに大膽に筆を振ふのを

Mの父子が笑ふのなら、それはどうも致し方が無い。」

江戸の敵を首尾よく長崎で打ちとめた新渡戸の小父さんは、何を思ひ出したか温顔に微笑を泛べながら語り出した。

「僕は或る時青森縣の片田舎に旅して村長さんの宅に客となつたことがあるが、酒嫌ひ女嫌ひの僕を遇する途に頭を悩ました村長さんが、夕餉のお給仕に實に愉快な人物を侍らした。それは盛装した婦人であつたが年は幾つと聞いたら三つと答へた。良い子だと頭をなでたらお給仕がチョコナンと僕の膝の上へ乗つてしまつた。村長さんはいたく恐縮して娘をたしなめてゐたが、僕はマア／＼となだめながら楽しい食事を認めた。

家族的な待遇にスツカリ悦に入つた僕は、その夜は足腰を伸ばして寢に就いたが、翌朝目さめていざ出立といふ間に、羽織袴で威儀を正した村長さんが、立派に表装した大きな額を持ち込んで來た。大敵御座んなれと身構へては見たが、夜來の好遇に身動きがとれず、差し出す筆を握つて何とか認めねばならぬこととなつた。まゝよと「心外無別法」と妙な句を書きつけ、逃ぐるが如くそこを辭したが、自動車にゆられ乍ら考へて見ると、無と云

不 定 芽

ふ字がどうやら淋しかつたやうに思はれた。そこで同行の者にソツと尋ねて見たところが、「成程あれは無と云ふ字ですか、下に四つ點の無い無の字に似た妙な字は何と云ふ字か伺つて見やうと思つてゐたところです。」と美事に僕を射すくめてしまった。

立派な額を臺なしにしてしまつた新渡戸稻造と云ふ男を、村長さんはさぞかし怨んでゐるだらうと思つて今でも氣の毒でたまらないが、こんな話なら山程あるよ。

「矢張り或る處で字を書かされた際に、舞と云ふ字の下半分を落してしまつたので、書き直さうかと云つたら、依頼主が結構ですと云つた。そしてつけ加へて云ふには、

「うそ字を書いてあるところが新渡戸先生の眞筆である證據になります」と。

厚顔な僕もこの挨拶には痛み入つた。そしてその失策だけは長く肝に銘じてゐたと見えて、後日訪ねて來た文部省の某局長に困つた一例としてその時の一部始終を語り出した。

ところが話半分にして、その局長さんが下を向いてクス／＼と笑ひ出した。その様子が唯事でないやうに思はれたので、さてはと直感した僕は、敵の肺腑を突いたつもりで、君もやつたナと突貫して見た。ところが肝をつぶした局長さんが、「イヤ違ひます違ひます。」

私の家の乳母が、先生と同じ字を書いたのですヨと釋明した。

長く局長さんの家にゐた乳母が暇をとつて國へ歸り、恭しく暑中見舞をよこしたが、その手紙の中にあつた見舞の舞と云ふ字が盡く下半部を失つてゐた。それと同じ字を僕が書いたと聞いて局長さんは、腹をかへて笑つた次第であつたが、して見ると僕の素養も乳母の程度かも知れないよ。

僕は學者ではない、専門は何もない、僕の學問は云はゞ雜學だ。これがお役に立つて日米をつなぐ太平洋の橋となり得るならば、字は下手でもよい、僕は安んじて瞑目するよ。」と小父さんは話を結んだ。

あの人を引きつけるなつかしい新渡戸の小父さんの姿が、今はこの世に見られないこととなつた。きらめくものを浮べてかなたの空を見つめてゐるビツグリアイスの一つを、小父さんは今どこから眺めてゐるのであらう。いつくしみ深き天父の側にいつもの溫顔が見える。良き戦を闘ひ終つた勇ましかりし戦士の上に、神の恵とはに盡きざれ。

不 定 芽

幼なかりし頃

父と母と幼き弟妹と、笑ひさぶめいてゐた月の夜、窓から馬がニユッと顔を出した。風の日ごと、四斗樽に何杯と盛り上げられるうれた林檎の始末に困じて街路にコロ／＼と投げ棄てた。生を享けた北海の天地は、今にして思へば眞にパラダイスであつた。あの純眞な自然が私をこれまでに育て上げて呉れたのであつた。

その頃のこと、家には杉村と云ふ書生がゐた。豪放濶達な性質に似もやらず、狭い室一杯に珍奇な昆虫を貯へてその道にいそしんでゐた。或る日家のおさんが捕へた鼠の死骸を彼は所望した。そして右に鼠左にこもをひつさげて近所の草原に出かけて行つたが、彼の足もとには黒眼がちなかしこそうな坊ッちゃんがチョコ／＼と随つてゐた。人なき草むらの中に鼠を伏せてこもを覆ひ、黙々と歸りを急ぐ杉村の所作を解し兼ねて幼き者は、ソツトその顔を仰ぎ見たが、彼は意味ありげに笑を泛べたまゝ一言も答へなかつた。

二三日過ぎたある夕、杉村は行かうと聲をかけた。こもをはぐつたその瞬間、杉村の眼

は異様に輝いた。見も知らぬ虫がゐる!! 虫がゐる!! 鼠の腐臭を慕ふていづくよりともなく集つた珍らしい昆虫の群!!

その日杉村は鼻高々と手に入れた珍種の多くを人に示してゐた。仲間の一人は垂涎三尺の態であつたが、ハタと膝を打つて私をさし招いた。そして杉村が虫を採つた場所を知つてゐるかと話しかけた。「知つてゐるとも、僕が連れて行つてやらうか」と得意満面の坊ッちゃんの後について彼は現場へやつて來た。

次の日のこと「おれも採つたぞ」と杉村の面前へ珍種をつきつけてゐる彼の姿を見た。杉村は高い鼻を折られてにがい顔をした。そして側に立てる坊ッちゃんを流し目に見てキッとにらんだが、そのことあつて以來杉村は坊ッちゃんを誘はなくなつた。

ありし日の杉村は本邦昆虫學界の總帥として押しも押されもせぬ地位に經のぼつた。そして彼を惱ました坊ッちゃんも、見やう見まねが昂じて杉村の行くあとを追ひかけた。

幼なかりし頃

不 定 芽

内村鑑三先生と自然科学

札幌農學校で内村鑑三氏を基督教に引き入れたのは、上級生であつた私の父である。しかして父と内村氏とは、幽明界を異にするまで無二の親友であり、五十有餘年間の心の友であつた。「昔僕が君の家をたづねた時、産婆が來て君の母さんの腹をさすつて居たよ。その時の子供が君だからナー」とは、私の顔を見るたびに先生ではない内村の小父さんが大きく笑つて述懐される言葉であつた。

高等學校を卒へて理科大學に入學した私が、はからずも動物學に志ざすと聞いた小父さんは、ある日私を書齋に呼び入れてありし昔を語りだした。「僕は札幌農學校を卒業した當時、日本の生命は水産にありと考へた。そこでまづ農商務省の役人になつて重要魚族の研究に着手した。最初上司から命ぜられたのがフグの調査であつた。僕は一生懸命をやつたよ。粉骨碎心の結果は殆んど間然するところなき報告となつて上司の手許に提出されたが、君よく記憶してくれ給へ、水産界の元老といはれた上官が、それを奪ひ取つて己の業

績として發表してしまつたよ。眞面目にやつた僕は上役にしてやられたのだ。僕の怒は心頭から發したよ。そして水産學をサラリと投げだしたが、今でもフグを見ると腹が立つ。君は僕の棄てたものを拾つてくれるのか。有難い。大にやるべし。然し大きな面をしてをさまつてゐる泥棒には十分に備へよ」と。

又ある日のこと、同窓の親友宮部金吾博士を引き合ひに出し、「いつぞや宮部が僕を實驗室に連れ込み、面白いものが見えるとして顯微鏡をのぞかせた。見終つた僕は顯微鏡下にヒューマニティーは見えぬかと質問した。ところが驚くではないか、信じきつて居た宮部が、そんなものが見えてたまるものかとカラ／＼笑つて僕を一蹴した。顯微鏡下に神の國が見えないなら學問はやめた方がよい。君わかつたか」と、一段と力をこめて語られた。

内村の小父さんの書齋には、宗教書と共に魚學の本が幅をきかせてゐたのを知る人は少なからう。彼は思索に疲れた頭を常に自然科学でいやしてゐたのである。それを知つてゐた私は、時折自らの研究論文や著書を送つてゐたが、讀破して見た小父さんは、あのむづかしい顔に笑を浮べ、我が子に對するが如き態度で感謝の意を表された。

内村鑑三先生と自然科学

不 定 芽

私の仕事を理解し、常に精神的に鼓舞することを惜しまなかつたよき指導者は、善戦よく宣教者としての務を果してにはかに姿をかきつけた。星は落つ秋風五丈原とでもいはいはうか、基督教界の巨星既に墜ちて轉た寂莫の感を深うする。

熊 も の が た り

こゝは札幌を東南に去つた草深い篠路の里、切り倒された巨木が散在して居る移民村に淡い春の日が暮れ去つた。家とは名ばかりの掘っ立て小屋に、あか／＼と燃ゆるるりの火をかこんだ誰かれ、残んの雪に萌え出づる若草に力を得てしきりに笑ひさゞめいて居たが、メリ／＼と音がしたと思つた其瞬間、寒風颯と頭上を襲ふて、藁屋の屋根が無雑作に引きはがされた。壁に手をかけて下をのぞき込んだ黒い大きな顔に、

「熊が来た……ッ」

と覺えず炬火を振り上げて一同が立ち上がった。

焰の光と阿鼻叫喚の人の聲に驚いたのか、星あかりに爛々たる眼をかゞやかせて居た怪物は、次第々々にあとすさりして暗に其影をひそめてしまつたが、一同が胸なでおろす暇もあらばこそ、燈火明滅するかなたの森の一軒屋に突如けたゞましい叫び聲が湧き起つた。

むしろ戸をかゞげて暗に一步を踏み出さうとした主人が、戸外にひそむ大熊の一撃を蒙

熊ものがたり

不 定 芽

つて昏倒した。悲鳴に驚いて駆け出した女房に追ひすがつた熊は、脊にした幼児を奪ひ取り、更に女の頭髮を引つ掴んで頭皮をはぎ取つた。

冬籠りに餓ゑた大熊が荒れ狂ふ篠路には、連夜かくした惨劇が繰り返された。棄て置き難き民の嘆きに、遂に屯田兵が出動を命ぜられた。大和魂をこめた銃先には、北海の荒熊とて何條双向はれやう。時來つて其死骸は遂に札幌博物場(現時の北大附屬自然博物館)にいたされたが、敵や來れと腕を撫して居た農學校學生の一團が、歡呼の聲をあげて解剖刀を取りあげた。見る／＼皮は剝がれて剝製教官の手に移つたが、其眼を掠めて一塊の肉を切り取つた學生の誰彼が、休憩を宣してそつと小使部屋に雲がくれした。

やがて熊の肉が炭火の上にかざられた。醤油にひたすもの、ほうばるもの、忽ち餓饑道そのまゝの光景が現出したが、眼を白黒して上下兩顎を嚙み合はせて居た一同の口から

「くさいナー」

「かたいナー」

と云ふうめき聲が異口同音にほとばしり出た。然し我慢強い一人が、

「うまいナー」

と叫んで嚙み切れぬ肉片を嚙み込んだ例に習ひ、一同は恐る／＼熊肉を胃の腑に收めたが、師の呼ぶ聲に、凡ては又立つてメスをふるひ出した。

食道に續いて大きな胃の腑が現はれた。元氣よく刀を入れた學生の一人が、力を込めて胃壁を断ちわつたその瞬間、ドロ／＼と流れ出た内容物と共に、なま／＼しい赤子の腕が出た。女の長い黒髪が出た。まつた食はれた男の頭が出た。

學生はワツと叫んで飛びのいた。そして土氣色になつた熊肉黨が、驚く教師の制止も聞かばこそ、脱兎の如く戸外へ飛び出した。そして口に指を押し込み、眼に涙を浮べてそこ此處で行はれた人工嘔吐術の實演。

「熊の肉は酔いナー」

「くさいナー」

熊ものがたり

不 定 芽

「君!! あれは固かつたナ」

と一夜某所に集ふた當時の學生が語り出た。

その熊は今の北海道帝大附屬博物館の陳列棚に收つて芳名を長く後世に傳へてゐるが、語り合ふた熊肉黨の一人、即ち今は齡古稀を過ぎて頭に霜を戴く札幌農學第一期生の一人が、恩師クラーク先生が、

“Boys be ambitious!”

の言を残して島松驛頭に別れを告げしその折の光景を想起し、筆を取つて次の如く認めた。

懷クラーク先生

青年奮起立功名 馬上遺言籠熱誠

別路春寒島松驛 一鞭直蹴雪泥行

後の熊物語

明治廿七年八月廿二日、磁氣觀測のため北海道の山野を跋涉しつゝあつたN・I兩理學士が、馬に引かせた大行李とはぐれて人跡絶えた山路に迷ひ出た。コンパスの長いのと短いのが次の宿までと息をはづませて歩を運ぶうちに、日はトツプりと暮れはてゝ、あやめもわかぬ暗夜が襲ふて來た。處は十勝の奥、行くては熊の名所。しまつたと思ふまにいつしか道を踏み誤つて、雜草たけよりも高く生ひ茂る隘路に踏み込んだ。大柄なI理學士が杖で草をかきわけつゝ先に立つた。先達を見失つては一大事と、觀測主任のN理學士があへぎくそれに尾したが、行くこと數町、Iの振りかざした杖が胸よりも深い草を左右になぎ倒したその瞬間、足もとからフィンといふ勇壯な鼻息が鳴り響いた。さてはと石の如く立ちすくんだ兩人の姿を怪しと見てか、敵は又フィンとあたりを嗅ぎわけた。なまけなや熊の餌食かと息の根もとまりかけた二人のまなこは眞にくらんだのか、來た道と行く手との辨別がつかなくなつた。前後の孰れが元來し道かゝわからないので、逃ぐるにも逃

後の熊物語



く 嘯 は 熊

げられず、暗にヂッとイんで敵の様子を窺つたが、「まてくあはてるべからず、相手が人間様だとわかれば熊公も恐れを抱くに違ひない」とIがさやくので、よし来たそれではとNは口笛を吹く役を承はつた。然し毛を吹いて傷を求むるとか、さては弱敵人間かと飛びつかれてはとの懸念から、N理學士は最初先づあるか無きかの音を立てた。耳をすまして見ても何等の反響が無い。こわく短くヒューツと吹いた。口笛の音のみあたりに鳴り響いて静寂な暗に凡てがつままれて居る。然らばとこんどは兩指を口に押し

込み二聲三聲渾身の息を吹きこんで鋭い長音を吹き送つた。鼻いきをあびせかけた敵は何處へ身をひそめたのか、萬籟聞として應ずる何物もない。後退!! と叫んで長脚のIが目散に走り出した。Nも劣らじと其あとを追ふたが、「崖だぞ!!」と叫んだIの聲が耳に響いたその瞬間、谷底へころがり落ちて龜の子のやうに手足をもがいて居るIの腹の上へ、Nは折り重なつて墜落した。

勢よくのしかつて来たのが小男であつたばかりに、Iは第二の命をつなぎとめたが、顧れば跡を追ふて来る敵もない。そしてすぐ足もとには電柱が立ち並んで居る本道が見える。折から沛然と降りかつて来た猛雨を事ともせず、再生の喜に眼をかがやかせた二人は章駄天走りに馳せ出した。見れば行くてに橋の無い川がある。山川の常か早や濁浪うづまきて滔々の音を立て、居るが、身を挺して渡らねば身を全ふすべき術が無い。「よし俺が瀬踏みをする」と云ひ棄て、赤裸々のIが早瀬に飛び込んだ。暗に彼岸は見えわかぬが、進めば進むほど深くなる。水は臍をひたし胸をひたしはては肩を越える。「N君!! 駄目だぞ水が頭上を越すぞ!!」と叫んでIは引き返した。そして「水泳を知らぬ小男にはまるつ

不 定 芽

たナ」と呟き乍ら河畔に露營と決心のほぞを固めたが、篠つく豪雨は勢を増すばかり、濡れに濡れた兩人は暖を取るべきすべもない。夜が更くるに従つて寒氣は遠慮なく襲ふて來る。畢世の智慧をしぼつて兩人は樹の枝を折つた。そして頭上の崖にそれを突き差し俄造りの傘下に身をひそめて雨を避けることにしたが、背と背とを密着させて圓くなつて居る兩人の頸筋へ、雨滴は遠慮なく流れ込む。「I君!! 背はうまく合はぬものだナ」とNがつぶやけば、「あたりまへさ、君の頭が僕の肩に到達しないのじやもの」とIがやり返す。然し再生の喜に兩人は襲ひ來る寒さを忘れて長い夜の明くるのを待つて居たが、雨の音を破つて突如向ふ岸にけたましい水の音がした。そして暗にもしるき黒い巨體が、ザンブ／＼と川を渡つて來るのが明に眼にうつる。「又熊だ!!」とIもNも異口同音に叫び出した。そしてNはこゝぞと計り再び口笛を吹きならしたが、今度の熊には一向それがきゝめが無い。吹いても吹いても敵は浪をわけて進んで來る。再生の喜も束の間、兩人は再び絶對絶命の窮地に陥つたが、何を思ふてか熊は河中に靜止した。敵とにらみ合ふた長い長い不安の一夜は漸くしら／＼と明け放れたが、熊が口笛に驚かなかつたのも其道理、夜目



後の熊物語

に熊と見たのは一かゝえもあらうかと思はるゝ巨大な流木であつた。クロノメーターをしつかと頭上に結びつけ、ともすればまるび勝ちなNの手を握つて、Iは早速濁流を徒涉したが、暗に深しと見て引き返したのは岸を去ること僅か二三尺の地點であつた。兩人は行くゆく路傍にしつらへたアイヌの雨宿り場を見た。等しく樹葉で屋根を葺いてはあるが、枝は凡て斜に下に垂れて居る。

「成る程!! 屋根は斜に葺かねば雨を防げぬナ」と、物理學上の大眞理を發見してN理學士は感服した。

昭和三年四月四日の夜、榮ある明日の行幸啓を迎へまつらんとて、油壺東大臨海實驗所に宿つた禿頭のIが、「N君は熊に食はれそこねて屋根は斜に葺くべきものであることを發見したのだよ」と、傍でニヤ／＼と笑つて居る小柄なNを指して物語つた。Iとは有名な地震博士、Nとは今は東大の名譽教授として收つてゐる物理學界の長老であるが、話に聞きほれて居た學生の一團は、覺えず哄笑一番、老眼鏡をかけて新聞を読み出した兩教授に盛な拍手をあびせかけた。

後の熊物語

不 定 芽

父 に 聽 く

筆者の父は札幌農學校第一期生の一人で、傑物クラーク先生に親しく教を受けた仲間である。七十有餘歳の今日でも、尙矍鑠として書硯に親しんでゐるが、折にふれては昔を回顧して面白い話をポツリ／＼と語り出す。耳にしたその昔語りの一つ二つを、父に代つて茲に認めて見る。文中私とあるのは文學博士大島正健のことである。

明 治 初 年 の 頃

散髪頭を叩いて見れば

文明開化の音がする。

チョン鬚頭を叩いて見れば

因循姑息の音がする。

とは明治初年の青少年の間に恐ろしい勢で流行した歌であつたが、一般人士が然く西洋

文明を謳歌するに至るまでには、中々面白い経緯があつたものだ。

かく云ふ私は、其當時十歳そこ／＼のいたづら盛りであつたが、文明開化に於ては中々人後に落ちなかつた。寺小屋の先生に、チョン鬚を頭に戴くのは因循姑息と教へられた其足で早速床屋に押しかけ、母がきれいになでつけて呉れたチョン鬚をプツンと切り棄て、來たが、それを見た家人の凡ては、「何てなさないことをして呉れた。坊主頭とはなさない」と、涙を流さんばかりに嘆き悲しんだ。

然し斷髪に於ては村の先驅をなした私は、内心大に得意であつたが、そこに又村中をひつくり返させる様な騒動が持ち上つた。と云ふのは、太政官の布達により、村に學校と云ふものが設けられ、少年共は義務教育を受けねばならぬことゝなつた。ところでそこへ雇はれて來た先生が、又文明開化の親玉であつた。着任早々一わたり鼻たれ小僧の頭を見廻はして居たが、其翌日から大きな鋏を持つて物かげに身をひそめ、靜に何物かをねらつて

父 に 聽 く

不 定 芽

居た。無心の生徒が登校すると、やにはに飛び出る巨人の手がシツカとたぶさを捕へ、チヨキンと計りにチヨン鬚を切り棄て、しまう。生徒は泣く、親はわめく、一時は中々の騒動であつたが、因循姑息はいつとは知らず文明開化に征服されてしまつた。

生徒一同の頭を強制的に丸めてしまつた學校では、やがて算用數字の教授が初まつたが、異人の文字を教へるとはけしからんと反對が村人の間に盛に唱へられ出した。中には、一體異人が文字を左から右へと横書きにするのが不都合だ。巻き紙へ手紙を書くのにどうする。あの長い紙を一旦終りまでひろげて横に書き初め、又巻き直しては次の行を書かねばならぬ不便さを忍べるかとどなり込んで來た頑固親爺もあつたが、時を経るに従ひ、苦もなく米の俵數を數へる算術と云ふものを生徒が會得する様に成り、地面に一寸數字を書いただけで、すぐに加減乗除の答を出す惡たれ小僧の輩出し出したのを見て、父兄の態度は俄に一變し、「異人の學問でもあれはよい」と誰云ふとなく唱へ出し、世は便利になつたと悦服した。

便利と云ふ言葉は其頃初めて生じた流行語で、便利々々と世の人が異口同音に叫び出したが、日をよけるにも雨をよけるにも便利とあつて、今で云ふマント當時はトンビと呼び習はした外套が大に流行した。處で文明開化とは云ふものゝ、西洋の慣習を其まゝ取り入れるのも癢の種であつたと見え、日曜を休むと云ふ歐米の慣習に従はずに、一の日と六の日とを休日とすると云ふ案が一時實行された。當時の民謡に

一六ドンタク大市場

トコとんびの大はやり

と云ふのがあつたが、之は當時の有様をありの儘に表現して居る。

太陰曆を太陽曆に変更した際の民の不平は中々に烈しいものであつた。「何ぼ禁裏様でも、正月を一ヶ月繰り上げさせるとは亂暴至極の振舞だ。將軍様はこんな亂暴はなさらねーが、あの冠をかぶつた公卿共が惡いのだ」と、騒ぎまわつて居た村人の顔つきが、私

父に聽く

不定芽
には今尙マザ／＼と窺はれる。

私の生地は横濱から往復の出来る相州の片田舎であるが、父なる人は村を代表する文明開化の親玉であつた。今で云へばハイカラ好みとでも云ふのであらうか、横濱へ出かける毎に異人の道具を持ち歸つた。或る日のこと得意満面でランプをさげて來た。そして行燈の明るさと、ランプの明るさとの相違を説き出した後、父は早速實驗に取りかゝつたが、明るい筈のランプがすこしもその光を放たなかつた。放たぬも道理、燈火をとぼすのに必要な石油の存在を父は知らなかつた。ランプ計りを持ち歸つて文明開化の腰を折られた父のしほれ加減、今思ふても呵々大笑せずには居られない。

其當時村では虫送りと云つて寺の鐘をつき鳴らし、村民一同かね太鼓で田圃を歩み廻る一つの年中行事があつた。斯くすれば害虫は驚いて逃げ失せるとの迷信を抱いて居たが、附近に鐵道が敷設されて汽車が通過するやうになつた其際、村民一同の間に容易ならぬ殺

氣が漲ぎりそめた。異人の車の走る大振動で、稻にたまつた露が落ちる。文明開化は我等の稻を枯らすぞよとの叫びが烽火の如くあがり出した。それを聞いた私の父は靜に膝を乗り出した。「村の衆!! 汽關車が走る毎に鳴るあの鐘の音が聞えぬか(當時の汽關車は汽笛の代りにベルを鳴らしたものだ)。文明の賜だぞ。頼まないのに虫送りが出来る。喜べ今年は豊年だぞ!!」と。今から思へば愚にもつかぬ説明を試みた父の一言に、村人の憂愁は忽ち一掃されてしまつた。開化にあこがれて居た當時の人の心は、それ程簡單であつた。

或る日のこと、父は横濱から絹張りの洋傘を持參して村人に示したが、そんなうすい布で雨が防げるかと冷笑して誰一人賛意を表さなかつた。然し、文明開化宗の父は衆愚の攻撃に屈せずして其効を述べ、雨をよけ日をよけ天氣の日には杖になると連りに洋傘の徳をたゝへて居た。

雨は果して洩らなかつた。番傘に較べて輕快なのを目撃した村人は、遂にオヤ便利だと叫び出した。

父に聽く

不 定 芽

忽にして洋傘が侵入した。それと前後して父が輸入した毛布も時計も、又須臾にして人の必需品となつた。人々は異人の文物に多少の反感を抱いて居たものゝ、實用に適すると云ふ一事は凡ての障害を打破せずには置かなかつた。

科學のたまものは斯くして私の生地を席捲した。今にして思へば其凡ては遠い昔の夢である。元氣よくチョン髷を切り棄てた當時の私の胸にすら、科學の花咲く今の世は其幻影だにも宿らなかつた。

野 球 史 の 第 一 頁

時は明治維新となり、廢刀斷髮が強行されて文明開化に陶醉する世が示現した。村の寺小屋に代つて小學校ができ、東京から血氣盛んな先生が來て洋算と云ふものを教へる時代がめぐつて來たが、祖先傳來の土地を分つて分家させるよりも、學問をさせて偉い人間にする方が、眞に子を愛する道であるとその先生に説きつけられ、尤もだと合點した父はその先生につけて、私を江戸に送り出した。

時は明治六年であつたが、約八里の道を歩んで江戸入りをした私は、すぐさま牛込の逢坂學校に入學し、その寄宿舎に起居して勉學することゝなつた。

その頃神田一つ橋に英語學校(後の大學豫備門)と云ふのがあつて、開成學校即ち後に大學南校と呼ばれたものと隣り合はせになつてゐた。英語學校を卒業したものが開成學校に入學する順序であつたので、開成學校の生徒の方が、英語學校の生徒よりは年長であつた。私は明治八年に、英語學校の最上級に入學し、その翌年開成學校に入學すべきであつたのを、當時北海道に新設された札幌農學校の生徒募集に應じ、同校第一期生として札幌に赴いたのである。明治八年と云へば東京と横濱との間に鐵道が敷設されてから間もない頃であつたので、次のやうな文章を綴つて所謂蒸汽車に乗る感想を述べたことがある。

蒸 汽 車 に 乗 る の 愉 快

「余曾て横濱に遊ぶや、蒸汽車をかつて行く。余此時始て蒸汽車なるものを睹たり。因て大に驚いて曰く、何の神にして能く之を爲すか、或は又洋人の魔術に依つて而して之を行ふか、何ぞ其れ疾きこと如此なる。傍に一人あり、余を目し笑て曰く、甚しいかな

父 に 聽 く

不 定 芽

君の愚なる。是れ蒸汽車にして而して文明諸國の用ゆる者也と。余大夢の始めて覺むるが如く、茫然之を久ふす。頃刻にして其速なる恰も飛鳥の空中を翱翔するが如く、人にして身に翼あるかと疑はる。之に依て旅する時は百里の遠きも一瞬にして達すべく、倫敦の大名巴里の美も唯數日にして見るべき也。余此に於て始めて蒸汽車の便にして且つ其利あるを覺ふ。汽車行くこと數里忽ち横濱に達す。」

その頃米國の教師が故國から持つて來たボールとバットを提供して開成學校の生徒に野球を教へて呉れたが、垣根の間から夫をかいまみてゐた英語學校の若輩も、見やう見まねで野球をやるやうになつた。我等は市内の靴屋に命じて皮を縫はせ、その中に色々なものを詰めて飛んでもない大きなボールを作つたり、中心に鉛の塊を入れた素敵な球を作つたりしたが、「一撃風を生ず」と云ふやうな文句を彫り込んだ手製のバットを力限り振つてカッ飛ばした球を素手で受けることの痛いこと、私の指の一つはその時の野球戦のお蔭で永久に曲がつてしまつた。

ところが開成學校には、その仇名をマグネットと呼ばれた猛者がゐて、どんな強球でも美事に受け止めるので名高かつた。マグネットとはどんな球でも素手で吸ひ取ると云ふ意味であつたと記憶するが、兩校の生徒が時に喧嘩をやつて石の投げ合ひをやると、マグネットが出て來て、飛んで來る石を兩手で受けとめた。

その頃の開成學校には、仙石貢、井上哲次郎、牧野伸顯等の諸氏がゐるが、英語學校の下級の教官として洋行歸りの高橋是清氏の名があつたのは、今昔の感に堪へない。

開成學校との喧嘩で思ひ出すが、或る雪の日に英語學校側から挑戦して雪合戦を始めたが、その日は文部省から大臣だか次官だかであつた花房義質氏が開成學校を視察に來るこゝとなつてゐた。折悪しく雪合戦がたけなはなところへ乗り込んで來たので、垣根越しに英語學校側から打ち込んだ雪球で、花房氏は帽子をはね飛ばされた。先生怒るまいことか、嚴重な抗議を申込んだので、開成學校から英語學校へ猛烈な苦情を云つて來た。

我等の野球は開成學校から傳染したものであつたが、そのうちに、鈴木と云ふ人と、服部一三氏とが、米國からボールを携へて歸朝した。校庭で兩人がその球を投げ合つて見せた

父 に 聽 く

不 定 芽

り、ルールを教へたりしたので、野球熱は益々盛になつた。

丁度その頃、芝の御成門に札幌農學校の前身とも云ふべき開拓使假學校と云ふのがあつた。これは明治四年に創設されて一旦廢校となり、明治六年に改めて開校されたのであるが、茲に收容されてゐた生徒の中で、伊藤一隆、荒川重秀、小野兼基等が札幌農學校の第一期生に加はつた。

その假學校は明治八年に札幌に移されて札幌農學校となつたのであるが、明治六年に開成學校に先んじ、開拓使假學校の校庭に於て、早くも野球が始まつてゐたのであるから、これが日本に於ける野球史の第一頁であると思ふ。

當時大藏省の雇であつた米人ウヰリアム氏の甥に當る假學校の英語教師のベーツ氏が、非常な野球の熱心家で、本國から持參した三個のボールと一本のバットとを大切に所有してゐた。ところが相手が無かつたので、假學校の生徒達にゲームの方法を教へ、進んで生徒間に二つのチームを組織して、毎日放課後に校庭で對戦させてゐた。そしてベーツ氏自ら審判官となつて、愉快氣に校庭を駆けめぐるのを常としてゐた。

ベーツ氏が、英語を解する力の不足であつた生徒達に、こみ入つた野球のルールを教へ込むだけでも大變であつたに相違ないが、技術上の要點や妙味を呑込ませることは、一層容易でなかつたに相違ない。手眞似足振りでそれを説明されるその苦心は、なみ一通りでなかつたさうであるが、今から考へるとさもありなんと思はれる。

ところで幸にも、開拓使から米國へ留學させてあつた數名の少年が呼び戻されて、假學校に入學することになつた。それ等の人々は孰れも米國で野球をやつて來たばかりでなく英語も達者になつてゐたので、彼等がチームに加はつてからは、瞬く間に大進歩を來し、コーチヤとなるベーツ氏を驚喜させた。

當時ゲームの用具は前記のボール三個と一本のバットがあつたばかりで、他に何物も無かつた。そこで素面素手で勝負を争ふことにきまつてゐたので、試合の際には硬い球が當つて往々負傷者が出た。そうかうするうちに、三個のボールの内二個は破損したので、残る一個は非常に大切なものとなつた。

然るに或る日の試合に、米國歸りの一人がカッ飛ばした大飛球は素晴らしいもので、球

父 に 聽 く

不 定 芽

は外野の天空を越えて遠く校庭外に飛び出した。唯一のボールを失つては大變と云ふので、打つた當人も他の選手も、青くなつて校門からとび出し、大捜査をやつて漸く探しあて、一同関の聲をあげて喜んだ。

この事があつてから後に、ボールは靴屋で造らせ、バットは棒屋で造らせることにしたが、共に不完全極まるものであつた。素手で球を捕へることに惱まされた連中は、擊劍の籠手をはめたり、黒塗りの胴を着用したりしたが、籠手は手先の運動が不自由で球がつかめず、胴は身體の屈伸を妨げると却つて不便を感じるなど、色々な奇談があつた。

その後ベーツ氏は突然死去したので、一時野球熱も下火になつたが、その時の選手であつた伊藤一隆や小野兼基などが、札幌農學校の第一期生として入學し、英語學校から入學した私共の連中と一しよになつた爲に、札幌農學校に於ては、開校當時から野球が盛に行はれた。當時コーチャーをつとめたのは、クラーク先生と一しよに來た植物學及び化學の教師ペンハロー先生であつた。

今や日本全國を擧げて野球狂燥時代を現出してゐると云つてもよいが、今日七十歳を超

えてゐる私共のやうな老人が、指頭が永遠に曲るまでボールに親んだ時が既に五十年前にあつたと云ふことを知る人は殆んど絶無であらうと思ふ。

二 一 つ の 途

美術の秋が来た。今年も亦石山平三の「風雨の後」と題する畫が群を抜き、洋畫では只一つ宮内省御買上げの榮を擔うた作品として世の視聽を集めることゝなつた。新聞が始めてその吉報を齎らした際の竹馬の友Mの心の喜。そも之を何に譬へよう。

忘れもせぬ彼が佛蘭西から歸つて處女作を帝展に出品した時のことであつた。若き理學士Mは秋の日ながを縁側に寝そべつて新聞を読みふけつてゐた。そこへあたふたと下駄の音も輕やかに歸つて来た彼の母が、格子戸をガラリとあけるなり、「石山の白菊が特選だよ。とてもよくつて離れがてなであつた。お前も早く行つて御覽よ、あの腕白小僧がよくもあれだけの腕になつたものだネ」と我子の出世を喜ぶが如く晴れやかな言葉を投げかけた。行かすんばあるべからずと取るものも取りあへず上野に駈けつけたMは、帝展の門をくぐるなり、他の出品には目も呉れず、まつすぐに目ざす場處へ突き進んで石山の作の前にイんだ。特選と記された出品白菊の清楚なその姿。多年佛蘭西で磨きあげたその腕のさえ

が専門違ひのMの眼にも明らかに意識された。

中學で机を並べて騒ぎまはつた親しき友の姿は見えねどその魂のこもつた氣高い作品!! それをジツト見まもるMの眼がしらは何となく熱くなつて来たが、匂ゆかしき白菊の一輪がいつしかニツと笑む彼石山の顔に變つてゐた。「オイ石山!!」とMは覺えず呼びかけたが、まぼろしと現じた友の姿が契機となつて、青丹よし寧洛の都を二人してあばれ廻つた若かりし日の有様が、走馬燈の如くMの眼前に浮び出た。

その昔Mの父は古都の中學の校長を勤めてゐた。大佛のほとりにあつたそのすまひの奥まつた土間の片ほとりで、中學一年になつたばかりのMが澁々家中の洋燈の掃除をしてゐた際、表に人力がとまつて客のけはひがした。玄關番もその職務の一つであつたMは、石油だらけの手をふきふき玄關に駈けつけてガラリと格子戸をあけたところが、ふとつた中年の婦人に手を引かれて人力車から下り立つた利發らしい少年の姿が眼に觸れた。互に見合はす一双の眼、兩者の視線がかち合つたその瞬間、この二人の間には互に融け合ふ何物

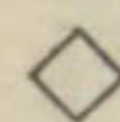
不 定 芽

かが流れ初めた。云ふまでもないこれが始めて相まみえた彼石山の姿であつた。彼は幼くして京都同志社の幼年校に送られ、朝な夕な相國寺の鐘の音を聞いて學びの窓にいそむ身となつてゐたのであるが、持つて生れた茶目振りを餘りに發揮する罰はてき面、舎監の手におへないと云ふ理由を附せられて放校處分を甘受せねばならなくなつたのであつた。彼の性は然し善であつた。まことに朗らかな少年であつた。獨り子の前途を憂へてMの父にすがつて來たその母の心を汲み取つて、Mの父は快く石山を己が主宰する費の校門に迎へ入れた。斯くしてMと石山とは同じ教室に机を並べて奈良を背景に活躍の第一頁を繰りひろげることになつた。

不良少年ではないから校内誰一人として石山を惡む者はなかつたが、彼の思ひきつたわるさにはすべての人が惱まされた。彼は不思議にも裸體になる癖があつて、赤い猿又一つでよく鐵棒にブラ下がつてゐた。校門をくぐり乍らチラとその姿をにらんだ校長が、「オイ石山!!」と注意すると、へへへ……と笑ひながら、どこを風が吹くかと云ふ調子でイ

んでゐる。寛恕な校長のうしろ影を見送ると、又一しきり大振り蝦上り、彼は鮮やかな曲線美を校庭の一角に浮べて、こんどはヒラリと屋根にとび上がる。そして目ざす瓦を一枚一枚めくつて雀の巢を征伐する。赤い猿又の影が網膜に映つた體操教官が、コラッ!と大喝一聲して軒下に駈けつけると、ましろの如き石山は棟を越して他の側に身を轉じ、鬼瓦の間から顔を出して手を叩いてゐる。

「また石山か」と教員室の話題を提供しない日はなかつた。小僧にも只一つ取柄はあつた。それは天品の畫才が彼に備はつてゐたことで、豆腐を常食としてゐるが故に號を東浮と呼んでゐた圖畫の先生が、石山の畫には常に妙々と云ふ評點を與へてゐた。



舎監の手にあまつて寄宿舎から追出された石山は、同氣相求むるMの家の近處に下宿することになつた。束縛を脱して自由の身となつた彼はこんどはMの嗜好に引きづられて金魚や小鳥を愛づることになつた。こり性の二人は僅の小遣錢を身につけて、金魚の産地として有名な郡山へ徒歩で出かけて行つた。そして琉金や獅子頭などの稚魚を求めてその變

不 定 芽

體振に興味を湧かせるまでになつたが、熱が高まるに連れて見るものが何でも欲しくなつて來た。猿澤池に群れる色とりどりの鯉、これも手に入れて見たくなつた。五重の塔のほとりにある瓢箪池に浮ぶ美事な金魚、これも亦我家のものとしたくなつた。二人は智慧をしぼつて人の目につかないテグスと小さな釣針とを用意した。そして公園看守のすきを窺つて池のほとりに近づき、池邊の草にテグスを結びつけて餌をつけた鉤をソツト投げ込むことにした。二人は程近い緑の丘の上に寝ころんでまじろぎもせず水面を見つめてゐる。やがて波紋を描いて赤いものが近づいて來る。焦點を集めてゐた草が勢よくお辭氣をして水中で右往左往にゆれる。ニッと笑つた石山が、こんどは眼を皿のやうにして四方を見廻はし、人影が無いとソレツと合圖をする。脱兎の如く走り出したMが、ピチ／＼と跳る獲物を握るなり懷中にねぢ込んでしまふ。三尾四尾とたまると二人は矢のやうな速度で駆けて行く。ほど近いMの家にたどりつくなり石山は水を汲む。Mは獲物をつかみ出す。元氣よく泳ぎ出す魚の姿を眺めて、「面白かつたナ」と石山が先づ自畫自讚する。

悪事千里を走るとかや、このやうなわるさが何で知れずにあるものか。Mの母が、近頃

Mの衣類が魚臭いと云ひ出した。そして或日のこと枕邊に脱ぎ棄てた愛兒の着衣を丁寧に疊んでゐた際、ふところの内側に夥しい魚鱗がこびりついてゐたのを見出した。ねぼけ眼をこすつて起き出したMの鼻先にその着衣をつきつけた母が、「Mやこれは何ですか」とたしなめた。石山との共同策戦を聞いてあきれた母が、「石山は兎に角お前は父の名を恥かしめぬやうに」と涙を浮べてMの顔を見まもつた。

「あぶないからやめにしよう」と宣言した石山は、今度は方向を換へて様々な小鳥を飼ひ始めた。日を経るに隨つて野鳥を捕へることに興味が轉じて來たのはよいが、Mが霞網を所持してゐたのを幸ひ、春日山や若草山の奥深くわけ入つて、繡眼兒や四十雀などを捕へる手だてを講じ出した。勿論それ等の地域は狩獵禁斷の官林であつた。然し禁を犯すところに興味を感じる若人の通有性が働いて、Mは甘んじて石山の助手となつた。

時は菊香る天長節の日であつた。石山が自慢の繡眼兒を籠に伏せ、鳥もちを懷に忍ばせて二人は若草山の奥、鶯の瀧附近へとわけ入つた。コンモリ茂つた杉の茂みを、キリ／＼

不 定 芽

くくと高音を張つて渡り行く繡眼兒の群に、ソレッとはごをはつてをとりを手ごろの枝にかけた二人が物かげに身をひそめて息をこらす。暫らく様子を窺つてゐた石山の繡眼兒が一聲高くチューと鳴いた。それに應じてチュウくと應答する聲が聞えたと思ふ間に、早くもはごにかかつてジタバタするものが現はれた。

ソレッと飛び出した二人が、手を伸べて可憐な獲物を握つた刹那、天より降つたか地より湧いたか、靴音高く坂路を登つて来る森林看守が現はれた。路は只一筋、青くなつた二人は校名を表はす帽章を手で覆ひながら、何もかも打ち棄て、一目散に逃げ出した。げげんな顔をした看守が石山の繡眼兒籠を見出して口惜しさうにコラッと怒つたその折には、二人の姿は三笠山の谷に消えてゐた。

三笠山の鞍部にたどりついて、恐ろしかったかなたの森を眺め入つた石山は、「つまらん天長節やナー」とつぶやいた。「一つこの枯芝に火を付けて見ようか」と云ふが早いか全山芝で包まれた三笠山の裏手に彼は火をつけた。立ちのぼる一抹の煙が峰を渡る烈風にあふられたと見る間に、炎々天をこがす紅蓮の焔が立ち上つた。あはを喰つた石山とMとは、

後門の虎をたたき伏せんがために、足でもみ消したり、ころく火の上をころがつて見たりしたが、火勢は中々に衰へなかつた。狂氣したやうになつた二人は萬策つきて其朝着おろしたばかりの羽織を抜いだ。そして力の續く限り芝をたつき廻つたが、羽織の焼こげと引換に、さしも猛威をきはめた山火事が治まつた。

散々の失敗にこりくした二人は、三笠山を馳せ下りて五重の塔のあたりから後を振り返つて見た。山頂を黒く染めて苦戦の跡が二人の眼にはありくと見えるではないか。ギョツとした石山が、「火が奈良から見える方に延びないでよかつたノー」とつぶやいた。

根が善良で畫才に恵まれてゐた石山は、押しも押されもせぬ洋畫界の重鎮となつた。そしてその友Mは、金魚や繡眼兒を友とする趣味が嵩じて動物學を専攻することゝなつたがMが學位をとつたと聞いて「偉い者になつたナー」と心からの喜を述べて呉れたのは、石山平三畫伯であつた。

その石山畫伯が結婚した。然もそのベターハーフが數學専門の女の理學士であると聞い

二 つ の 途

たMは、飄逸な石山が數學家を迎へて營んでゐる愛の巢を見たくてたまらなくなつた。遂に機會が到來してその家に客となつたが、どこで名畫を畫くのかアトリエも何もなかつた。

「これが君の巢か、一體畫はどこで畫く？」と眞面目に尋ねるMの顔を見て、石山はカラカラと笑つた。そして「畫きたいと云ふ意志が動いた時にどこでも畫く。だから一ヶ月旅行をしても一枚も畫かないこともあるのじや、職業意識が働いては純な畫は畫けんからナ」と彼は述懐した。「では君は常時レシーヴァーを耳にあてゝ呼出し局の名を注意してゐる無線技師のやうなものだナ、呑氣さうに見えるが天籟の聲を聞く苦心は又一しほだナ」とMが同情するそのあとを引取つて、「インスピレーションが來たその刹那を感知し、無念無想でキャンバスに對するやうに仕向けるその苦心が大變ですよ」と妻なる數學家が云ひ添へた。途は二つのやうであるが決してさうでない。自然の聲を聞いて眞理を探るものゝ心境と、純なる畫家のそれと、全く選を異にするやうであつて決して然らずである。その夜石山夫婦とMと枕を並べて寢に就いたが、電燈を消したその瞬間、石山が手をさしのべてMの鼻をつまんだ。「この野郎!!」とMが叫ぶのを耳にした石山夫婦がクス／＼と

笑ひ出した。畫伯も博士も何もない、矢張り三笠山を焼いたその二人であつた。

「風雨の後」の御買上げを喜ぶ者が茲に一人居る。家族一同でことほぐから出て來いと申し送つてやつた。二三日したらあご鬚をしごきながら石山がやつて來た。「あゝうまく書かれては來んわけにはゆかん」と云つて、Mの顔を見るなりニヤリとほゝえんだ。

不 定 芽

巢立ちせるもの

横濱と程ヶ谷との間を列車が走るごとに、Mは延び上がつてかなたの丘の上を見る。通學當時の泥濘を思はせる赤土まじりの道路が、税關山の頂からいつもこなたをのぞき込んでゐるそのあたりに、Mの母校横濱一中の屋根が見える。

日露戈を交ゆるに至つたその前年、Mとその同窓三十有餘名が、初めて巢立つ雛としてその校門から送り出された。入學試験てふ悪魔のあざとを、その教へ子等が如何にしてぐり抜けるかと、喜悅と不安との交響樂をかなでつゝ卒業證書を授けた校長の姿が眼に映つる。母校の興廢この一戦にありと堅い決心を浮べて袂を分つた學友の面影が胸に浮ぶ。

流轉幾年人世の戦に戦ひ疲れたMは、あまりのなつかしさに、或日汽車を乗り棄て、ト母校をおとづれた。昔は恐ろしかつた校長室のドアを、力強くノックすると、聞き覚えのあるやさしい聲が、「おはいり」と答へた。扉をあけて半身を乗り入れたMの姿が眼に入つた聲の主は、眼尻に皺をよせて「よく來たナ」と歩みよつた。そして昔は針の席へ座

るが如き心地で腰かけた見覚えのある椅子を指して、「マアかけ給へ」と云ふ。

親鳥の翼の下に抱かれたやうな氣分になつたMは、勢よくその椅子に腰かけた。そして問ひつ問はれつありし昔を語りあふたが、温顔に笑を湛えてMの姿を見入つてゐた老校長は、やをら身を起して卓上のベルを押し、

「君達を教へた博物の先生が、二十年勤續で健在だから呼んで見やう」とにこやかにMを顧みた。

扉を排してヌツと姿を現はしたのは、仙骨稜々Mが母校の名物男と謡はれてゐる杉野先生であつた。「我等が習つた昆蟲の中には、精蟲と云ふのが見當らなかつた。是非實物を示せ」と、飄逸な教へ子Sに迫られて當惑した當時の面影をそのまゝに、先生は悠然と乗り込んだ。そして昔の教へ子Mの姿をそこに見出すや、

「來たナ」

と、簡潔な一語を投げかけて無雜作にMの隣りに座を占めた。

「M君!! 何か新しい研究事項でもあつたら杉野先生に教へてやつて呉れ給へ」

巢立ちせるもの

不 定 芽

とはその時老校長の唇から洩れた言葉であつたが、先程からだまりこくつてゐた杉野先生は、やにはにMの方へ向き直つた。そして昔エンマ帳を擴げた時と同じ顔をして、

「ヤイM!! 何か面白いことがあつたら教へろヤイ。」と呼びかけた。

杉野先生は中學の博物教師、Mは肩書の澤山あるその道の専門家となつてゐた。その専門家を「ヤイM」と呼び棄てにする杉野先生であればこそ、今尙全校の人氣を負ふて中學の博物室に收まつてゐるのである。

Mは純眞な杉野先生の顔を仰いで、只一言「先生!」と呼んだ。位置が如何に顛倒しよう、杉野先生はMのよき先生である。「電車の乗換を間違へないやうにして歸れよ。」と後から呼びかける先生を再び仰ぎ見て、何とは知らず眼がしらに涙を浮べたMは、百千度歩み運んだことのある學校前の坂道を、一目散にかけ下りた。

Kは卒業後直ちに大學の助手を拜命した。彼はゆく／＼は洋行でもさせられそうなけ

ひのあつた新進の學士であつた。世間のものは悉く馬鹿者に見えたのであらう、尻押しをして呉れる教授の權力を笠に着て、彼は同窓の者などを物の數ともしなかつた。

それでも教へられたと自覺してゐる先生は先生に見えたのであらう、植物學の實驗を指導して貰つたN助教授を途上に迎へると、恭しく帽子を取つて「N先生!!」とお辭儀をすることを忘れなかつた。

時が過ぎてKは講師となつた。先のN先生をつかまへて、今度はKが「Nさん!!」と呼びかけた。更に時がめぐつてKは助教授の肩書を得た。Kは早速N先生を「N君」と呼ぶことに改めた。時は二轉三轉して後の鳥が先になる時が來た。秀才Kは宿望を達して留學てう好餌にありついた。そして歸朝後間もなく、寢てもさめても忘れ難き大學教授の肩書を得た。

萬年助教授の怨をかこつてゐるN助教授の室を、或る日力をこめてノックするものがあつた。「ヘライン!」と云ふ答に應じて乗り込んだ男は、昔の教へ子今のK教授であつた。Kは葉巻を咬へてそり身になつた。そして下僚と思ふたかN助教授を見下ろし

巢立ちせるもの

不 定 芽

「オイ君!!」

と呼びかけた。

尊稱が年と共に下落して行くのを不快に思つてゐたN助教授の怒は、こゝに至つて遂に爆發した。

「ヤイK!! こゝへ座つたッ」

とN助教授は傍の椅子を指さした。

「貴様は長者に對する日本の作法を心得てるか。一度教を受けた方は、このNに取つては悉く先生だ。俺に對してはまだしも、教授の肩書をふり廻はし、俺達が先生と呼ぶ先輩をもオイと呼びかける貴様は一體何者だッ。悪いと思はんかッ」

N助教授は満面に朱を注いで、腕をまくり上げた。

「悪いと思はんかッ」

と重ねて追求されたKは、先の元氣もどこへやら、床を見つめて

「悪いと思ふ」

とかすかな聲を出した。

「思つたら改めろ!!」

ピシヤンと扉はとぎゝれてKの體は廊下に押し出された。

「それきりKは俺のところへやつて來ないよ」と今は教授になつたNが、或る日Mを顧みて呵々大笑した。

巢立ちせるもの

不定芽

氷の神様

青丹よし奈良の都は登大路に、氷室神社といふ扁額のかゝつた神さびた神社があるのを知る人はまれであらう。少年時代を古都に過ごした筆者の家は、奇縁といはんかその附近にあつたので、しばく、朱塗りの鳥居をくぐり、友を語らうて拜殿のほとりで遊び戯れた。

當時は氣にもとめなかつた「氷室」といふ名に興味を感じた筆者は、最近それとなく同社の因縁を調べて見たところが、はからずも左記の如き面白い事實を探りあてた。

氷室神社は和銅二年の創始で、白木造りの舞殿拜殿等は永久二年(鳥羽天皇の御宇)の造營であるが、そこに祭られた三柱の神は、製氷を司る大さゝぎの命、鬩鶏稻置大山主命、額田大仲彦命の三方である。氷の神を祭つた神社とは、日本廣しといへども他に類例が無からうと思ふが、氷室神社創草の歴史を尋ねると、そこに我國における製氷の起源が現はれてゐるから一層面白い。

人皇十七代仁徳天皇の御宇、帝の御弟額田大仲彦命が鬩鶏野に狩を催されたみぎり、野中に不思議な室があるのを見そなはして奇異に思し召された。傍に侍した鬩鶏稻置大山主命は、「これは冬に生じた氷を貯へる氷室と申すもので、氷は暑さを凌ぎ、冷して熱を忘れ、藏めて食物を貯ふるに極めて効果のあるものである」と言上した。命御感斜ならず、以後毎年四月一日から九月末日まで、獻氷の例を開かせ給うた。

その後元明天皇の御宇に、三笠山々麓の御料地「月日の窟屋」に國家經營の氷室を造られて大に製氷貯造のことに努められたが、これには神々の加護を要するといふので、和銅二年七月廿一日、貯氷の方法を發明せられに井耳命の子孫都介國造を大山主命とし、額田大仲彦命と合祭して鎮護の靈社となし、清和天皇の貞觀二年、製氷を奨励せられた大さゝぎ命(仁徳帝)を加へて三祭神とした。

歐米に製氷事業が擡頭したのは、僅々百年このかたのことである。然るに、我國では遠く奈良朝の頃に製氷並びに貯氷の技術が存してゐたのみならず、低温を利用して食物を貯藏することにまで思を致してゐたことは、上記の事實によつて明である。して見れば、製

氷の神様

不 定 芽

氷冷蔵の元祖は日本國民であるといつてよいが、天然の寒氣を利用する寒天や高野豆腐の製造等が、早くから我國民の間に行はれてゐた點から考へて見ても、冷の利用といふことにおいて日本國民は確に他に一步を先んじてゐたといつてよい。

百貨店頭に白煙をあげてゐるドライアイスなどを眺め入つて歐米の進歩を歎稱してゐる人が多いやうであるが、我等は國産の傳統的知識を活用し、この方面で斷然他をリードするやうな舉に出たらどんなものであらう。「月日の窟屋」の遺跡は、今尙三笠山麓を流る小川の上流に残つてゐる。氷室神社と「月日の窟屋」と、古都をおとなふ序に杖をひくのも一興であらう。

獨 逸 語 を 學 ぶ

向陵の生活も愈々クライマックスに達して、我等は遂に三年生になつた。そして時計臺が巍峨として聳ゆる赤煉瓦の本館に收つて、二年や一年の若輩どもを睥睨する立場に立つたが、入學の際工科二組と理農科一組とに分れてゐた所謂二部生の三分の一が過去二年間に打ちとめられてしまつたので、工科一組と理農工の雜軍一組とに改編されて、新しい三年生が二教室に收まつた。

雜軍だけあつて、我等のクラスには名士の多數が潜んでゐた。お父つあんと呼ばれた男は、二人の子供の親父であつた。柏葉旗を擁して校庭に立つ一大隊の健兒を、ものゝみごとに指揮する大隊長殿、即ち我がクラスのKは、號令がうまいのもその筈、正八位を賜はつた立派な豫備少尉であつた。そのやうな猛者どもが年少氣鋭な若者を操縦して教師をいぢめる算段を講ずるのなもの、如何なる老巧な先生も首尾よく陥穿に落されるのが當然ではなかつたらうか。

獨 逸 語 を 學 ぶ

不 定 芽

獨逸語を擔任された保志虎吉先生は、當時斯界の長老で、頭に霜を載いた温厚の君子人であつた。

雜軍の面々にとつて、「ダスそのことは」と云ふ調子でデリくくと譯を進めてゆく先生の獨逸語がいやでならなかつた。その際用ひられた教科書が、フンボルトの南米旅行記と獨逸のダーウキンの進化論とであつたのは、どう云ふわけか。今から思へばむづかしいものをよくも高校三年生に課したものだと思ふが、「アム、フーセ、デス、ステツベ、高原の麓に於て」と、フンボルトの第一頁を開いて苦もなく讀み初めた保志先生の手際はいとも鮮かであつたので、一同之に對しては沈黙を守らざるを得なかつた。

教科書は變れど人は變らず、次の時間には進化論を手にして保志先生が亦もや教壇に姿を現はした。

そして前と同じ調子で「自然科学研究員としてビーグル號に搭乘してゐた予は」と、その序文の直譯を始めたので、たまり兼ねた勇士の一人が「先生!! ビーグル號とはどんな使命を帯びた船ですか」と質問の第一矢を放つて見た。眼を白黒させた保志先生が、「多分

軍艦でせう」と逃げを打つたその袂に追ひすがり、今ではその道の大家になつてゐる植物學者の卵が、「なぜダーウキンの軍艦に乗つたのです?」と手きびしく追撃した。追撃砲は美事命中して保志さんは教壇で立往生をした。そして「よく調べて御返事をします」と甲を抜いで大きくお辭氣をした。

くみし易しと見た雜軍は、雀躍して喜んだ。そして進化論の方は生物學上の質問を連發して時間毎に立往生をさせることゝ戰略を定め、動植へ志す者が主として巨彈を放つことにとりきめた。

内甲を見すかされた保志先生の獨逸語は、それから以後といふものは、實に見じめなものであつた。來る時間來る時間、生物學の質問にはさすがの先生も弱りはてた。一學期が過ぎても、第一頁がすまなかつた。三學期の終りが近づいても僅々十頁足らずの序文を譯し終らなかつた。たまり兼ねた先生が、遂に或る日のこと大きな爆彈を投下し、「これは獨逸語の時間であつて生物學を講ずるのではない」と宣言した。然し時は既に晚く、勝利は挺身隊が潜んでゐた雜軍の手に歸してゐた。そして一年かゝつても進化論の序文を讀み終

不定芽

らずに、我等は赤門へと進軍した。お蔭でエントステイウング、デア、アルテン即ち「種の起原」を讀破する機会を永久に失つたのみならず、我等は今以て獨逸語では苦勞を重ねてゐる。

スタンフォード大學の創立者であるスタンフォード夫人は、何故かフンボルトの崇拜者であつた。それかあらぬかスタンフォード大學生物教室の表玄関には米國の大博物學者アガシーの像と並べてフンボルトの大理石像が建てられてゐる。

朝な夕なそれを仰ぎ見た私は、「アム、フーセ」とフンボルトの旅行記を讀み始めた保志先生の顔を思ひ出さずには居られなかつた。そして又進化論を讀みそこねた我らの愚を笑はずには居られなかつた。

街の大時計

中島が孜孜として研究に没頭してゐる實驗室のドアを開くとノックするものがある。カム!! と答をする。ドアが開く。そこへドヤ／＼と入り込んで来たのは、アメリカ生れの日本人學生を先頭に立てた渡米ホヤ／＼らしい日本紳士の一團であつた。「校庭でカチ合つた僕が、この大學には日本の留學生が一人ゐると話したら、是非遇はせて呉れと云ふので連れて來ました」としどろもどろの日本語でその學生が云ふ。うるさいナと思ひながら中島がヒョイとふり向くと、丈の低い黒い顔の紳士が満面に喜色をたゞへて

「ヤー君か」

と云ふ。廿年近く顔を合はせたことがないので、一寸思ひ出せなかつたが、ジッとひとみをすゑて見てゐるうちに、高校時代の同窓神木音二郎の面影が泛んで來た。彼は中々の俊才であつたので、その後東北大學の教授に收まつてゐると聞いてゐるが、白線帽をかなぐりすててからの久濶を、アメリカ三界で叙さうなどは夢にも考へてゐないことであつた

街の大時計

不 定 芽

「やつて来たのかイ、いつ着いたのだ？」

「昨日上陸したばかりで、どこへ行くともまだプランが立つてゐないのだ。ところで君はこゝに長いのかい」

「あゝ一年半もあるよ」

「それなら大分アメリカ通だナ、どうだ方面は違ふが、僕はこの大學で仕事をやるわけにはゆかぬかしら。君のそばだと心強いのだがナ。」

時にこちらの男は、東京帝大のA教授だよ、ナ！A君!! 君も一先づこゝに腰を落ちつけては」

議が熟してその二人は、中島と同じS大學に腰を据ゑることゝなつた。

下宿も中島の宿の近くにとれたので、二人は即日ホテルを引き拂つて大學町へやつて来た。その夜夕飯がすんで、三人はブラ／＼町を散歩してゐた。物馴れた中島が、こゝは何あそこは何と色々な店の案内をして廻つてゐるうちに、神木はフト眼鏡屋を見つけてその前にイんだ。



「君! こゝでは眼鏡をすぐ造つて呉れるかネ」

「ア、造つては呉れるがネ……… 今まで知らなかつたが、君は眼が悪いのか? 老眼かい」

「馬鹿を云ふなよ、眼なんか少しも悪くはないよ」

「眼が悪くないのに、なんだつて眼鏡が要るんだ」

「俺は素通しでよいから、鼻眼鏡がほしいのだ。こうして町を流して見ると、俺ぐらひ風采のあがらない人間はゐないやうだ。一つ鼻眼鏡でもかけて、帝國大學教授たる威嚴を示さんにヤ」

「オイ／＼よせよ!! 渡米匆々氣がふれたのじやないのか、一體本氣なのかイ」

「大眞面目サ、君一つ口を聞いて呉れよ」

神木が案外熱心なのに引かされて、中島は常々行きつけたその眼鏡店へ彼を連れ込んだ。そしてなじみの番頭に神木を引き合はせてこの男が眼鏡を新調するのだからと耳うちした

「オール ライト!! カム ヒア!!」

街の大時計

と萬事合點したオキリストが神木を暗室へ呼び込んだ。悪くもない眼を檢眼して、どんな結果になるかなと中島はおかしさをこらへて店頭の寶石や時計を眺めてゐたが、二十分たつても、三十分たつても二人は暗室から出て來ない。何か異變があつたかなと聊か心がかりになつた中島が、ジツと暗室の入口をのぞいてゐると、やがてその戸口があいて、青い顔をした神木があたふたと飛び出して來た。そして中島にしがみついて「どうかして呉れよ」と云ふ。事情を聞いて見ると、眼鏡はできることになつたが、差出されたビルに廿五弗とある。廿五弗と云へば日本では五十圓ではないか、今五十圓とられては口が干あがるが、なぜそんなにぼられるのだから、相手が色々しやべるが俺には一言もわからぬのだ、一しよに來て呉れよ、助け舟をやつて呉れよと神木は懸命に拜んでゐる。

仕方がないから中島は神木を連れて暗室の戸をくゞつた。電燈の光に照らされてオキリストの姿が浮び出る。その手に持つてゐるビルを一瞥すると、確に廿五弗とある。

「君高いじやないか」

と彼の肩をポンと打つと、彼はノーノーとかぶりを振つてその理由を説明し出した。

「この方は眼が悪くないのに鼻眼鏡が要ると云ふのです。何のためかと反問したら、大學教授たる威嚴を保つためだと云はれます。御注文なら素通しの鼻眼鏡でも調製致しますと御返辭はしたものゝ、扱てやつて見ると、鼻がとても低くて鼻眼鏡は到底かゝらないのです。」

それでも鼻眼鏡がよいと云はれるので、致し方がないから蔓をつけて御希望通りの鼻眼鏡を造ることにきめたのです。それに威嚴を保つためには、材料は金にしなければ引き立ちません。それやこれやで廿五弗にはなるのです。」

成程彼の云ふ通り、凡てリーゾネブルの値段である。然しそれでは神木が浮ばれない。そこで中島は懸河の辯をふるひ出した。金に見えさへすればよいのだから、金張りで澤山だ。素通しにエナグラスなんか勿體ないから二足三文のよい等々々。まくし立てた結果がとうとう半値の十二弗五十仙に落ち込んだ。神木は澁々財布の口を開いて支拂つた。そしてその翌日から黒いそばかすだらけの顔に蔓つきの鼻眼鏡を光らせどんなもんじやと云ふ顔をして街路を濶歩し出したが、中島やA教授が「焦點が無限大のところにあるレンズ

不 定 芽

はよく見えるだらうナ」とひやかすので、神木は中々頭が上がらなかつた。そのうちに眼鏡屋の直前に太い柱が立つて、その上に大きな時計が据ゑつけられた。それを見た中島が、

「オイ神木!! 君が獻じた寄附金が化して街の時計となつたぞ」

とひやかした。その後誰云ふとなくその大時計を神木さんの時計と呼ぶやうになつたが、過日久しぶりで神木に遭つたら、日本ではあの顔で威厳が保てるのであらう、蔓つきの鼻眼鏡は影も無くなつてゐた。

我等の夏目先生

文豪漱石としてその名天下に著聞するに至つた猫の主人も、我等が一高で初めて御目にかゝつた頃は、單なる英語の先生夏目金之助教授であつた。揚げ足を取つたり取られたり兎に角白線帽の三年間ロンドン仕込みの英語できたへられたのであるから我等に取つてはどこまでも恩師夏目先生である。ホトトギスにロンドン塔が現はれ、猫が漸く世に姿を見せた頃、云ひかへれば明治卅五六年頃の先生は、羽化して漱石となるべく、自らつむいだ美はしい繭の中に閑居してゐたのであらう。云はゞ蛹であつた時代の夏目先生に親しく英語を習つた教へ子の一人として、今茲に漱石ならぬ夏目金之助教授の風貌を描いて見る。

博士の辭書

明治卅五年の九月、天下の秀才の一人となつた筆者は、初めて一高の教室に踏み込んで所定の机に腰を下ろしたが、所謂分館と號した平べつたい建物の教室が、中學のそれに比して如何に汚なかつたことよ。三年生になるまで時計臺のある赤煉瓦の本館に席を占める

我等の夏目先生

不 定 芽

資格がないとのことで、幾多の博士の卵が座つたらしい傷だらけの座席に落ちつかねばならぬことゝなつたが、カン／＼と鳴り響く鐘の音と共に、教室のドアをあけて無雑作に教壇に立ち上つた英語の先生の姿が、中學校の誰氏彼氏に引き較べて、如何に垢抜けがしてゐたことよ。

生粹のロンドン仕立てとでも云ふのであらうか、鶯がゝつた鼠の背廣がピタツとその身についてゐる。顔一面にあばたが散在してはゐるが、髪をきれいに分けて、アイロンでもかける身だしなみがあるのか毛の先が心持ち捲き上つてゐる、そして上着のポケットから白いハンカチーフの三角のはしがチラツと顔を出してゐるその調子のよさ、教室の見苦しさに引きかへて、高等學校の先生は役者が一枚上だナと云ふ感が起ると共に、その威容に押されたのか、一同片唾をのんで教壇を注視した。これが初めて我等と顔を見合はせた夏目先生であつた。ロンドンから歸つたばかりの夏目教授の姿であつた。

無雑作に出席簿を読み上げて、扱て先生が頁を開いたのは、特に理科の生徒のためにと撰ばれたサイエンスリーダーと云ふ本であつた。行儀よく並んだ生徒の顔を一わたり見廻はして、「火山の噴火」と云ふ章をいきなり読み初めたが、その發音の正確で垢抜けがしてゐること、聲ばかりを聞いたなら誰がこれを日本人と感づかう。いや味のない典型的な英國紳士の口をついて出る申分のないその英語、我等は夏目先生に威壓された態で最初の一時間を夢のやうに過してしまつた。

スタートで氣合負けがしては、生徒は徹頭徹尾敗戦の憂き目を見なければならぬ。時を重ねる毎に夏目先生の突撃は猛烈さを加へて來た。そして生徒の誤譯を耳にする毎に、

「オイ／＼待つた待つた。そんな譯はどこ見つけて來た」
ときまつたやうに追究する。

「辭書に書いてあります」と生徒が答へると

「博士の書いたちつぽけな英和辭書だろう。駄目々々」とまつころからこき下ろす。

その頃世に行はれてゐたのは、文學博士何某博言學博士イーストレーキと云ふやうな名

我等の夏目先生

を連ねた赤い表紙の小さな英和辭書であつた。これより他に頼みにするものゝなかつた生徒どもは、お面を取られたりお胴を打たれたり、日々散々に打ちのめされてゐるうちに、めくる頁の数がドシ／＼と重なつて來た。こんなに進められたら試験が思ひやられると心配し出した生徒軍は、やたらに質問を發しては課業を進ませない手段を取り出したが、百戦練磨の夏目先生がどうしてその手に乗せられやう。快刀亂麻を斷つが如く愚にもつかぬ質問を受け流してはドシ／＼授業を進めてゆく。これではたまらぬと騒ぎ出した生徒が額を集めて對策を練つた結果、適當な選手を押し立て、十分間でよいから先生の授業を止めて見せやうと云ふ案を立てた。

その役目を負はされた筆者は、とつおひつ思案投げ首の態であつたが、つと名案を思ひ浮べて、その夜圖書館へと駆け込んだ。そしてウエーブスターの大辭書を借り出して、懸命に譯讀の豫習に取りかゝつた。そのうちにソール (sole) と云ふ字が出て來たが、その場合「足裏」と譯するのが適譯であつた。然し「したびらめ」と云ふ魚名と考へて無理にこぢつけるると何とか文意がまとまらないこともない。これこれとひそかに快哉を叫んだ筆者

は、早速その譯を書き取つた。そしてその翌日胸に棘を藏して夏目先生の時間を待つた。策戦通り名ざされた生徒が「やつて來ません」とお辭氣をした。次とお鉢を廻はされた生徒もお辭氣をした。

「それではO君!!」

と筆者が名ざされた。どし／＼譯をつけて愈々問題の場處に來たので、わざと聲を張り上げ「したびらめが……」とやり出したら、早速例の「待つた待つた」が先生の口をついて出た。

「O君!! そんな馬鹿な譯がどこにある」

「辭書に書いてあります」

「また博士の小辭書だらう」

「いゝえ先生、大きな辭書に書いてあります」

「何と云ふ辭書だネ」

「ウエーブスターの大辭書です」

我等の夏目先生

不 定 芽

「馬鹿を云つては困るよ、それなら君、一寸本館の教官室へ行つて、僕の机の上にあるウエーブスターを持つて來給へ。そして君が見たと云ふ譯を見せて貰はう」

分館の教室から本館の教官室までは相當の距離がある。往復に十分はかゝると目算をたてた筆者は、赤い舌をペロリと出しそろり／＼と歩を運んで、大辭書をかゝえて來た。

「どれどこに君の云ふ譯がある、サアあけて見せた見せた」

「先生これです」

と昨夜圖書館で見つて置いた個處を指して示した。

「何だと、ソールとは平目の一種だと、して見れば君の見つけた譯も滿ざらうそではないが、よく眼をあけてその上にある譯を見た。足の裏とチャーンと書いてあるだらう、辭書を見て適譯が拾へないやうな男はさしづめ注意點だナ

よし、よし、もつと先を讀んだ讀んだ」

約束の十分はとうに過ぎ去つた。級友は俳味を帯びた夏目先生の顔を見上げてドツと笑ひこけた。さすがの先生もこの時ばかりは狐につままれたやうな顔をして教壇を去つたが

今初めてかゝるわなにはまつたと聞き知つたら、地下にゐます漱石先生は何と申さるゝことであらう。

大 根 問 答

今は立派な人物になつてゐるSが譯讀を命ぜられて先づリーディングを初めたが、プレザント (pleasant) と云ふ字をプリーザントと讀み上げた。そうしたら教壇から「待つた待つた」と云ふ聲がかゝつた。

「S君!! 今のところをもう一度讀んだ」

と夏目先生が仰せられた。命に應じてSは又もやプリーザントと讀んだので口鬚をひねり上げてゐた先生は

「S君!!」

と彼を呼びとめた。そして

「君! それはダイコンをデーコンと讀むが如し、さあ先を讀んだ讀んだ。」

と云つたまゝすました顔をして先を急がせた。Sは何のことか先生の言がわからなかつ

我等の夏目先生

不 定 芽

たと見えてキヨトンとした顔で立往生をしてゐたが、そのSは今日帝都の中央に巢を構へてプリーザントとデーコンとの關係を永久な解き難い謎と心得てすましてゐる。

江戸の敵を長崎

夏目先生は「やつて來ません」とお辭儀をしても決して怒らない良い先生であつた。出席簿をつけてから、毎時間きまつたやうに一番隅の座席の生徒を指す。

「やつて來ません」

「次ぎ」

「やつて來ません」

「次ぎ」

「やつて來ません」

次ぎ次ぎ次ぎと全生徒が將棋倒しにお辭儀をする時間が五分はかゝつたらう。最後のお辭儀を見届けた夏目先生は、

「それでは僕がやるから聞いてゐたまへ」

と云つて、鮮かな發音で読み上げては譯をつける。夏目先生の英語は下讀みをしないでよいものと相場を踏んだ生徒一同は、一學期を通じてお辭儀を仕通したが、とかうするうちに試験がやつて來た。問題はやさしかつた。筆者の如きは確に百點と云ふ自信を持つて答案を認めた。

次の學期の初めに閻魔帳を持つて教壇に姿を現はした夏目先生が、「これより注意點を讀み上げる」と宣告して、あばたづらに微笑を浮かべながら負傷者の名を呼び出した。首席の男二番の男三番の男、驚いたではないか全級すべて落第點であつた。

「さあ又初めるぞ!!」

と先生は一言も生徒の不勉強に言及しないで本を取りあげたが、寢首をかゝれた生徒は猫の主人の辛辣さに避易した。そしてその後は「やつて來ません」と云ふ聲を全く封じ込めて懸命に努力した。

授業を休まない辯

學年の終り近くに教科書があらかた片づいたので

我等の夏目先生

不 定 芽

「先生!! もうよい加減に休んで下さい」と生徒側から申し出た。

五つ紋の黒の羽織に袴と云ふ出でたちの先生は、椅子に腰を下ろし、教卓に頬杖をついて生徒を見下ろし

「僕も休みたいがネ……」

と俳味を帯びた口調で語り出した。

「休むからには足腰を延ばして朝湯にもはいりたいさ。手拭を下げてたゞ家へ歸るのもつまらないから、その足で梅月(その頃一高附近で菓子喰はせた家)へ行くとしやう。お茶を入れてすきな栗まんをつまんでゐるところへ、僕が出勤しなければ君達も休だから、誰かゞそこへやつて来るだらう。生徒とにらみ合つて菓子を喰つたんじやうまくな

いから梅月も朝湯もまつた學校を休むことも僕はやめる。

それに手拭を下げて落雲館中學のあたりを歩いてゐると、頃に鬚の生えてる人(當時の一高校長狩野享吉博士)に出くはすから、一日身をかゞめてゐなければならぬからネ!

僕は頃に鬚の生えてゐる人はこわいよ。そして窮屈な思をして家にかゞんでゐるのは嫌だ。だから休むのはいやだよ。さあT君今日のところを讀んだ」

夏目先生にかゝつては如何な一高の健兒も双向ふすべがない。何と云はれても突込む余地が無かつた我等の夏目先生は、後年果して漱石と銘を打つて廣い世界に躍り出た。その作品を手にする毎に我等の眼には恩師夏目先生の姿が浮び出る。そしてウェーブスターがかつぎ出したその當時の光景が、走馬燈の如く廻り出る。

我等の夏目先生

不 定 芽

馬食會の由來

いやしくも動物學を學ばんと志すほどの者が、動物各々の味を知らないでどうしやうと云ふ議が旋風の如くまき起り、養殖眞珠の研究に餘念がなかつたF理學士を音頭取りとする一種の赤化團が、東大動物學教室の一角に現はれた。その日の學業を終つた者は來れとさし招く團長の命令を遵奉して、團員一同は「かねやす」の角に立つ。乗れと云はるゝまに、指さゝれた電車に飛び乗り、下りろと號令された場處ですばやく土を踏むと、團長は不安げな顔をしてゐる一隊を引き連れて、怪しげな匂の立つ店ののれんをかきわけける。坂本公園の附近にあつた大きな馬肉屋では、バフテキと云ふものを味つた。水道橋のほとりには、焼鳥と號する犬だか猫だかの肉を賣る屋臺店があつて我等を歓迎した。まる花の鮫鱈汁に舌鼓を打つことも、魚河岸でギンポの天婦羅を立喰ひすることも、お影で首尾よく卒業した。ところが或る日のこと、各自肉一種を携へて團長宅へ集合すべしとの號令が出た。喰ひ終るまで種をあかさぬことと云ふ約束の下にジワ／＼と煮込んだすき焼は、ま

こと氣味の悪るいものであつた。然しこの一舉は我等の胃の腑に、猿、猪、鹿、熊、鯨等都在手に入るありとあらゆる種類の肉を詰め込む機會を與へて呉れた。

名づけて馬食會と云つたその會の行事が進展するに連れ、學内にけしからぬ噂が立ちそめた。いやしくも縮士を以て任する者どもが、制服制帽で馬肉屋へ出入するとは怪しからぬ。動物教室の奴等は氣でも狂つたかと、同じ流を汲む植物教室の連中がいきり立つたが「生意氣を云ふな、覺えて居れ」と會員一同は應戰の機會をねらつてゐた。

時はめぐり來つて、本郷江知勝で新入生歡迎會を開くことゝなつた。植物の連中もやつて來たが、中でも理窟屋のNと云ふ男が、大義名分を説いて連りに馬食會々員をこき卸してゐた。今に見ると手ぐすね引て待つてゐた馬食黨の面々が、ふところに潜ませた櫻肉を取り出してそろ／＼と牛肉とすり替へた。知らぬが佛のNが鱈腹櫻肉をほうばつて、又攻撃の矢を放ち出したが、「ヤイ自分も馬肉を喰ひ乍ら、生意氣なことを云ふなよ」と團長につめよられて眼を白黒させたNの顔つきが、今でも中々忘れられぬ。

團長F理學士は、惡食がたゝつたのか、業半ばにして胃痛で天折したが、天彼に命をか

馬食會の由來

不定芽

さば、養殖眞珠界にめざましく活躍をしたらうに、若くして惜しい男を失つたものだ。

植物分類學

少しふくらみのある圓錐を倒にして、額にあたる部分にへの字なりの皺を三本書きさへすれば、目鼻はなくとも、それが先生の顔とわかるほど、松村任三教授の風貌には特徴があつたが、その講ずる植物分類學といへば、神韻飄々とも云はうか、これまた奇々怪々今思ふても忘れ難きものゝ一つであつた。

指折りかぞうれば、早や廿有餘年を過ぎた昔の語り草であるが、「植物名彙」その他の名著の著者として押しも押されもせぬ植物學界の元老に師事することであるから、如何なる名講義に接することかと、部厚なノートを開いて先生の第一聲を待ち構へたが、教壇に立つた我が松村先生は、碁盤目に割つた中にそれぞれの植物の花と葉と實とが描寫されてゐる大きな掛圖をかゝげ、長大な竹ざをでその一つ一つを指さしながら、「顯花植物——これは朴の木——下駄にするッ、次はクヌギ——炭にするッ」と一瀉千里とはそのことか、僅々數時間で植物分類學をかたづけた。

植物分類學

不 定 芽

春の日永に小鳥がのどかに歌ふ日であつた。

「今日は講義がすんだから野外で實習をするッ」

との御託宣に、太いステッキを振り廻して先に立たれる先生に従ひ、我等學生の一團がゾロ／＼と植物園内を押し廻はつた。ふと歩みをとどめた先生は、ステッキで道の邊の土筆をつとさした。「この植物の胞子はどんな構造かッ」。問はれた學生の一人が、すかさず兩手を廻轉させてかいぐりとつとの眞似をした。そして「細い紐がこんなになつてゐます」と即答した。先生はそれ聞いて「よし」と大きくうなづいた。雑草の中に紫の花とふくべ形の小さな實をつけたいたいな植物があつた。ステッキの先はそれに向ふと同時に「これは何かッ」と云ふ勇壯な聲が耳許に響いた。雷の落ちた學生がタヂ／＼とするのを見た先生は「犬の股間を見たッ」と不思議千萬なサゼスチョンを與へられた。なるほどそれはオホイヌノフグリであつた。

禪問答のやうな授業が打ち續いたが、學期末には矢張り人並の試験があつた。然しその

試験たるや散歩氣分で學生を野外に連れ出し、手當り次第に野生の草を指しては「これは何かッ」と來るのだからたまらない。既に故人となつたO博士に先づ「これは何かッ」がやつて來た。見れば一尺ばかりの草に褐色金平糖狀の實がなつてゐる。「キツネノコンペイトウ！」とOがすまして答へるのを聞いた先生は、「そんな植物は無い」と即座に撃退したが、相手もさる者、「國ではさう云ひます」と應酬した。「あゝさうか」とこの巨弾にはさすがの先生もタヂ／＼とされたが、名高かつた恩師松村先生も七十三歳を一期として、學界にとはの別れを告げられた。東大人類學教室には、先生に生き寫しの瞭博士が孜々として研究にいそしんでゐる。松村第二世に額の皺が遺傳してゐたか、又ゆつくりと調べて見やう。

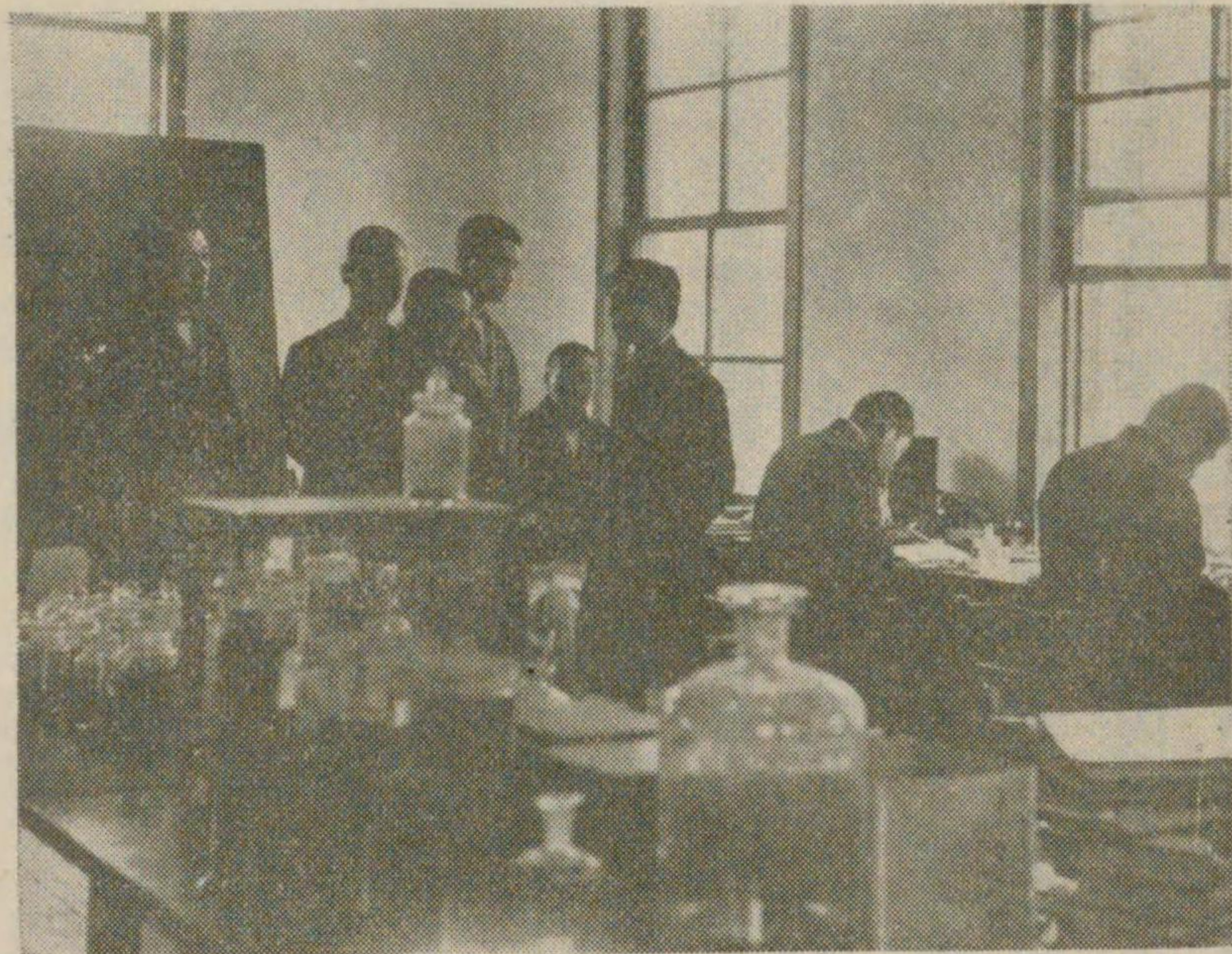
不 定 芽

やまかがしのゆくへ

早や櫻の花も色づいて、小石川植物園にも春がおとづれた。茶屋の小母さんが汲んで呉れた澁茶に喉をうるほしながら、晝飯がはりのあんばんを頬張り終つた角帽の二人が、吹く春風にさそはれて、歩を温室のかなたへとはこんで行つたが、何を見つけたか、その中の一人が歩みを止めて植木鉢の影にデツと眼をすゑた。力なげに動くものがある。こちらを見つめては黒い舌をペロ／＼と出す。やまかゞしだ!! やまかゞしだ!! 春の日にさそはれて穴を出たやまかゞしだ!!

久しぶりの友に遇ふたやうな表情をしてイんで居た色あくまでも黒い角帽が、手をニユツと差しのべてやまかゞしを引きすり出した。そしてタヂ／＼として居る他の一人を顧みて持つて見よと強制した。手を出しかねて二三歩あとずさりをした友の様を見て、

「そんなことでは動物學者にはなれんぞ。蛇をつかむ祕傳を教へてやろか」
と黒は嘲けるやうな顔をした。そして尾の先を持つてぶら下げれば、如何なる蛇でも往



やまかゞしのゆくへ

室験實學物植の頃のそ

村川・氏晋野賀倉・士博人正原田・士博郎一賀大らか左
授教助清南小・士博備義田桑・士博一源泉小・授教二實
氏勝直柳

生する理由を細々と説明した。

襟にSの字のマークをつけて居た相手の角帽は「それ掴んで見い」と黒がはふり出したやまかゞしをこは／＼見入つて居たが、何と思つたかつか／＼と歩を進めてのたくり廻る相手の頭をしかと踏みつけた。そして手早く尾端を掴んで敵を吊り下げたが、黒の云ふ通り下から如何に鎌首を持ち上げても口が手許に届かぬものであることを確かめて、蛇何者ぞと云ふやうなほこらかな色を顔一面に漲らせた

「組織學のよい材料ぢや、動物教室へ持つて行かう」

と黒が主張するのに引きすられ、やまかゞしを持たされた學生は、いや／＼黒のあとを追ふて行つたが、折しもカン／＼と時鐘は耳もとに鳴り響いて植物生理の實驗に取りかゝらねばならぬ時を報じ出した。

黒は捕虜にしたやまかゞしを實驗臺の上にとくらせて、騒ぎまはる學友の有様を愉快げに見入つて居たが、特徴のある咳ばらひと共に擔任教授の足音が近づいて來るのを耳にした瞬間、あわてふためいてあたりを見廻はした。そして顯微鏡のあき箱に眼をくれるが早いか、いきなり蛇を中に押し込め、そしらぬ顔をして居すまひを正しうした。半日の實驗を終つて家路につかねばならなくなつたクラスの全員が各々顯微鏡を手にして立ちすくんで居るのを見て、彼は又もや會心の笑を傾けた。

「オイ誰の箱に入れたのだ、早くお客さんを出して呉れや」

と一同がわめき立てるのを馬耳東風と聞き流して居た黒は、

「それよりも明日動物教室へもつて行くまでの保管者をきめるのが先決問題ぢや。籤引

きに賛成のものは手を舉げッ」

と緊急動議を提出した。顯微鏡を収め兼ねて困惑して居た一同は、不精不精に籤を引いたが、幸か不幸か蛇の統御術を習得したばかりのMに、とう／＼お鉢が廻つて來た。黒は又満足の意を表して、ソレッとやまかゞしを掴み出したが、蛇に見込まれたと觀念したMは、外套のポケットにお客さんを忍ばせて、夕暗迫るS坂を獨りトボ／＼と登つて行つた。蛇の統御術を習得したとは云ふものゝ、お客様をポケットにかくまつて置くことは決して心地のよいものではなかつた。貧乏籤を引きあてたなど考へ／＼Mは坂を登つて行つたが、人間の體溫にあた／＼められて元氣づいたか、無意識にポケットへつき込んだMの手首へ、彼のやまかゞしがくるくると捲きついた。冷たい奴の不意の襲撃に、ヒヤッと叫んでとび上つたが、其瞬間敵は大地に叩きつけられて、S坂をSの字なりに這ひ出した。をかしくもありいま／＼しくもあり、Mはデッとやまかゞしを見つめて居たが、保管の責任を考へ出して、踏みもにじりたい敵をそと拾ひあげた。そして又ポケットに収めて靜に歩を進め出した。

やまかゞしのゆくへ

不 定 芽

家に歸つて暖い室に入るなり食卓についたMは、空腹が先立つて外套を抜ぐのを忘れて居た。そして可なりの事件を惹き起したやまかゞしのことなどは、家の敷居をまたぐなりサラリと忘れて居たが、主人の胃袋がホカ／＼と暖まつて来たことに氣づいたお客様は、中々ヂツとしては居なかつた。彼は知らぬまにポケットをすべり出た。そして膝をつたひ疊をつたふて、「ハイおかはり」と盆をつき出したばあやの胸のあたりへ鎌首をニユツと突き出した。キャツと云ふ悲鳴と共に飯と汁とが飛び散つた。然して狼藉の様をよそに見て、其夜ばあやはMの室へはよりつかなかつた。この奴めと頭を叩いて見たが、やまかゞしはペロ／＼舌を出すばかりで一向に手ごたへが無い。Mも苦笑した。そして自ら雑巾を手にして立ち上がった。

一夜をMの机の中に過ごしたやまかゞしは、あくる朝又もや外套のポケットに收まつて本郷へと出動したが、外來の札を取れと家人に云ひつけられて居たMは、動物教室への道すがら、青白い顔の持ち主がもみあつて居る病院の玄關へ姿を現はした。こみ合つて居る患者の群が、Mが歩を進めれば颯と道をあける。そして凡てが異様な眼で彼を見送つて居る。

お影で難なく番號札を手に入れたMが、不思議とあたりを見廻はした刹那、手に又ひやりと觸れたものがあつた。病人が道をあけた筈だ。ポケットからやまかゞしがダラリとぶら下つて居たではないか。

Mを散々悩ましたやまかゞしにも遂に終焉の時が來た。彼の黒い舌も心臓も胃袋も、凡て組織學の實驗材料として寸斷されてしまった。そして皮を剝がれた美はしい筋肉のみが獨り解剖皿を飾つて居たが、慄悍たぐひなき上級の會津つ兒Kが、いらなければ俺が貰ふと申出て肉を竹の皮につゝみ込んだ。Kは當時さる寄宿舎に居た。夕餉の菜に彼は七輪をあふぎ立て、蛇の蒲焼を頬張つたが、果然寄宿生一同の間に盛な苦情が湧き起り、食堂で蛇を喰ふやうな蠻人は放逐すべしとの議が可決された。

やまかゞしを胃の腑に收めてしまつたKは、ひたあやまりにあやまつて漸く追放を免れたが、學成つた彼は今原生動物學の權威者として醫學界に重き地位を占めて居る。散々やまかゞしに惱まされたはM、蛇は恐るゝに足らずと云ふ信念を得た。日本毒蛇圖説其他爬虫類に關する幾多の業績は、M即ち筆者がやまかゞしに恵まれた賜である。

やまかゞしのゆゑへ

不 定 芽

顯然山上之城

青木元治は父が十八歳の時の子であつた。十八歳で偉大な體格の持ち主である元ツァンを生むくらひであるから、その父親は精力絶倫であつたに相違ないと、友人どもがきめこんでしまつたが、その血を享けたためか、元ツァンも多情多感な男であつた。そして偏陬の地にあるY高校を苦學辛苦して卒業した折には、その胸に淡い戀が芽生へてゐた。

十八歳で父となつた人は、兒女を造る能力はあつたが、學資を貢いでいとし兒を學ばせる能力がなかつた。それで元ツァンは、持つて生れた負けじ魂を奮ひ起し、自活の途を講じつゝ學びの道にいそしまなければならなかつたので、目出度卒業はしたものゝ、錦衣歸郷の旅費が無いと云ふ始末であつた。

月淡き夜であつた、遠く愛人と別るゝ苦衷と、物質的缺亡とに惱まされて、寮舎をさまよひ出た元ツァンが、歩むともなくフィアンセーの宿近くやつて來た。そして棄てたくも棄てられぬ古びた白線帽をまぶかにかぶつて、窓にゆらぐ灯を眺めてゐたが、夢か裏の木

戸がギーツとあいて、夜目にもそれと知れる人影がまろび出た。見れば手に大きな風呂敷包をかゝへてあたりを見返つてゐる。急ぎ足に町の方へ向ふその様を怪しと見て、元ツァンはそつとそのあとをつけて見た。恐る恐る或る家の暖簾をくゞつて出て來た彼女の手には、かゝえてゐた包はなかつた。そして思ひなしか色青ざめて雲間洩る月を仰いでゐるが袂を嚙みしめながらパツと駈け出す出遇ひ頭に、暗にイんでゐた元ツァンにハタと衝き當つた。思ひに惱む元ツァンの顔を仰ぎ見た彼女は、手に握つてゐた何ものかを、いきなり男の胸に押し込んだ。そして低い聲で、

「わたし着物を賣り拂つて、あなたの旅費をこしらへて來たのよ。青木さんどうぞ元氣よく東京へ旅立つてあこがれの角帽になつて下さい。」

とさゝやいて、熱い涙をポト／＼と落す元ツァンの顔をのぞき込んだ。

まだ汽車がなかつたY町の町はづれにイんで、二度とは遇へまいと覺悟をきめてゐるフィアンセーの手を、元ツァンは力強く握りしめた。そして

「あと三年だ、待つてゐて下さいよ」

顯然山上之城

不 定 芽

と男らしい聲を残して駆け出した。

東京へ来た青木元治が止宿してゐたのは、谷を距て、砲兵工廠一帯を見渡す本郷の高臺に立つてゐた木造二階建の寄宿舎で、支關正面には、顯然山上之城と書かれてあつた。これは山の上にてたてられたる城は隠るゝことなしと云ふ聖句を現はしたもので、此處には信仰を同ふする大學生が、各科混交で約廿名ほど和氣霽々たる生活を送つてゐた。

青木元治通稱元ツァンは、此處へ来てからも手許は中々不如意であつた。そこで原稿を書いたり、雑誌の編輯を手傳つたりして自活の途を講じてゐたが、後年筆舌の雄として實戰場裏に覇を唱ふるに至つた人物だけあつて、どことなくどつしりしたところがあり、悠悠せまらず、加ふるに態度が頗る無邪氣であつたので、舎内の人氣を一人で背負つて立つと云ふ有様であつた。

或る夏のこと、元ツァンは、人に頼まれて英文の原稿を懸命に淨書してゐた。その勞力の甚しいのに同情した舎生共が、「元ツァン!! 今に何か御禮が来るぜ、懸命にやれよ」と云

つて日夜彼を勵ましてゐたが、仕事が終わつた報酬として元ツァンは銀時計を貰つて来た。

「元治君!! あれだけの仕事の報酬に、銀時計が一つか。金時計ならまだしもだ。返せ返せ」

と茶目氣のある舎生の一人がけしかけた。

「僕は生れて初めて時計を持つのでネー、嬉しさが先に立つて、散々御禮を申し述べて来たのだ。今更返すのも工合が悪いナー」

「ヨシそれなら智慧をかしてやらう。その時計を手荒く取扱つて機械が動かなくなるやうにするのだ。そこでそれを先方に持參し、機械が悪くて動きませんからとか何とか云つて、もつと上等な品と替へて貰ふのサ」

「時計がそうやすくとこはれるかネ」

「元治君! 君は偉大な體軀の持ち主じゃないか、固く時計を握つてふり廻はして見給へ、きつとどうにかなるよ」

そうかと合點した元ツァンは、右手に時計をシッカと握り、ペンタゴンのやうな形の顔

顯然山上之城

不 定 芽

をまつかにして、振つて振つて振りぬいた。然しその時計は餘程上等な品であつたと見え、一分一秒も狂ひを生ぜず、遂に元ツァンをして匙を投げさせた。

「それならもつとよい手を教へやうか、機械の中へうどん粉をふりかけるよ」

とニヤ／＼笑ひながら悪友が教唆した。それを眞に受けて實行するほどのお人よしではなかつたと見えて、その後元ツァンの机の上には、銀時計がカチカチと音を立てゝゐた。

元ツァンはどこで味つて來たのか、その頃世に姿を現はしたシャンペンサイダーなるものゝ功德をたゞへ出した。

その頃世の尖端を歩む傾向のある先輩の一人が、「うまいものを御馳走してやるから來い」と云つて若い角帽を連れ出した。そして一つ橋高商の前にあつた和泉屋と云ふレストーラン——恐らくは當時の東京に於ける唯一の存在であつたらう店に引つ張り込み、大きく顔をしゃくつて、サイダーを一本と注文した。總勢三名のコップに泡立つ黄金色の液體が八分目ほど盛られたのをグツと呑みほして、何てうまいものだらうナーと角帽共は目を

細くした。そして應揚に十五錢投げ出してツイと立ち上つた先輩に向ひ、慇懃に御辭儀をして御馳走様と禮を云つた。

そのやうな時代であるから、贅澤を夢にも知らぬ青木元治が、シャンペンサイダーに心酔したのも無理はない。爾來口ぐせのやうにシャンペンサイダー、シャンペンサイダーと云ふので、或る日悪友の一人が元ツァンにシャンペンサイダーと云はせて見やうではないかと云ひ出した。

暑い夏の日の午後であつた、舎の一室に茶目共が車座になつて駄べつてゐたところへ、外出してゐた元ツァンが汗をふき／＼歸つて來た。それと目くばせした一人が、

「暑いナー」

と口火を切つた。

「青木君！ 外は暑かつたらうナー」

「何か飲みたいナー」

と一同が包圍攻撃を開始する。つち込まれた元ツァンが、

不 定 芽

「シャンペーンサイダーに限るナ」

と云つたのをきつかけに、一同が手を叩いて爆笑した。その時の元ツァンの顔が、今でも目前に泛んで来る。

Mは舍内の人気者であつた青木元治と同室の光榮を有することゝなつた。朝早く離床すると一人がはたきを取り、一人が箒を持つて廣くもない室の中を掃除するのが常例であつた。

天長節の朝であつた。床をあげてMがいつもの如く掃除にかゝらうとすると、大兵肥満の元ツァンが、どうしたことか机にもたれてしよげ返つてゐる。「青木君！ どうしたのだ」と尋ねて見てもだまつてゐる。不思議なことだナと思つて、横からのぞき込んで見ると、あの元氣な元ツァンが一通の手紙を握りしめ、ホロリ／＼と涙をこぼしてゐる。肩さきをつかまへて「しつかりしろよ、どうしたのだ」と尋ねて見たら、元ツァンは涙にくもる眼をあげて、

「君！ 僕はブロークンハートだよ、この手紙の主は、着物を賣つて僕をY町から立たせて呉れた大恩人でもありフィアンサーでもあるのだ。ところが複雑な事情で約束を遂行し兼ねると云つて來たのだよ、あゝ胸が痛む」

と云つて一面感傷的な元ツァンが、涙と共に高校時代の思ひ出を語り出した。

語り終つた彼は「君!! そんなに同情するなら僕のために祈つて呉れよ」と、机上にあつた聖書と讚美歌を驚ぶかみにし、トトトトツと階段を駆け上つて、朝の祈禱室へ飛び込んだ。同情するともしないとも云はなかつたMは、仕方なしにそのあとを追ふて行つた。中央に置かれた机を中に挟んで二人は對座した。やがて元ツァンは悲痛な聲を張り上げ懸河の辯を奮つて祈をさゝげ出した。Mはだまつてそれを聞いてゐた。扱て自分の番になつたら何と云はんと心に問ひ心に答へてゐたその瞬間、メリ／＼／＼と地中の大鯰があばれ出した。建物の最高處に鎮座してゐる身に感ずる振動は中々に猛烈であつた。グワラ／＼／＼と何か落ちる。下では「あぶないから皆逃げろよ」と叫ぶ聲がして、舎生がドドドドとかけ出して行く。氣が氣ではないが雄辯な祈禱が續いてゐるのでどうすること

不 定 芽

も出来かねる。半ば膝を立てゝゐると、大きく建物がゆれてグララ／＼と瓦が落ちる。弱つたナと思つてゐると元ツァンの聲がハタとやんだ。そして机ごしに両手をのべてMの肩を懸命につかんでゐる。「あぶないあぶない!! 下りろッ!!」と元ツァンが叫んで階段を駆け下りたそのあとについて、Mは命から／＼逃げ出した。とんだ鯨のいたづらで元ツァンのブローケンハートはどこかへ消し飛んだ。

その後フィアンセーの消息は一向耳にしないが、今は労働界の總帥として押しも押されもせぬ日本の青木元治となりすましてゐる彼のベターハーフが、その昔鯨を憤らせたその人であるやうでもあり、ないやうでもある。そのうち元ツァンに遇つたらその點をよく確めて見やう。

超 非 常 識

手にカメラを下げて歐山米水を涉り歩るいてゐる土色の人間は、殆んど凡てが日本人と相場がきまつてゐるほど、カメラは邦人に伴従するものとなつてゐるが、それも極めて最近のことで、印畫紙はP・O・Pときまつてゐた頃には、寫眞屋の領域を犯して素人が寫眞機をいぢくり廻はすことなどは、思ひもよらぬ次第であつた。

その頃年が二つ上の従兄のSが或る大會社にをさまつて三十圓の月給を喰み、何でも映つる舶來の寫眞機を買ひ込んだと云ふのだから、そのニュースヴァリユーは大したものであつた。何しろその頃は向陵健兒の一日の食費がたつた十六錢で、親元から十圓も貰へば大手をふつて本郷通りを喰ひ荒らすことが出来たと云ふ時代であつたが故に、三十圓の月給取りは大したものであつた。

Sのつとめてゐた會社は、越路のさる町にあつた。夏休になつたら寫眞機も見せやうしおごつてもやらうから遊びに来てはとの誘ひ狀が、向が丘にたてこもつてゐた白線帽のM

超 非 常 識

不 定 芽

のところへ届いたのは、櫻も散つて木々の梢が青葉するその頃であつた。Mは指折り數へて寮から開放される日を待つた。學年試験がすんで、及落がいさゝか氣にはかゝつたが、日本海の波の音に心が引かれて、Mはあたふたと上野驛から出發した。つひ先達てまで學生であつた從兄が、見れば背廣服を着た紳士になりかはつてゐた。そして會社の構内の社宅を貰つて、氣樂氣儘な生活を營んでゐた。

何と云つてもこちらは親がゝり、Sは一本立ちの人間であるから、年は大して違はなくとも、命維れ従はねばならぬやうな有様であつた。着いたあくる朝、定め時刻が來るとSは身仕度をした。そして會社へ出勤しなくてはならないから、何でも引き出して見てゐるがよいと云ひ残してそゝくさと出かけて行つた。

獨身生活の氣樂さに、主人が出て行つたあとは誰はゞかる人もない。書架にある書物を手あたり次第引き出して讀んで見た。讀みあきてあつと欠伸をしてフトかなたの棚を見上げると、何だか見馴れない黒い箱が乗つてゐる。はて何だらうと半ば好奇心も手傳つてそれを手にとつて見たら、前面にレンズがはめてあつて、バネを押すと後方が開くやうにな

つてゐる。成程之があこがれの寫眞機の本體だナ。寫眞館の寫場で見るとは大分様子が違つてゐるが、さてどうして寫眞が撮れるのかナと、Mは生れて初めて手に觸れる手提カメラに興味を感じて、ためつすかしつその構造を調べ出した。はて之は何かしらと箱の横にあるボタンを押して見たら、後方の蓋がパツとあいて、中に立てゝあつたらしい硝子板がパタパツと倒れ出した。その硝子板の面は如何にもなめらかで、手ざはりのよい草色の膜がはつてある。妙なものだナと思つてその枚數を數へて見たら、正に十二枚あつた。苦心してもと通りにそれを收め、蓋をキチンとしてカメラを原位置に復したMがトロトロとまどろんでゐる間に、その日の務を終つた從兄が歸つて來た。そして棚から例の黒い箱を引き下ろし「どうだ、寫眞を撮りに出かけやうか」と呼びかけた。

怒濤脚下に躍る巖頭に立つたり、佐渡ヶ島が遙に見える濱邊に寝そべつたり、Mは色々なポーズで寫眞を撮つて貰つた。そしてその夜は戸棚を利用した急造暗室にもぐり込んでSが種板を現像する様を見まもつた。

「最初この藥をかけると、陰畫が現はれて來る。よく見ておいでよ、それいゝか」

超 非 常 識

不 定 芽

と云ひながら、Sはバットに入れた硝子板に薬液をザーツとかけた。

「最初黒く出るのが空だぜ」

と彼は説明を加へたが、レンズが空に向いてゐたのか、見る見る硝子一面がまつ黒になつた。はてナと首をかしげたSが、二枚目の硝子板を取り出して同様に処理して見たが、之亦同様にまつ黒である。おかしいナーと思案投げくびの態であるSの顔をのぞき込んだMが

「あの草色の硝子板が、薬をかけるとどうしてこんなに黒くなるのだらう」

と慰め顔に問ふて見た。

「何!! 草色の硝子板? 乾板を出したのか」

Sは奇聲をあげてMを顧みた。

「ウン、さつき全部ひき出して調べて見たよ。たしかに十二枚あつたと思ふが」

「ヤヤヤヤヤ： みんな出して見たのかイ、どうれで一樣に感光してゐると思つたよ。

驚いたナー、昨日買つて來た種板が一打ファイになつた」

Sは汗をふきく顔をしかめて戸棚から這ひ出したが、己の無智から從兄に飛んだ損害を與へたと感づいたMは、腕を拱いていつまでも戸棚の隅にうづくまつてゐた。

大學を卒業したMは、時過ぎてさるお役所の重要位置を占めてゐた。從兄に損をかけたのが機縁となつて、その頃のMは寫眞術にかけては人後に落ちぬまでになつてゐたが、或日研究材料を撮影する必要を生じたので、乾板何ダースかの購入方を經理係に要求した。

指定した乾板が到着したので、腕によりをかけて撮影現像に取りかゝつて見た。ところがどれもくまつ黒で映像は少しも現はれない。レンズはよし腕はたしか、それに乾板は優良品であるのに、不思議千萬な現象である。ハテナと首をかしげてそこに積み上げた乾板を眺めて見ると、どの箱もどの箱も封が切つてある。Mは妙だナと思つて早速購買係りを呼びつけた。もみ手をしてやつて來た四角四面の書記の姿を見るなり、

「この乾板は封が切つてあるが、どうしたわけか」と詰問した。

超 非 常 識

不 定 芽

正直嚴格で通つてゐた書記はげんな顔をした。そして

「一箱宛枚数を調べて見ましたが、過不足もなし、硝子板に傷のあるものもなし、よからうと思つて検収致しました」

と答へて命を待つものゝ如くであつた。

「ヤヤヤヤ………」

と今度はMがビツクリ敗亡した。そしてその昔従兄Sが味つたその驚愕を満喫した。

鬼將軍の科學

第二師團長佐久間左馬太將軍と云へば、日清戦争のその當時、堅寒威海衛の攻略を手始めに、武勳赫々勇名四百餘州を歴し、鬼將軍の名が天下に鳴り響いた人であることは、普く人の知るところである。將軍は長州の出身ではあつたが、權謀術數を弄せざる眞乎の武人で、性格が極めて單純であつただけに、今時の人には見られない一種の風格を備へてゐた。そして世評の如何などは少しも頓着せず、思ふところをズバ／＼云ひのけ、相手をアツと云はせるやうなことが一再ではなかつた。維新前長藩が幕軍を迎へて戦つた際、軍に従つた將軍は年はもゆかぬ紅顔の美少年であつた。或る日隊長が佐久間少年を呼び、敵陣に忍んでかしこに立てゝある旗を折れと號令した。ところが何と聞き違へたのか、卽座にギツチョンチョン、ギツチョンチョンと身振りおかしく機を織る眞似をして一座の將士を啞然たらしめたと云ふ逸話を残してゐる人だけに、臺灣總督の印授を帯びてゐた際なども、奇問奇行隨分と面白い話題を残された。當時筆者が居住してゐた官舎は總督官邸と向

不 定 芽

ひ合はせであつた上に、少しく縁あつて將軍一家と心おきなく交つた。親しく將軍に面接して禪問答じみた話の相手をしたことを思ひ出す。今その一つ二つを拾ひ出して笑ひ話の種を提供して見やう。

將軍はどう云ふものか、鹽のからい料理が好きで、宴會の席などでも、閣下のお膳には特に鹽味をきかせた別誂への品をそなへて置かないとお氣に召さなかつた。或る日のお談義の一節に

「あの鹽引の鮭を見い、からだによう鹽がきいちよるから、暑い臺灣でも腐らんのじや。人間も鹽がきかんにや長命はでけん」

とあつたので、身體を防腐する積りで鹽を攝取する將軍の意圖が初めて讀めたが、その考は餘程深く滲み込んでゐるものと見えて、七十を過ぎた老體のくせに、菓子と云へば鹽煎餅やかきもちを嚙じるばかり。然もそれを將軍の膝に戯るゝ筆者の幼兒にまで與へて、屢々下痢を誘引させるのには、一家大に手を焼いた。

家庭での好々爺たる鬼將軍の懷には、必ず一束の半紙が潜んで居た。洋室の扉を開閉すること、先づ半紙を取り出してハンドルを包み、然る後手をのべてあけたてをするのが、日常の習慣であつたが、これは黴菌の附着を恐るゝ衛生思想の發露と云ふよりは、寧ろ極端な潔癖の現はれであつた。

用便に立つたそのあとでは、必らず入浴して身を清むる習慣のあつた大將は、遼東の野に支那兵を追ひまくりながらも、この習慣のみは堅く墨守した。従つて陣中七つ道具の一つに大きな水瓶が加へられ、従卒はそれに湯をわかせて隨時大將が身を清むるのに便ならしめた。當時營を變へる毎に軍と共に行動する大水瓶があつたことは、今でも世の語り草の一つとなつてゐる。

『ペスト病と鼠との關係はようわかつた。そこで警察の者共が鼠を買ひ上げる理由のみ込めたが、あの空を飛んで居る鼠はどうして呉れる積りぢや』

思ひがけない質問にたちういで居る余の顔を將軍はジツと眺め入つて居たが、『それあの

不 定 芽

夕暮になると飛びまはる蝙蝠の奴ちや」と説明を加はへられた。

成程蝙蝠は翅のはえた鼠である。將軍の動物學は極めて簡單であつた。

中央研究所を巡視して瓦斯發生爐の前に立たれた將軍は、石炭から瓦斯が發生する工程を説明して居る技師の話を頻りに聞き入つて居た。やがてその技師は一塊の石炭をつかみ取つて燃えさかる燃焼爐の中へ投げ入れた。そして「このやうにして瓦斯を造ります」と云つて一寸得意氣な様をしたところが、立ちあがる紅蓮の焰を眺めた將軍は、「石炭がよく燃えることは我輩昔からよう知つちよる。早く瓦斯のもとを見せえ」と仰せられた。生蠻討伐を畢生の事業とされた將軍の頭にうつる化學工業はこのやうなものであつた。

同じ中央研究所巡視の際、相思樹と云ふ樹を乾餾して採取したタールからクレオソート油を分離させる實驗を施行した。實驗臺の上にあつた製品を手にした大將は、栓を抜いて一寸匂を嗅いで見た。そして頭を少しかき上げて考へて居たが、やがて劍を撫して副官を顧み、「之はあの肺病の藥ぢやのう、して見ると相思樹の森の中へ家を建て、住めば、肺病は

恐るゝに足らん」と不思議な結論を下された。並み居る我等に取つてその結論よりは寧ろ將軍がクレオソート油が肺病の特効藥なることを知つて居られた事實を見出した方が不思議であつた。

臺灣の首都臺北市の西を流るゝ淡水河の上流には、全市に電力を供給する二個所の大發電所があり、新店のほとり河岸せまりて碧流奔騰するあたりに大規模の堰堤が築造されて居る。その工事の爲には莫大な工費と多大な勞力を費されたことを知悉して居た將軍は、或る日の昔語りになすがは鬼左馬太であると思はせるやうな妙案を提出して近代の工學を罵倒した。

「わしが住んで居た仙臺の片ほとりに昔の人が鋤一つで造り上げた水路があつて、今でも農民がその恩恵に浴してゐる。近代の工學は要するに金を徒費することばかりを教へる空理空論ぢや。水をためる堰堤の一つや二つは、少し考をめぐらせば一夜でできるのに、勅任技師の何のと云ふ連中がああ發電用水路を造つた時の騒ぎは何たる有様ぢやら

鬼將軍の科學

不 定 芽

う。この左馬太に一小隊の工兵を授けて見い。新店の河水を堰きとめるくらゐのことは一日で仕遂げて見せる。お前も知つちよるぢやらうが、あの堰堤を築造したあたりは、兩岸に突兀たる岩山がせまつて居る。いゝか左馬太が技師長なら、工兵に命じて兩岸の山腹にダイナマイトをしかけて轟然一發砲臺をやつつけた手並で山を爆破させるワイ。飛び散つた巨岩がまつさかさまに河に落ちて深く河床につきささりまたくまに堅固な堰堤ができあがる。どうぢや近頃の技師どもは金をつかうことばかり知つてゐて、このやうな便法を知らぬのぢや』

老將軍は語り終つて長大息を催したが、敵前で機を織る眞似をしたと云ふ鬼佐久間が、支那兵や生蠻共を惱ました戦法は矢張り之に類したものであつたに相違ない。それは兎に角鬼將軍が科學を理解する程度はこのやうなものであつた。然し知らざるを恥とせざる豪膽無比な態度に接しては、誰しも畏敬の念を抱かざるを得なかつた。

或る夏の夜

琉球を旅して困惑するのは、便意を催したその折である。村々のそこ此處に、切石をめぐらした豚の檻がある。その片隅に二つの大きな踏み石があり、中に狭んだ凹面の石を傳ふて、何ものか檻の中へと流れ込む。厠の設備のない琉球では、誰しもその踏み石を跨がねばならぬ。そして人影に喜び勇む豚公の歡聲に膽を冷さねばならぬ。

いつの事であつたか、東都文壇に名を得たなにがしと云ふ文士が琉球を訪れた。朝まだけ例によつて豚公の御機嫌奉仕に出かけたが、身をかゞめたその刹那、「ハブに打たれた」と高く叫んでその場へ昏倒した。聲に驚いてかけつけた誰かれが、棒きれを振り上げてあたりを眺めたが、煙こむるうづ高き黄金に狂喜する豚の群以外何ものをも認めなかつた。尻のあたりをなで廻して土氣色になつてゐた文士が、それでも細い冷たいものが、ピシヤリと臀部にあつたと主張する。そこで尙よくあたりを窺ふと、讀めたり讀めたり、ハブの正體がそこに現はれた。大和人の御入來に勇み立つた豚奴が、石の間から尾を出して、

或る夏の夜

不 定 芽

嬉しげにそれを振つてゐるではないか、水鳥の羽音ならぬ豚の尾に見舞はれて、ハブと即断した文士のあはて加減、思ふてもお腹の皮がよれる。

月あかき或る夏の夜、毒蛇のひそむ臺北の街路を、カラコロと下駄を引きづつて歩いてゐた。道に横たはる黒いものを踏みつけたと思つたその瞬間、立ち上つたくせ者奴が、自分のからだを一まき捲いてヒヤリと手首を叩きのめした。文士を笑つた罰はてき面、今度は俺の番かと、ハッと思つて敵を拂つたが、不思議々々!! 坦々砥の如き街路に、カラコロンと音を立て、毒蛇が倒れ伏したではないか、腰をかゞめて敵の正體を窺つた私は、腹をかゝへて獨り笑ひこけた。踏みも踏んだり毒蛇と思ふたはセメント樽のたがだ。口をあいた圓い輪だもの、鐵だもの、手にあたれば冷い筈だ、端を踏めば立ち上る筈だ。思はず毒蛇の話を一對にした功績を、扱て誰がほめたゝへて呉れるのであらう。

澎湖島素描

澎湖よいとこ黒潮うけて

沖にや鯉が群れ遊ぶ

山にや緑の眺はないが

海にや眞珠がきら／＼と

とは澎湖を禮讚する者の一齊に口にするところではあるが、季節風が吹きすすんで、鹹雨が一過すると、草も木も緑と云ふ緑は根こそぎ奪ひ去られて、野に生色が無いことになる。澎湖廳志の編者は記して曰く

「宇内瘠苦え區、澎湖に至つて歎ず。僅に其地あるも海濱にして爾鹵、僅に雜糧を産するも、中稔尙給せざるを恐る。一たび鹹雨に遇へば則ち顆粒留らず。牛畜も亦以て其窮荒に存濟し難し、海角の民の溝洫に輾轉する者、更に思を設くるに堪へず。當世の任に有る

澎湖島素描

不定芽

者、速に之に爲す所を思はざるを得ざるなり。嗚呼澎湖の民獨り朝廷の赤子に非ざるか」と。澎湖六十四嶼、巖礁突兀低く水に浮んで烈風のたゞくがまゝに任せてゐる。緑無く水無く、焚くべき何もものない慘たるその有様、唯その主島に南の海を守る要港部の存すればこそ、人はこの地を訪づれる。

四角嶼

その昔慈鎮和尚は

人の世は思へばなべてあだしのゝ

よもぎがもとのひとつ白露

と詠じて槿花一朝の夢にほこる人の命のはかなさを嘆じたが、媽宮灣頭に横たはる小島四角嶼の渚に打ち棄てられた累々たる白骨、さては又波の洗ふがまゝに任せた數多くの棺を見るにつけ、同じ思ひがひし／＼と身にせまる。

澎湖の地元來癩を病む者が少なくない。膿血融滌して膚膩悉く爛壞せば、親疎の別なく四角嶼に棄て去つて顧みない。傳へ云ふ癩に斃れし者を地に埋むれば、その膿血化してみ

ち芝の露となる。道をわけてその一滴が身に觸るれば、己も亦四角嶼に棄てらるゝ運命を擔ふに至ると。そのためでもあらうか癩の人死すれば、棺に收めて暮夜ひそかに四角嶼に棄てゝ來る。

今や當局の制裁嚴重で敢て禁を犯す者は無いとのことであるが、嶼のほとり風はたけり浪は狂ひ、鬼哭啾々悽慘の氣身にせまるものがある。

吉貝嶼

澎湖列島の最北を限り、一衣帯水遙に福建の一角と相對するのが吉貝嶼である。周圍二里十九丁、島は坦々僅に海面に浮び、白沙はその汀を飾つてゐるが、眼に映つる緑は少しも無い。附近一帶海中に岩礁散在し、航路の危険云ふべからず。その昔香港を發して姿をかき消した軍艦敵火もこのあたりに沈んでゐるのではないかと云はれてゐるが、怨をのんで水底に眠れる巨船の數も、島の廻りには決して少なくない。

傳へ云ふ吉貝はその昔海賊の巢窟で、暗に迷ふ巨船の姿を見れば、それを覆没せしめて掠奪するのが民の本業であつたと。怒濤荒れ狂ふ夜臺灣海峡を目ざして進み來る艦船が、

澎湖島素描

不 定 芽

針路を誤つてこのあたりにさまよへば、島の民は力を合はせて炬火を焚く。嬉しや島かと舵を轉すれば、光はハタと消えてあらぬ地點に又燃え上がる。點滅する怪火にあやつられて船は遂に岩礁に激突する。拵舞する島民は數をつくして進撃する。それかあらぬか民の家を訪へば、戸々羅針盤あり錨あり、船具山積、そのかみの荒仕事の様を思はせる。

今や吉見嶼の北に泛ぶ岩礁の上に、黑白ダンダラの北島燈臺は高く聳へて、一閃又一閃暗にもしるき光を送つてゐる。かくて名たゝる魔海も、安んじて舵をひき得る水域と化し、無限の怨をのんで覆没する船も殆んど絶無になつたが、今尙をさまらないのは島民の胸の中である。生活の途を奪ふ燈臺が建設せらるゝと聞て、工事監督事務所を襲撃したほどの猛者揃ひである。民情殺伐皇化に浴せず。民は日夜燈臺を指さしてはあの悪魔奴がとのゝしつてゐる。

附 記

濠洲へ旅立つた際行を共にした吉井幸藏老伯、北島燈臺の話に耳を傾けて、次の如く話された。

「それは日本でもあつたことで、天龍川の河口の村や山口縣の或る漁村は、その方面で可なり有名であつた。山口縣のその村では、目をかくした男が、三寶に御神酒徳利をのせて海岸へ運ぶ儀式があつた。途中徳利がころんで酒がこぼれると、その年は難波船が多いとて村民一同手をシャンと打つて喜んだ。

ところが英國にもその様な例があるよ。暗の夜に馬背に燈をしばりつけて海邊を除行させると、それが恰も汽船の燈火のやうに見える。沖を航走してゐた船が、それに欺かれて針路をあやまり、海岸にのし上げたところを掠奪するのジャ』云々

不 定 芽

高尾 懺悔

兄弟は他人の始まりと云ふが、性の合はない兄弟よりは、おさななじみのいとこの方がどれほど親しみを感じるかわからない。尤もMには卅幾人かのいとこがある筈だ。それ等の中には、顔を見たこともないのもあれば、近處に住んでゐると聞ても、その玄關の扉に手をかけたこともないのもある。が然し、五十の坂を越しても尙未だ眞ちやんと呼んでゐる二つ年かきの従兄は、Mにとっては親しみの最も深い良き相談相手であり、ともすれば厄介をかけがちな弟妹よりは、心おきなく物ごとを談ずることのできる男の一人であつた。

鼻たれ小僧の時代には、眞ちやんは年が上であつただけに、Mよりは少し智慧がすぐれてゐた。ついて來られては困る場合には、よく町角に立つて廻りくらをしゃうと云ひ出した。「懸命に走らないと眞ちやんの方が早いから、向ふ角を通り越してドン／＼行つてしまふよ。いゝか、一…二…三…」と走り出す。置いてけぼりを喰つてはたまらないと思ふMは、小さい足の續く限り眞ちやんとは反對の側に駈けて行く。汗をふき／＼町の他の角に

立つて右顧左眄して見ても、眞ちやんの影も形も眼に映つらない。うまくまかれたナと感ずると、口惜しさ腹立たしさが先に立つて、Mは地團太を踏んで泣く。その聲に驚いて飛び出して來た車宿の親爺が、「加藤さんの坊ツちやんも人が悪るいネ。どれ私が送つてあげるからだまつただまつた」と云つてMを邸まで送り届ける。眼を泣きはらして門をくゞるMの後姿を指さして、すぐ前の家に住んでゐた眞ちやんが、窓から顔をつき出しヤイヤと手を叩いて嘲笑する。

年下のMを見くびつてペテンにかけやうとする眞ちやんの惡るい癖は習ひ性となつたのか、年をとつても中々抜けなかつた。

遠い植民地のお役人になつて内地へ出張して來たMが、當時さる大きな會社に勤めてゐた眞ちやんの宅に宿つて公務に執掌してゐたところが、「無藝な堅造だと思はれてゐるMが内地へ出張して歸つたら、三味に合はせて意氣な端謡を歌ふやうになつたと云はれて御覽、面白い土産になるぜ。僕もつき合ふから習ひに行かうよ」と、とんだところへ誘ひをかけ

高尾 懺悔

不 定 芽

た。水心あれば魚心とでも云ふのであらうか、Mは苦もなく真ちやんの捕虜になつた。そしてニヤ／＼笑ひ乍ら、さばく彼の手綱で踊らされることを承諾したが、先づ第一にお師匠さんを探さねばと、そ／＼と下駄を突つけて二人は往來へ飛び出した。

顔見知りの世話女房が店頭に座つてゐる煙草屋に踏み込んで

「おかみさん!! 僕達はいきな小うたを習ひたいのだが、この邊にはよい御師匠さんはないでしやうか」

と物なれた真ちやんが切り出した。

「そうですねー、女の師匠の方がいゝが、あなた方はお若いから年寄りの方がいゝでしやう。あゝありますよ、この二つ先の露路をはいると、右手の二階屋に杵屋と看板がかつて居ますよ。年はとつても腕は中々達者だと云ふ評判でさア」

「初見參ではお土産が要るだらうが、どうしたものだらう」

「敷島の一箱も持つてお出でなさいよ、それで澤山ですよ」

ころんでも只是置きぬらしい口達者の女房が、御手のものゝ煙草を一箱賣りつけた。の

しをつけさせて、真ちやんは二人の名を記した上に御土産と書き添へた。

「善は急げだ、手順が整つたからにはすぐ乗り込まう」と、たじろぐMをせき立て、真ちやんは教へられた露路へ飛び込んだ。幾十年ドブ臭いしぶきに叩かれたのか、墨も消え消えになつた杵屋何がしの標札が、ねむそうな軒燈の光に照し出されたうす汚ない家がすぐ目の前に浮んでゐる。格子戸に手をかけて、一寸Mを振り返つた真ちやんは、ガラリと戸をあけながら「今晚は」と聲をかけた。

感心に白くはつてある障子がスルリとあいて、すぐ上りはなの二疊に据えた長火鉢の影から、遊び人らしい若い男が「どなた」と聞き返した。

「お師匠様はお宅でしやうか、御稽古を願ひに来たのですが」

真ちやんの聲はいんぎんであつた。

「年寄は今風呂に行つてゐるがすぐ歸りますよ。お稽古場は二階だから、マア御上りなすつて」

手招ぎしてMにも下駄をぬがせてしまった真ちやんは、Mに目くばせしてかゝえてゐた

不 定 芽

煙草の箱をこちらへと云ふ。ひつたくるやうにそれを取つて

「粗末なものですがお土産のしるしに」

と、息子と鑑定した猫板前の若者にそれを差し出した。

「すみませんネー」

と叩頭する彼を尻目にかけて、急傾斜な階子段をトン／＼と上つた二人は、見かけによらず小ざつぱりした室に三味が五六挺かけてあるお稽古場の様子を見まはして不安を一掃した様子であつたが、そのうちに格子戸のあく音と若者と二言三言かはす皺がれた聲とがして、階子段を踏む力弱い響が聞えて來た。

「どうも御待遠さま」

とペチャンと座つてお辭氣をしたお師匠さんなるものゝ尊顔を拜して、さすがの眞ちやんも、アツと聲を立てた。年寄りも程がありけりで、このやうな梅干婆をねらつたわけではなかつた。それも人品いやさからぬ老媪ならまだしも、目前に現はれたのは、東光坊が肝を消した安達ヶ原のそれにも較べつべき面構へであつた。

それでも師匠とあつてすぐ三味をかゝへ出したので、二人は互に顔を見合はせてタヂタヂしてゐるが、窮地に陥るとすぐ様背負投げを喰はせる奥の手を眞ちやんはすぐに活用した。

「この男は遠方から來てゐるのですが、滞京一週間の期間中に、何か長唄を一つ上げた
いと云ふのです。お師匠さん宜しく願ひますよ」

眞ちやんは手をついて、ピョコンとお辭氣をした。

「笑談云つちやいけませんよ、長唄が一週間で上るもんですか」

「それなら短いもので、都々逸ぐらひでどうでしやう」

氣をきかした積りで眞ちやんが半疊を入れると、お師匠さんの眼の玉がギョロリと光つた。そして

「こう見えてもこちらは杵屋で御座る。看板を見て御出でだつたらうに」

と、握つた撥を棄て、ソツポを向いてしまつた。

「成程私が悪う御座いました。教へて戴けなくては、切角發心したこの男が可愛想です

不 定 芽

から、何か長唄の中の短い段を一つお願い致します。ネーそれでよからう」
と、真ちゃんはいつの間にか介補になつて、Mはズルズルッと戦線に引出されてしまった。
「それなら高尾懺悔をやりませう。あたしの云ふ通りについて来るのですよ」
猛鷲の前の雀と云はうか、三味をかゝえた鬼婆の前にうづくまつたMは、いやでも應でも喉を開かねばならぬこととなつた。

「もみーちーいばーアのー」

「もみーちーいばーアのー」

寶生流できたへあげた幅の廣い聲で、音吐朗々とMが復誦するのを聞いて、お師匠さんは撥をカラリと投げ棄てた。そして柳眉を逆立てゝ二人をハツタとにらみ、

「馬鹿におしでないよ、あなた方は杵屋を荒らしに見えたのだらう。初心の者にどうしてあんなに上手にやれるものかネ。あきれた人達だ」

と、えらい見幕でつめよつて來た。形勢不穩と見た真ちゃんはMに目くばせした。そしてピョコリとお辭氣をして急な階子段をドドドッと馳せ降り、格子戸をピシヤッとしめて

表へ飛び出した。おかしさを噛みしめたMが

「恐ろしやかゝる憂き目を陸奥の、安達が原の黒塚に、鬼こもれりと詠じけん、歌の心もかくやらんと、心も迷ひ肝を消し、行くべき方は知らねども、足に任せて逃げて行

く」

と口ずさめば、駈け出す拍子にドブ板を踏みはずした真ちゃんが、「煙草が惜しかったナ」
と顔をしかめながらつぶやいた。

不 定 芽

白切符の旅

英語に多少自信があつたM學士は、同船の誰彼が領事館をおとづれたり、三井や正金の番頭共に平身低頭して旅行の世話を頼んだりしてゐるのを尻目に向け、單身地圖を手にして桑港のとある停車場に姿を現はした。その建物の正面には *S. P. Depot* とある。サザン・パシフィックの停車場と云ふ意味とは讀めたが、ステーションがデポでは日本の英語と少々違ふナと云ふ感じが起つたと同時に、一種不安の念がMの胸にサッと襲ひかゝつた。一寸日本のとは勝手の違ふ出札口の前に立つた學士は、明晰な發音で目的地までの一等切符を請求したが、げげんな顔をしたクラークが

“No first class ticket, sir!”

と答へて白い切符をボンと投げ出した。白切符は一等と云ふ念が頭にこびりついてゐるMには、何のことやらわけがわからなくなつた。

そして得意な英語もどうやら通じないらしいと云ふ感じがひらめき出したので、不安は

益々甚しくなつた。

とかうする間に改札のベルが響き渡り、Mは人波に押されながら改札口に近づいた。見ればむくつけき労働者も紳士も淑女もすべて白い切符を手にしてゐるではないか。

「ハハー金持ちの米國のことだから労働者までが一等に乗るのだナ」と自問自答しながらMはプラットフォームに歩を進めて車掌の指し示す客車に飛び乗つたが、座席も上等、車體も上等、日本ならば先づ貴賓車と云つても差し支へない構造なので、何だ矢張り一等車に違ひないではないか、クラーク奴何を血迷つたかと、白切符の優越感を胸に抱きながら室内に踏み込んだ。

見れば右側の椅子がつかたところに四角なコンパートメントがあり、その高いところに金文字鮮に *Ladies* とある。又左側も同様でそこには *Gentlemen* とある。成るほど男女の別がやかましい米國のことであるから、男女の座席に劃然たる區別があるのだナ。うつかり婦人席に座を占めてつまみ出されるやうな醜態を演じてはと第六感を働かせたMは、*Gentlemen* とある側の椅子に悠然と腰かけた。

白切符の旅

不 定 芽

轟々たる音を立てて心地よく汽車は走り出した。そして瞬く間に三つ四つの驛を通り過ぎたが、そこ此處から乗り込んだお客は、Mが想像したほど行儀のよいものではなかつた。

男子の席にのさばりかへつてゐる婦人もある。婦人席に足を延ばしてゐる男子もある。而して誰一人故障を云ふものがないので、Mは何が何だかわけがわからなくなつた。時がたつにつれ、婦人が立つては Ladies と金文字をかゝげてある側のコンパートメントに身をかくす。又男子は男子で Gentlemen とある側の小室に入つたり出たりする。不思議は益々高まつて來た。Mは狐につままれたやうな感じてその一隅を見まもつてゐるが、果然そのコンパートメントからツボンのボタンをかけ乍ら一人の男が現はれた。糞ツ!! 便所!!か とMは地團太を踏んで口惜しがつた。

そしてデモクラシーの國には、汽車に一等二等三等の差別がなく、切符は悉く白であると聞かされた彼は、ポケットに潜んでゐた白切符をつかみ出して床上にハタと投げつけた。

ジョルダン博士に師事して

一九三二年の秋八十歳で長逝された前スタンフォード大學總長デヴィッド・ドゥスター・ジョルダン博士と云へば、魚學の泰斗として名聲赫々であつたのは勿論のこと、常に排日の槍玉にあがる加州在住の同胞のために盡された熱烈な親日的態度により、その名は偏く邦人の間に知られてゐた。博士が初めて我國に來朝された際、明治天皇はわざわざ博士夫妻を宮中に召され、優渥なる御掟を賜つた上に、勳三等に叙せられたと云ふ一事に徴するも、排日問題がやかましかつた當時、日本の爲に博士が如何に奮闘されたかを忍ぶことが出來やうと思ふ。

終始一貫親日的態度を棄てなかつたジョルダン博士と我國との關係をたどつて見ると、そこに奇しきえにしが潜んで居ることを見出すことが出来る。一八七八年（明治十三年）のことであつたが、コーネル大學に於ける同窓で、當時東京帝國大學に於ける植物學教授であつた矢田部博士から、同大學の招聘に應じて動物學教授の任に當らないかと云ふ勸説

ジョルダン博士に師事して

不 定 芽

の手紙を受取つた。熟慮の末博士は承諾の旨を申し送り、正式の任命に接するまでの時を利用して能ふ限り日本の國情を調査したり、教育機關の状態などを調べて見た。ところが

晩年のジョルダン博士



その頃の日本國は、事大精神が盛んで教育上にも何等の自由が與へられてゐないことが明

らかなり、一旦受諾の回答はしたものの、博士の胸中には一抹の暗影が宿り出した。然し博士は何とは知らず日本に對して愛着の念を抱いてゐたために、官僚政治を嫌忌する心を克服して快よく赴任しようとして決心されたが、その交渉最中に矢田部博士は高等師範に轉任を命ぜられ、大學當局の態度が一變してモールス博士を招聘することに方針が急轉換してしまつた。このやうな次第でジョルダン博士と我國との縁は切れ、我國の動物學はモールス博士によつて開拓されることとなつた。

その際いち早くジョルダン先生を我國に迎へた方がよかつたのであるか、或は又スタンフォード大學を根城として活躍される方が博士の大をなさしむる所以であつたのか、その邊のことは神ならぬ我等には判らない。モールス博士はジョルダン博士より十三歳の年長で、等しくルイリアガシー博士の愛弟子であつた。一般動物學に精通し、兩手を用ひて黑板に美事な圖を描く特技を有し、特に美術の鑑識眼が高かつた點などは、日本の動物學開拓者として、自分より確かに適任の人物であつたとジョルダン博士は口ぐせのやうに云つてゐられたが、そのジョルダン博士の手によつて、後年日本の魚類が大々的に調査される

ジョルダン博士に師事して

不 定 芽

やうになつたことは、實に奇縁であると云はねばならない。

概括的に云つて見れば、太平洋の魚族はジョルダン博士並びにその弟子の手によつて調査されたと云つてもよいのである。布哇及び比律賓を領有してその水域の魚族を精査した關係上、日本近海の魚族も亦調査する必要に迫られたのであらうが、一八九八年にミツクリギンザメを發見報告したのを手始めに、矢繼早やに發表された多數の研究報告により、邦産魚類の殆んど凡てが同定され、それまで断片的に知られて居た魚界の狀況が手に取るやうに判明するやうになつた。博士によつて同定された邦産魚類のタイプスペシメンは、一部は米國々立博物館に、大部分はスタンフォード大學に整然と分類されて保存されてゐる。本邦に於て魚學に志ざす者が、一度は必ずスタンフォード大學を訪れるのは、比較せねばならぬタイプスペシメンがある上に、豊富な文献を活用することができるからである。序にスタンフォード大學の魚類標本室に就いて一言するが、世界各地の貴重な標本が、整然と格納されてゐる點は驚嘆に値する。即ち廣大な陳列室に並べられてある棚を、科名の



ジョルダン博士に師事して

景 全 學 大 ド ー オ フ ン タ ス

アルファベット順に別ち、それに屬名のアルファベット順に分つた標本を、更に種のアルファベット順に小分けしてズラリと並べてある。カードを繰つて先づ目指す標本の所在を確かめ、次に標本室へ行つて見ると、何千とも知れぬ多數の標本の中がら、所要のものを即座に取り出すことが出来る。その標本室と完備せる魚學圖書室と、

“Go wherever the masters
are in whatever field you

不 定 芽

wish to study”

と云はれたジョルダン博士が Master として鎮座するスタンフォード大學の名にあこがれて、世界大戦が漸く酣になつた一九一七年の初夏の頃、M 學士はパロアルトの地を踏んでジョルダン博士の門を訪れることゝなつた。

M は歐米へ留學の命を受けた當初、先づ第一に大英博物館に足を駐め、以て魚學を専攻しようと思ひ定めたが、船の都合で途を米國に取り、桑港に上陸するや否や恩師飯島魁博士の紹介状を携へて、スタンフォード大學にジョルダン博士を訪れた。時恰かも卒業式週間のまつ最中で、あと數日で長い暑中休暇が初まる時であつたが、博士は M の顔を見るなり、自分は夏中研究室に居るから、君は茲に留まつて研究に着手せよと云はれ、有無を云はさず先生の居室の直前にあつた Laboratory for Advanced Ichthyology と扉に記さされた實驗室に連れ込み、とある机を指して茲に座はれと命ぜられた。何とは知らず威壓を感じたとても云ふのであらうか、見上ぐるばかりの巨軀の持主である大學者ジョルダン先

生の慈言を耳にして釘附けのやうにされた M は、英國行きの希望を投げ棄て、博士の膝下に留まらざるを得なくなつた。それでは御世話になりますと答へた M を見下ろしてニコリと笑はれた先生の溫容を仰ぎ見た刹那、M は早くも Master を尋ねあてた幸福者であると云ふ喜びを満喫し、その後約一年有半絶えず先生の聲咳に接しつゝ研學にいそしむ身となつた。

これから述べんとする色々な物語は、M が身を托した Jordan Hall 即ちスタンフォード大學の動物學教室内で起つたことであるから、當時の環境の状態を今少し詳しく記述して置かう。

M が席を與へられた實驗室の直前は、先に述べたやうにジョルダン博士の居室であつたので、夏の日に双方で扉をあけ放して置くと、机によつて調べものをしてゐられる先生の姿が手に取るやうに見えたと云ふよりは、先生が一寸右を向かれると窓に對して座つて居る M の後姿をいや應なしに監視し得るやうになつて居た。M の居室の隣は魚學圖書室で貴

ジョルダン博士に師事して

不 定 芽

重なる文獻が山と積まれ、その一隅に魚の畫を専門に描いて居るアトキンソンといふ老年の畫工が、ライブラリアンと云ふやうな格で控へて居た。Mの實驗室と圖書室との間にはドアがあつて、常にこれを開け放して置いたので、アトキンソンとMとの交通は自由自在であつた。圖書室の向ふ隣は當時助教授であつた J. O. Snyder の研究室、その向側は魚學者として一家をなしてゐた F. C. Starks 助教授の室であつた。スタークスの室とジョルダン先生の室との中間の室は、假剝製の鳥類標本を格納してあつたが、以上六室がジョルダンホール階下の突き當りの廊下の左右を充してゐた。尙一つ書き添えておくが、スタークス助教授の室の前の壁際に水飲み器があり、その上の壁面が教室の掲示場であつた。ジョルダン先生の室は北と西とに窓があつて、東側の壁に向つて大きなデスクが据えてあり、先生の廻轉椅子のすぐ後方に、大きな廻轉式の書架が置かれてあつた。先生の机と直角におかれてある机にタイプライターがあつて、秘書兼書記の役をするステノグラファールの婦人が着席して居た。

博士が出勤されるのは毎朝八時前後で、ジョルダンホールの大扉がギョとあくと同時に、巨軀を運ぶ大きな靴音が全教室に響き渡る。その音が我等の室に近づいたと思ふと、スタークス助教授の室の前でハタと止まり、水呑の栓をひねつて長鯨の如き勢で水をガツと吸ひ上げる音が聞えて来る。その都度アトキンソンが、それ魚を屠る鯨が來たと云つてはMに目くばせをしたが、出入毎に先生が飲まれる水の量は大了ものであつた。先生が居室に收まると、先に來て居るステノグラファールが、すぐさま小さい速記帳を手にして先生の机の側面に陣取り、その日發送すべき信書その他重要書類の内容を口授されるまゝに速記してすぐさまパチパチとタイプライターの音をたてる。その騒音の中で先生は悠々と仕事にとりかゝられるのがその常であつたが、参考書が入用になると、Mの室を通り抜けて圖書室に入り、あれやこれやと参照された後、道を轉じて必らず圖書室正面の戸をあけ、扉を大きく開放したまゝ居室に戻られる。このやうに扉をあけ放して出て行かれることは先生の常習犯であつたが、その都度畫工のアトキンソンが立ち上り、澁面造つてパタンと戸をしめる。

ジョルダン博士に師事して

不 定 芽

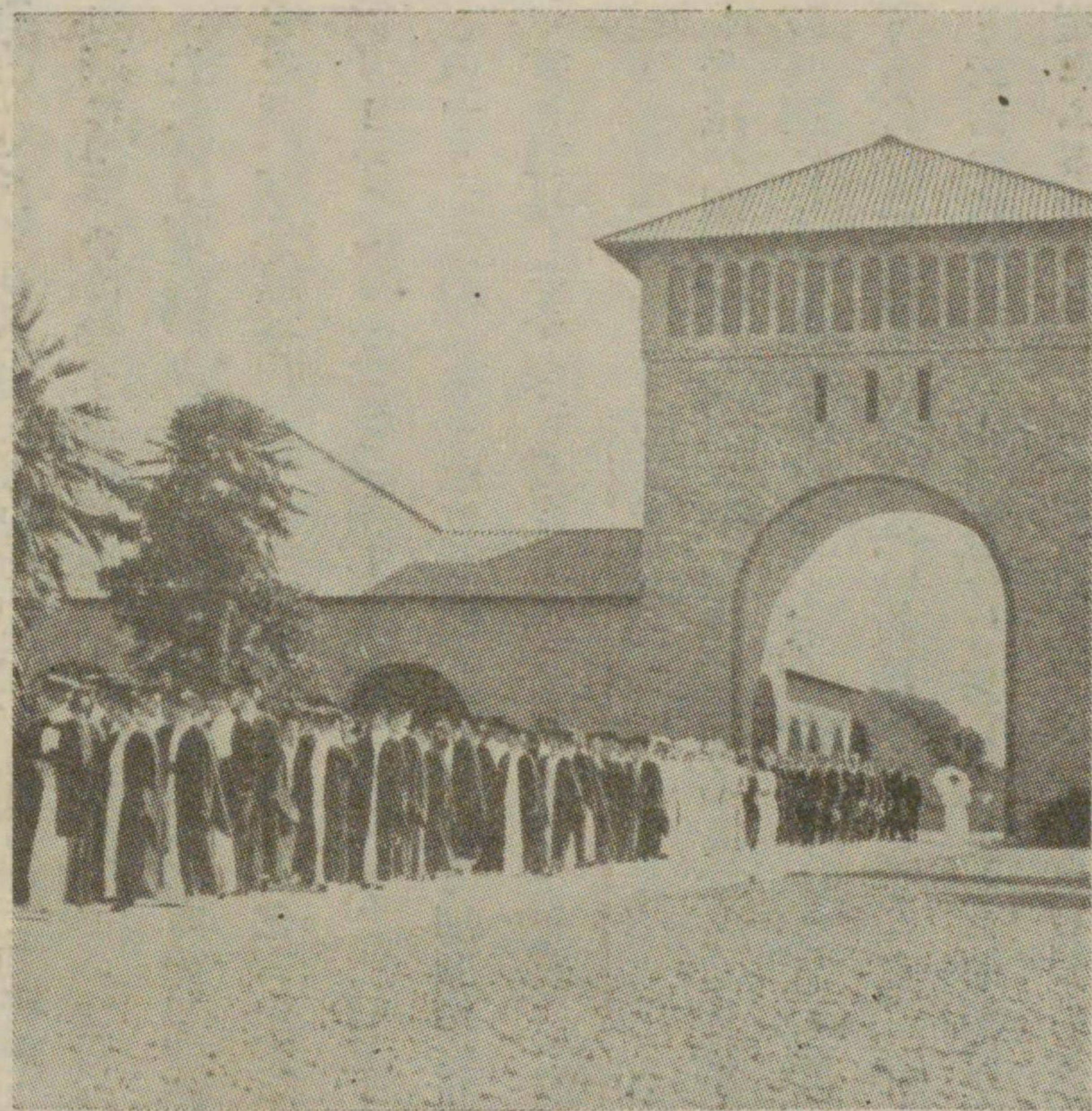
或る日のこと、アトキンソンが去り行く。ジョルダン先生の後姿を見送つてMにさゝやいて云ふのは、「ジョルダン博士は馬小屋で生まれた男だぜ」と。意外なニュースに驚ろいたMが、「それはほんとかね」と反問したところが、彼は面に微笑を浮かべながら、「だつて馬小屋には戸が無いではないか」と答へながら、又扉のハンドルを握つてトンとしめた。

扱てジョルダン先生の手許に到着したMは、日本から携行した淡水魚の標本を取り出してその研究を開始したが、毎日午後四時頃になると先生がやつて來られて「何か困難なこととはなかつたか」と尋ねられる。當時Mに取つて最も難事であつたのは、羅典語、佛蘭西語及び和蘭語等で書かれた原記載を読みこなすことで、辭書と首引でそれ等の一頁を読みこなすに可なりの時間を費した。そこでそのことを先生に傳へたところが、「宜しい。讀んでやるからその原著を見せなさい」と云ふ。「標本とよく見較べて」と云はるゝまゝに解剖皿にのせた標本をジッと眺めてゐると、先生はMにとつて難解の文獻をとり上げ、恰も見馴れた英書を繙くが如く、英語に譯してドシドシ讀んで下さつた。先生の外國語に關する

造詣がどれ程深いのか測り知ることが出來ず、日を重ねるに従つて愛敬の念が益々加はつて來たが、このやうな指導振りが如何に有効であつたかは云ふまでもないことである。先生は羅典語やグリーキに精通して居られるので、學内の諸教授が新しい屬名や種名などを創設する場合には、必らず先生の助言を乞ふのがその常であつた。馬鹿に長い學名やグリーキとラテンとを混用した學名を附することは宜しくないと先生は常々申されたが、このやうな意味の名を附けたいと申し出ると即刻適當な辭句を選び、その原語を希臘文字で書き現はして丁寧に解説して下さつた。

先生が選ばれた學名に關して珍談があるからこの機會にそれを紹介して見やう。日本産の魚類に *Snyderia yamanokamii* Jordan と云ふ學名のあるが、文獻を繰つて居るうちにそれを見出したMは、抱腹絶倒を禁ずることができなかつた。と云ふのは *Snyderia* と云ふのはスナイダー助教授にデヂケートした屬名であるから別に文句はないが、種名が實にふるつて居た。スナイダー夫人はそう申しては失禮であるが、學内でも餘り評判のよ

ジョルダン博士に師事して



學位授與式に向ふ卒業式の行列

くない金棒曳きであつた。それを表徴するかの如く「山の神」と云ふ種名を附してあるのでMは獨り噴飯した。その様を見つけたアトキンソンが何故かと尋ねたので、その事わけを話したところが、彼も亦カラカラと笑つた揚句、何故そんな妙な名をつけたかジョルダン先生に聞いて見給へとそそのかした。Mは早速先生の室を叩いて Yamanok-a

の meaning の意味の説明を乞ふところが、げんんな顔をした先生が、
 “Mountain Goddess ! Beautiful name ! Tsut it ?”
 と反問された。加州生れの日本人が「山の神」の眞意を知らずしてそれを直譯したのが事の起りであると判明したが、長く芳名を學界に残すやうになつたスナイダー夫人こそ知らぬが佛とは云へよい面の皮ではないか。

先生がものされた日本産魚類に關する研究報文のうちに、時折間違ひではなからうかと思はれる記事があることに氣がついた。充分精査した上どうもMの者の方が正しいと云ふ確信を得た場合には、遠慮なく先生の室に押しかけて意見を開陳したが、大學者である先生は、己れの誤を指摘されてゐるにも拘はらず、取るにも足らぬM如きもの言を傾聽され、暫らく考へられた後に

“This is my mistake. You are all right.”

と云はれ、チョコッキのポケットに潜めてある短い鉛筆を取り出してその記事を力強く抹

ジョルダン博士に師事して

不 定 芽

殺されるのがその常であつた。日本の大家と呼ばれる人々がその後進に揚げ足を取られた場合、これだけの襟度を示し得るであらうか。後進が少し頭を出すと、懸命にそれを叩き伏せやうとあせる人の多い日本の學界に、ジョルダン先生のこの態度は、是非移し植えたものであると思ふ。

先生の著書は魚學に關する専門書以外に、平和運動に關するもの、時局を論じたもの、或は青年訓とでも云ふべき各種の講話集等多種多様のものがあり、孰れも多數の讀者を有して居たが、その文は平易で然も氣品があり、名文として世に定評があつた。Mが親しく先生に師事してゐた際に、先生は日々熱心に自叙傳を執筆されてゐた。毎日校正刷が到着すると、居室の扉に“Dr Jordan has gone”と認めた紙片をはつて自宅へ歸へられるのが、その常であつたが、その際には如何なる用事があつても先生の邪魔をしないやうに、教授連を初めすべての職員が注意を怠らなかつた。と云ふわけは、先生の忠實な助手はジョルダン夫人であつた。先生は如何なる種類の著書でもその校正刷を夫人に讀んで聞かせ

ることにして居られたが、聴き役を務めて居られる夫人は、少しでも理解し兼ねる辭句を耳にすると、すぐさま朗讀を中止させてそれを更にわかり易い文句に書き改めさせるやうにされてゐた。夫人はナイト提督の令妹で賢夫人のほまれが高かつた。その助言が先生の文章をして簡明平易な名文たらしむる基となつてゐたのであるから、人を避けて文を練つてゐられる折には、すべてが遠慮して近づかなかつた。

話が少し顛倒するが、最初Mがジョルダン先生の客分と云ふ形で研究に従事してゐるうちに、長い夏休みが終つて新學年の授業が開始されることゝなつた。入學願書受附日が來て、今まで閑寂であつた校庭が俄かにざわめき出したその日のこと、先生はツカツカとMの實驗室へ歩を運ばれ、君もこの際正式に大學生として登録して來るがよいと申渡された。そこで事務所へ行つて願書を貰つて見たところが、記入すべき欄に「學位を要求するや否や」と云ふのがあつた。Yes と入れ、ば規定の試験を悉く受けねばならないが、No と入れ、ば外國留學生として講義を聞き放しにして差支へない。

ジョルダン博士に師事して

不 定 芽

如何にすべきか去就に迷つたので、早速ジョルダン先生の指揮を仰いだところが、即座に Yes と記入せよと命ぜられた。そして云はれるには「自分は日本の帝國大學の内容とその卒業生の學力とを熟知して居る積りである。政府から派遣された君達のやうな留學生がこの大學の課程を正式に蹈んで、米國人以上に優秀な成績を示し得ることは申すまでもない事柄であると思ふ。スタンフォード大學にも多數の日本人學生がゐるが、大多數は米國生れで日本を代表せしむべきものでない。その成績を見て諸教授が日本人の眞價だと思ひ定めるやうなことがあつては遺憾千萬であるから、日本で正式に教育された留學生がその實力を發揮して日本人の眞價を示して貰ひたいものだ。日米親善は兩國民の代表的分子が互によく了解することによつて促進されるのであるから、次に自分が日本を訪づれる際には、政府の留學生を時に加州へ送ることを建言する積りである」と。

凡ての學科を受験せねばならぬことは、Mにとつて随分迷惑な話ではあつたが、それが日米親善のためだと説かれるジョルダン先生の切々たる訓言には應ぜざるを得なかつた。先生の膝下にあること一年有半、學位授與式を終つて學位記を先生の机上に差出した時、

先生は “That is good!” と云はれてすぐさまペンをとり、羊皮紙の上へ黒々と David Starr Jordan と署名された。

魚學界の巨星墜ちて轉た寂寥の感に堪えないが、Mはこの好個の記念物を抱き、My student と呼ばれた先生の愛撫に報ひる覺悟で、今尙驚馬に鞭つてゐる。

ジョルダン博士に師事して

不定芽

頭の固いアガシー

ルイリアガシーは、米國自然科学の父とも云ふべき人で、その門下からは多數の逸足を輩出させたが、スタンフォード大學生物學教室の正面入口を飾る大アーチの上には、スタンフォード夫人が崇拜してゐたと云ふフンボルトの像と相對してアガシーの大理石像が飾られてゐる。

スタンフォード大學の動物學關係者の間には、Zoology Club と云ふ半社交的の機關があり、學生卒業生並びにその家族などが相集つて遠足を試みたり歡談會を催したりすることになつてゐた。

或日のこと動物教室の一角に例會開催の掲示が現はれたが、珍らしいことには衆人畏敬的である名譽總長ジョルダン博士が當夜のスピーカーとして出席される旨が記してあつた。その演説を聞き洩らしてはと思ふた筆者は、早速出席の旨を當夜の主人役をつとめるS助教授に通じたところが、S助教授は口に手をあて、「あの掲示は人よせの一策であつ



桑港大震災の際墜落倒立したアガシーの大理石像

頭の固いアガシー

て、當夜はジョルダン先生の名演説のレコードを持ち出すわけだ。眞に受けて呉れては困るぜ」と耳うちした。

その當日、會場と定められたS助教授の邸へ推参して開會の時刻を待つてゐたところが、突然玄關に拍手が起り、來ない筈のジョルダン博士が、老軀をひつさげてヒョッコリと姿を現はした。聞けば、當夜の催し

不 定 芽

を耳にされた先生が、レコードよりは眞物が出た方がよからうと云はれ、進んで出席されたとのことであつたが、思ひがけない珍客の出現に、會するもの凡てが歡呼の聲をあげ、どつかと椅子に腰を下ろされた先生のまはりを取りまいた。

温顔に笑を湛えた博士が、「今晚は一つ諸君の質問に應じて昔語りをするから、何でも聞いて呉れ」と云ひ出された。そこで先づ第一番に立ち上つたP教授が、「先生!! アガシーと云ふ方は、どんな性格の人でしたか」と質問の第一矢を放つて見た。祖父が孫に對するが如き態度で一同を見廻はしてゐた博士はやをら顔を上げ、「アガシー先生は理智の人であつたゞけに、頭は随分固かつたよ。ソレあの桑港大震災の時であつた。高いところからまつさかさまに落ちてひどく頭を打つたが、少しも傷を受けなかつた」と、涼しそうな顔をしてその間に應酬した。

今尙人口に膾炙する桑港大震災火災の當時であつた。前記のアガシーとフンボルトとの大理石像が、まつさかさまに轉げ落ち、瓦を敷きつめた歩道に上半身をつき込んでさか立ちをしたやうな有様になつた。然し不思議なことには、二つながらかすり傷一つ負はなかつたので、今は又舊位置に飾られてゐる。

當意即妙な博士の答を耳にした一同は、破るゝばかりの拍手をあびせかけた。そして更くるを知らぬ楽しきまどろは、博士の口を突いて出づる珍談に活氣づいて、月影淡き頃まで打ち續いた。

頭の固いアガシー

不 定 芽

孰れが是孰れが非

スタンフォード大學にあつて一年有半を送つた筆者は、定められた業を終つて東部諸州へ旅立つた。シカゴ大學を訪ひ、ハーヴァード大學を訪づれて、足は更にウッズホールの臨海實驗所に向つたが、頃は夏の最中であつたので、コロンビア大學のウエルソン、モルガン兩教授、並びにシカゴ大學のリリー教授等を筆頭に、世界で名高い碩學が集つて、生氣潑刺たる有様を呈してゐた。

筆者を引見したモルガン教授は、折から筆者が研究の手を染めてゐた遺傳學上の或る問題に就て多大な興味を惹き起し、將來の研究方針に關して有力なる助言を與ふると共に、そのやうな良き問題を持つてゐながら、何故自分の手許へやつて來なかつたかとなじられた。教授は問ふ。

「君は日本から來たのですか歸るのですか」

「歸るのです」

「米國にはどれほど長く居たのですか」

「一年有半」

「その歳月を何處まで暮したのですか」

「スタンフォード大學で魚を勉強して居ました」

筆者の答を耳にしたモルガン教授は、これは不思議と云はんばかりに筆者の顔を眺め入つた。そして軽く筆者の肩を叩き

「魚の鱗を數へたりする仕事は博物館に任せて置くべきで、大學で手を染むべきものではない。今こゝで相對して語り合つたやうなことを研究するのが眞のサイエンスである。

これで日本へ歸るとは。大きな寶を抱いてその光を仰ぎ見ぬ君のために之を惜しむ」と云はれて長大息を催された。

旅を終つて母校に歸着した筆者は、恩師ジョルダン博士に見えて右の會見顛末を報告した。ところが聞き終つた博士は莞爾として口を開き

「モルガンは博物學を知らぬ男だ」

孰れが是孰れが非

不定芽

とさゝやかれた。

實驗動物學の壘を守るモルガン博士と、魚學に終始するジョルダン博士と、孰れが是にして孰れが非なる？ その決は筆者は知らず、只觀る人の心ごころに任せて置く。

うそをつくワシントン

ゆるく流るゝポトマックの河を、ジョージワシントンの名にあこがるゝ幾多遊覽の客をのせて、さゝやかな汽艇が靜に走る。長堤を埋むる櫻の並木に故國の春を忍び、次第々々に消えゆくワシントン塔に別れを告げて南へ南へと河を下れば、行くこと十六哩にして、ワシントン將軍墳墓の地であるマウントローヴァーノンの埠頭に着く。河畔高臺の一部を占むる約八千エーカーの領域、こんもりと茂つた森にかこまれた丘のいたゞきに、粗末な木造三階建の家屋が見える。功成り名遂げたジョージワシントンが、心靜に老後を養つて神に召されたその邸である。家の前には清い緑の芝生があり、裏庭には區劃整然たる花壇があつて、將軍自身が植えたといふ樹木も數多く榮えてゐる。邸宅の南方は緩漫な斜面をなし、その一段と低いところにワシントンの墓がある。前面に鐵格子の扉がはまつた赤い煉瓦造りのさゝやかなおくつきで、樹蔭が垂れ下つた正面上方に、

「こゝにジョージワシントンの遺骸横はる」

うそをつくワシントン

不 定 芽

と書した墓誌銘がはめ込んである。

ワシントンへ来たからには、マウント・ヴァーノンを見落してはと、寸暇を盗んでこゝまでやつて来たM學士は、舊邸を見て墓を見てすぐさまワシントンに引き返し、国立博物館の門をくゞつて研究室に立てこもる知名の學者達をたづねて見た。

初めて遇つた魚學者ピーン博士が、今日の午前はどこへ行つたと聞き正した。

「マウント・ヴァーノンへ」

「ジョージ・ワシントンは日本でも有名ですか」

「有名ですとも、特にワシントンが櫻の木を切つた話などは、小學校の讀本の題材にもなつてゐる位で、虚言をつかぬ正直な人間と云ふことで、ワシントンの名は津々浦々に鳴り響いてゐます。」

「それなら質問するが、マウント・ヴァーノンの墓誌銘に何と書いてあつたか記憶してゐますか」

「“Here lies George Washington” と記してありました」

「それでもワシントンは正直者だと云ふのですか」
と云つてピーン博士は呵々大笑した。何のことかと一寸まごついたが、成程々々「此處でジョージ・ワシントンがうそをつく」とも讀み得るのである。Mはあまり鮮やかな背負投げを喰はされて、只眼をパチクリさせるばかりであつた。

不 定 芽

ガーマン博士を訪ふ

數年前物故された Samuel Garman 博士は、鮫類の研究にかけては世界的權威であつたが、ガラパゴス島の特産としてその名を知られてゐる象龜に關する膨大な研究報告なども、先生が手を染めたかゞやかしい業績の一つとしてその名を知られてゐる。

博士がこの世に別れを告ぐる時まで孜孜として研究にいそしんでゐた場處は、米國ハーヴァード大學附屬自然博物館のうす暗い地下室の一隅であつた。或る年の夏、米國東部諸州に杖を曳いた筆者は、音に名高い該博物館を參觀した序に、碩學ガーマン博士の風貌に接したいと思ふて、館長にその居室と在否とを聞いて見た。ところが館長の云ふのには、「ガーマン博士の研究室は地下室にあるが、俗界とは無關係で、事務室などへは決して姿を現はさない。こゝ數ヶ月予は全くお目にかゝらないからその動靜はわからない。マア試に下へ廻つてドアをノックして見給へ」と。

日本の學者の中でも、研究に没頭してゐて俗界とは頓と無關係な人も尠なくはない。解

剖學の權威K博士が、日露戰爭があつたことをすら知らないで研究室に立て籠つてゐたことなどは、餘りにも有名な話であるが、近頃の學生の中にも、時たまかゝる部類の人間が現はれるから愉快である。

油壺臨海實驗所の寄宿舎に學生が集つてその日その日の新聞を読みふけつてゐた際、今は北大の助手におさまつてゐるIと云ふ愉快な男が、「何か問題を起してゐるトコツグと云ふ人間は何者じや」と、突然奇聲を發して一座を見廻はした。「馬鹿野郎!! 床次竹次郎じやないか。政界の巨頭の名ぐらひは覺えて置けよ」と、クラスメートに冷かされた。ところがIは平然として、「俺は數年來新聞を讀まんから、そんな餘計な奴の名は知らん」とすました顔をしてゐた。

博物館長の話振りから想像して、ガーマン博士もこのやうな連中の一人かなと思つた。然し何はともあれ會つて見なくてはと、地下室に通ずる小さなドアの前に立つてノックして見た。ところがしはがれた低い聲で「カム イン!!」と答があつた。そこで恐る恐る室内に踏み込んだ筆者は、山と積まれた書籍に埋つて、何事かを研究して居られた童顏の

ガーマン博士を訪ふ

不 定 芽

老博士に近づき、恩師ジョルダン博士が認めて呉れた紹介状を渡して來意を告げて見た。手紙を読み終つたガーマン博士は、ニコ／＼と笑を湛へて握手をした後に、「遠來の客に何も見せるものが無いが、これでも見て貰はうか」と云つて古ぼけた書架の戸を引きあげ、大きな新聞のやうなものをひき出した。驚く勿れそれはリンネウスの歴史的名著“Systema Naturae”の第一版であつたが、次から次へと持ち出されたのがこの珍書の第十版に至るまでの凡てのものであつた。「君の先生であつたジョルダンは、盛んに採集旅行をして野外に活躍する人であつたが、僕は旅行に金を使はないで、その費用で極力文献を集めることにしてゐる。それでこの室には魚學に關する重要文献は、殆んど洩なく集めてある」と云はれたが、實際その言の通りで、先生の居室はまるで珍書の山であつた。「予は採集に出かける暇が無い、まだまだ未解決の問題が澤山にある」と云ひ乍ら、博士は筆者を次の室に導いたが、そこには頑丈な標本箱がズラリと並んでゐた。「これは我等の師であつたルイ・アガシーが西印度で集めた魚類の標本である。この調査がまだ片づかないのだから、僕は懸命に研究を続けなければならない。だから俗界のことなどはかまつてゐられないのだ」

と博士は述懐されたが、うす暗い室の中で標本を指さし乍ら靜に物語る老學者の風貌を仰ぎ、このやうな學者があつてこそ眞理は發見されるのだナと云ふ感じがヒシ／＼と胸に湧いて來た。

別れに臨み、「淺學若輩のことなれば、今後も宜しく御指導を願ひます」と挨拶をしたところが、博士は手をのべて筆者の背を叩き、「そのやうな心掛けでは學者になれぬ。人に頼るな、自然を師として學べよ」と、意外な言葉を投げかけて遠來の客を戸口に導いた。

“Study nature, not books”とは米國の生んだ大自然科學者アガシーがその弟子に與へた言葉である。その流れを汲んだガーマン博士やジョルダン博士が、自然科學者としてその名をなした妙諦は、只この一點に存するのである。「人にたよるな、書物にたよるな、深く自然を學べよ」この大精神を、自然に關心を持てる我國の若人の胸に移し植えたいと思ふ。

不 定 芽

にらみあひ

サンタフィー線により、アリゾナのグランドリカニオンを見物して加州に向はふと決心したM理學士は、二三の友人に送られてシカゴの中央停車場から發足した。列をなして改札口を通る乗客に混じて、チヨコと歩みを運ぶ東洋婦人の姿が見える。黒い質素な洋装とその面貌から推して支那人だと直感したMは、自分の乗るべき寢臺車を探し出してステップに足を踏みかけて見ると、先程チラと見たその支那婦人が、同じ車の中央部にチヤンとおさまつてゐる。セントルイスを過ぎ、アルカサンス河を越え、汽車が南へ南へと走るうちに、同車した乗客が一人減り二人減り、三日目の夜には、廣い車内に學士と支那婦人とよくしやべるアメリカの婦人と、只三人が残されることゝなつた。定めの時が來るとポーターがやつて來た。そしてベッドを造るから席をたつて呉れと命令した。戸口に立つてベッドのできるのを待つてゐたアメリカ婦人が、

「今夜はたつた三人で、まことにお淋しいですネー」

と學士に話しかけた。ところが

「エ、それが然も互に國籍の違ふ三人だから面白いではありませんか」
と學士が答ふるのを聞いて、その婦人はげんな顔をした。そして學士の顔をのぞき込みながら

「でもあの婦人はあなたと御同國の方ですよ」

と云つて、黒洋服を顧みた。

「我々には英人と米人との區別が中々つき兼ねるやうに、あなた方には日本人と支那人との區別が中々つかないのだ。我々が一目にらめば、日本人か支那人かは即座に判明する」と惡どいほど言葉が達者になつてゐた學士がやり込めたが、相手もさるもの中々だまつてはゐなかつた。

「それでもあの方は、東京のミッションスクール出身で、母親が東京に住んでゐると云つてゐますよ」

と意外な巨砲を打ち出した。

にらみあひ

不定芽

しまったナと思つたMは、大急ぎでベッドへもぐり込んだ。そして二人の女が並んで腰をかけて、何かクチャ／＼しやべつてゐるのを夢うつゝと聞き流しながら華胥の國に遊んでしまつたが、翌朝目ざめて車の端と端とで對座して見ると、所謂支那夫人の眼からいなづまのやうな光がほとばしり出でるやうな氣がして、氣まづいこと甚しい。おしやべりのアメリカ人奴、話したナと思ひながら、成るべく視線がかち合はないやうにしてゐたが、その日の晝頃どうしてもその婦人と話し合はねばならぬ用件が出来た。まゝよと度胸をきめた學士はツカ／＼と歩を進めて支那婦人と思つた同胞のほとりに近づいた。そしていんぎんに名乗りをあげたところが、ヂッとこちらを見入つたその婦人が、ハンドバッグの中から一葉の名刺をつかみ出し、だまつてそれを突きつけた。見れば日本の婦人名刺で、確に加藤よし子と書いてある。冷汗背をうるほすどころかこの一撃に膽を奪はれた學士が恐る恐る要件を語り出すと、相手は忽ち流湯な英語で應酬し出した。F女學校を卒業して滿六年費府の女子大學で學んで來たとか、英語と來ては御手のものと見えて、今度は立て板に水を流すやうなその英語で學士を攻撃しようとする。負けてたまるかと學士もしきり

に應戰する、遂に大陸横斷の旅を終るまで、にらみあひにらみあひ、日本語を一つも用ひずに走せ去つた。

東京の土を踏んだM學士は、イの一番に叔父の家をおとづれた。そして歸朝の挨拶を述べたところが、社用で渡米して一足先に歸つてゐた叔父が、「お前はこれこれの日に、サンタフィーでシカゴから南下してゐなかつたか」と質問した。

「左様」

と答へたところが、「俺もお前だと思つたよ」と云つて、次の如く語り出した。

「歸りに俺が乗つた船に、F女學校の加藤よし子さんが乗つてゐた。そして旅行中日本語を一語も話さず、魚の話は非常に精しい不思議な日本人に遇つたと話してゐたので、その様子から察して、相手はテッキリお前だナと感づいたわけサ。そこでそれは僕の甥に違ひないと云つて置いたが、どうだ一つ加藤さんに遇つて見ないか、先達もこゝへ見えたよ」と。

桑原桑原!! 東京へ歸つてまで英語でやられてたまるものかと、Mは冷汗をふき／＼叔

にらみあひ

不 定 芽

父の邸を出た。

時経て札幌に寺部博士を訪ねたMが、話序に右の事實を物語つたら、

「ホウ、その加藤よし子さんなら、北大の化学教室で働いてゐるよ。どうだ遇つて行つては。電話をかけて呼ぼうか」

と寺部博士が云ひ出した。此處にも伏兵ありと知つた學士は

「イヤもう時間がありません、急ぎますから」

と挨拶もそこ〜くに、後をも見ずに駆け出した。

動物園めぐり

動物園めぐりと題をかゝげても、自らが足跡を印した地は、人様のやうに世界に行き渡つてゐるわけでもなし、又特に意にとめて仔細に各地の動物を視察して來たわけでもないから、巡禮紀行式の案内記を書き出すつもりでは毛頭ない。要するに檻に入れられた動物をジッと見まもつてゐるうちに、頭に浮んだ事柄の一つ二つをかき集めて見たのに過ぎないのである。

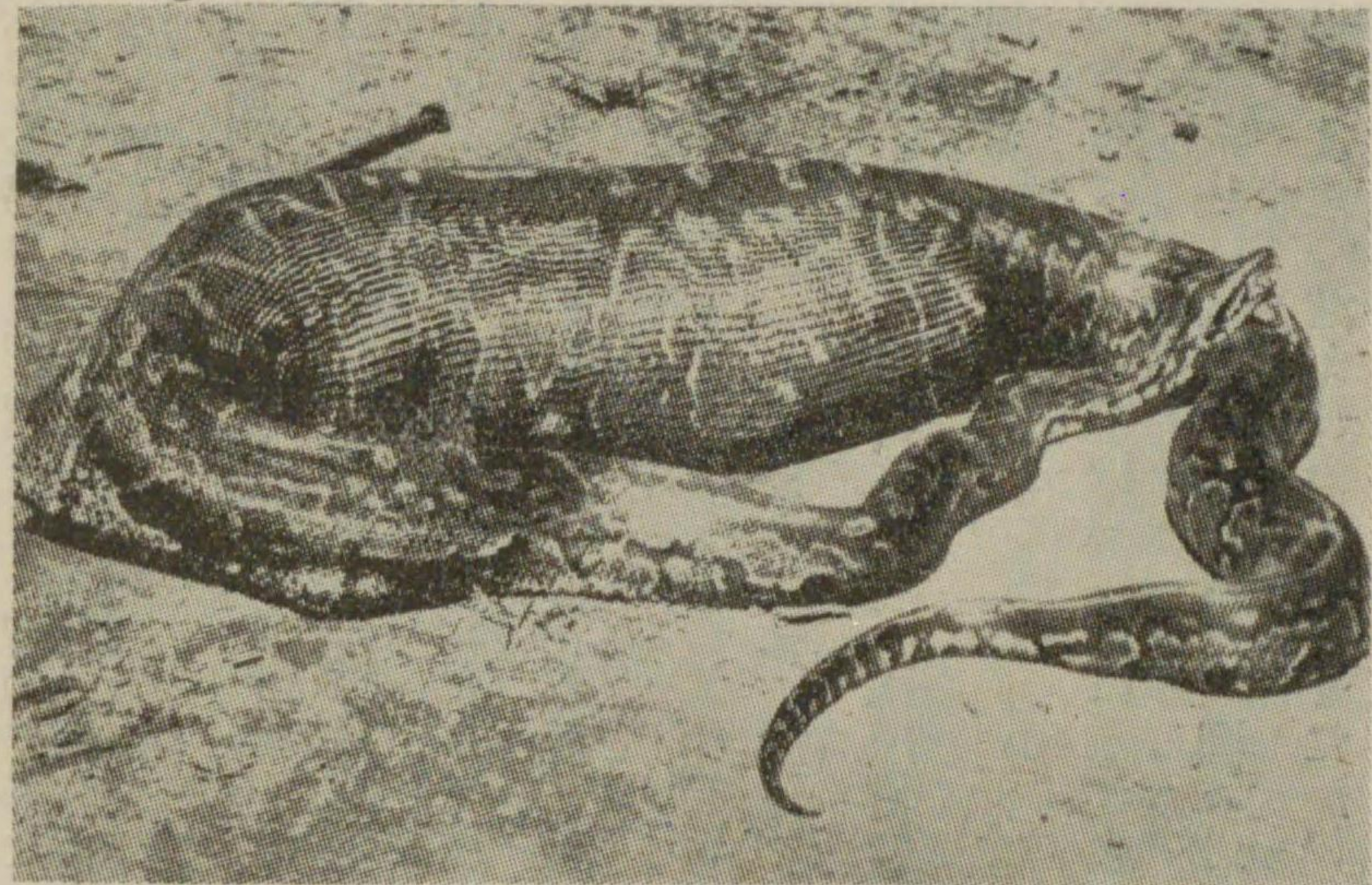
猩々一升の糞となる

臺北の動物園は、さすがは熱帯に近い地にあるだけに、大蛇バイソンが或る日とんだ喜劇を演出した。

當時バイソンのお隣の檻には、之も人氣者の猩々が居を占めて居たが、或る朝のこと、その室を見廻つた看守人は、猩々の檻にバイソンがもぐり込んで居るばかりか、主人公の猩々は天に消えたか地に失せたか、嚴重にとざされてある室内に影も形もないのに驚かさ

動物園めぐり

不定芽



猩猩を呑んだパイソン

れた。近よつて能く見ると、パイソンの腹部は山程にふくれて身動きもならぬ状態になつて居たのみならず、何かにかきむしられたと見えて、巨大な鱗片をそこ此處に落して居た。讀めたり讀めたり、氣の毒な猩猩はパイソンの腹中に葬られたのである。暗に乗じて隣りの大蛇パイソンが、排水溝から忍び込み、驚き騒ぐ猩猩を一呑みにしたのである。

事が判明した園内は、上を下への騒動となつたが、腹がいたく膨れて居るので、パイソンを引き出すすべがない。餘義なく猩猩の檻を假の宿として置いたが、數日の後一升餘りの糞をうづ高く積み上げて、元のお宿へスツ

と立ち歸つた。猩猩が一塊の糞となつたと云ふ評判は評判を生んで、時ならぬ觀覽人の群が殺倒したが、その際茶屋の婆さんの云つた言葉が面白い。「年に一二回猩猩が呑まれると結構ですネー」と。

強暴な印度の猿

米國の大學内には、外國の學生を打つて一團とするコスモポリタンクラブと云ふのがあつて、時折意見を交換したり、交情を暖めたりする會合を催すが、予が笈を負ふて居たスタンフォード大學にも、そのやうな銘を打つた團體があつた。或る日のこと、魚學者として有名な名譽總長ジョルダン博士の邸でその例會が開かれたが、列席した印度の學生の一人が、激越な口調で印度に於ける英國の暴政を難じ、轉じて有色人種に對する白人の壓迫を痛論し出した。眠れる如く椅子によつて居た博士は、學生の座に着くのを待つて靜に口を開き、「予は嘗つてその外貌を愛づるの餘り印度で一頭の猿を求めたが、馴るに従つてその本性を現はし、狂暴日につつて航海中一方ならず手を焼いた。依つて船がシドニーに入港するや、その猿を該地の動物園に寄附してしまつた」と述べて意味あり

動物園めぐり

不 定 芽

げに一座を見渡した。意外な方向からの巨弾には、さすがの愛國者も無言で首をうなだれた。

獅子に與ふる一片の肉

生き者を取扱ふ動物園でも、日曜は嚴重に守つて幹部が出勤しないのは、米國に於ける一般的風習であると云つてよい。

予がおとづれたシカゴ市の動物園もその通りであつたが、その結果として獅子その他の猛獸共は、土曜日の午後に日曜の分として食餌を與へられるのみで、日曜は絶食同様の目にあはされる。投餌の光景を見せると云ふので、園長に尾して猛獸室に赴いた予は、獅子や虎に與へられたる肉量の餘りに少ないのに驚いた。時は恰も土曜であつたので、それきり月曜の朝まで喰はせないでは慘酷だと云つたところが、園長はソッと予の肩を叩き、「君は動物飼育の妙諦を知らない素人だ」と云つて哄笑した。

「愛する積りで多く喰はせるのは駄目だ。運動不足のものが太り初めた時は、危険を孕むと考へねばならぬ。僕のやうな運動不足の巨漢に美食を與へて見給へ、肥えて肥えて次

はあの世へ行くばかりだ」と、彼は笑ひ乍ら語り出したが、成程仔犬に三度食を與へては決して満足に育たない。一日二食に限る、とは愛犬家の云ふところである。豈夫れ獸類のみならんや、攝食は健康の源であることは吾人に取つても全く同様である。腹八分目の眞意をかくして予は遠いシカゴで會得した。

ヒッポポタームス

ドロ／＼になつた水を湛えた大きな水槽のまはりに人だかりがしてゐる。異様な臭氣が鼻をつく室内に足を踏み入れて、己れも亦群集の一人となつてゐると、見つめてゐた水面がムク／＼と盛り上り、眼を光らした河馬の頭が口から鼻から水をザザッと流しながら勢よく浮び出た。鋭い牙がニュッと突き出てゐる大きな口を出来るだけ大きくあけて、誰かが投げてやつたビスケットの一片を有難そうに受けとめる。河馬の口と小さなビスケットとの對照が餘りに面白いので、觀衆はその場を去り兼ねて眺め入つてゐたが、よく／＼ひとみをすへて見つめて見ると、ヒッポの顔つきはまさに醜惡そのものである。

その昔どこかの法廷を賑はした河馬事件と云ふのがあつた。或るところに甲乙二人の友